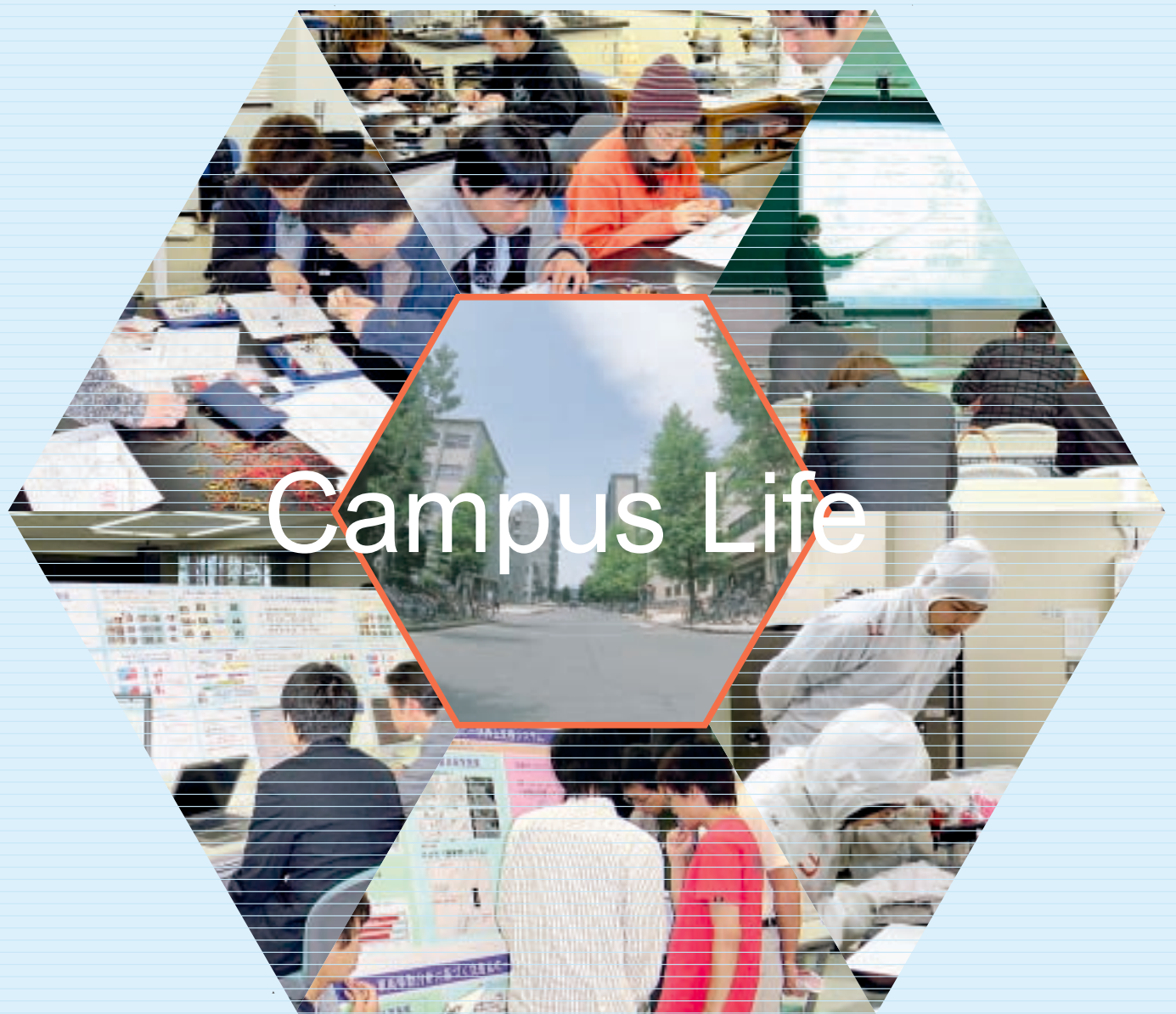


# キャンパス ライフ

The University of Tokushima

第1回大学院生生活実態調査報告書

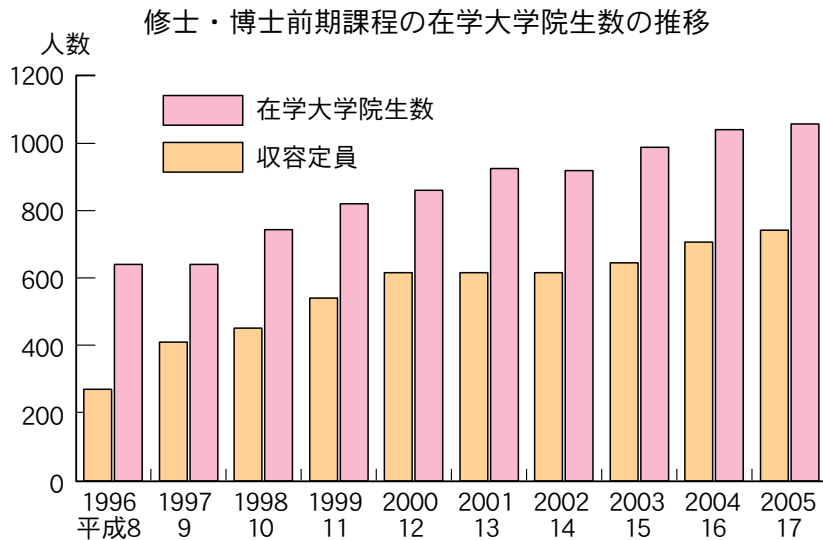


平成18年3月

徳島大学

# ま え が き

大学院教育が変革の時期を迎えている。本学における修士・博士前期課程の在学大学院生数をみても、ここ10年間に下図のようにほぼ倍増した。学部がマスからユニバーサルへと大衆化したことに同調して、大学院もマスの時代を迎えたといえよう。中央教育審議会からの答申「新時代の大学院教育」－国際的に魅力ある大学院教育の構築にむけて－にもあるように、教育内容の実質化と国際化を軸に、マスの時代にふさわしい大学院生が勉学しやすい環境作りが大切になってきたと言える。



さて、本学では今回初めて大学院修士課程および博士前期課程に在学する院生全員を対象に生活実態調査を行った。回収率は75%ということで、昨年度行った学部学生の生活実態調査同様、研究科・教育部といった単位で組織的に大学院生の多様な要望に対応いただく場合の資料として活用し、改善に役立てていただけるものと期待している。

大学院生の場合、研究科・教育部さらには専攻または所属する研究室によって勉学・研究環境はずいぶん異なる。今回は、目線を学生の視点に置いて経済的側面、健康・生活面、学修・研究・指導の状況、進路・就職面等の事項を調査した。睡眠時間の少ない院生がいるなど、個人的に気にかかる反面、院生の4割程度が海外渡航経験を持ち、学会発表などを行っている事実は、国際化が日常化してきたと頼もしく思える。今回は初めての調査ということもあって、学生の本音がどの程度回答に反映されているのかといったことも気になる。ともあれ、この報告書の結果を本学のできるだけ多くの方々にみていただき、建設的なご意見・ご提言をいただければ幸いである。

最後に、今回も企画・実施・分析を徳島大学学生支援センター学生生活支援室運営会議委員の各先生方と学務部職員の方々にしていただいた。ここに、野間隆文委員長をはじめとする関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表すとともに深く感謝いたします。また、本調査にご協力下さった大学院生のみなさんにも、この場を通じて感謝いたします。

平成18年3月

徳島大学理事（教育担当）

川 上 博

# 目 次

まえがき	1
序 章 大学院生生活実態調査の概要	4
1 調査の目的	4
2 調査の組織	4
3 調査の対象及び方法	4
4 調査の時期	4
5 調査の内容	4
6 調査票の回収状況	4
7 図中の%表示	4
8 研究科・教育部の略語表示	5
附表「平成17年度学生生活実態調査票」	6
第1章 家族・住居、通学について	15
1-1 家庭の年間所得	15
1-2 住居区分	15
1-3 住居費	16
1-4 住居の満足度	16
1-5 住居について	17
1-6 通学方法	17
1-7 通学時間	17
1-8 交通事故	18
第2章 収入・支出について	19
2-1 1か月の平均収入額	19
2-2 親等からの援助額	19
2-3 1か月の平均支出額	20
2-4 1か月の平均食費額	21
2-5 経済状況	22
2-6 奨学金	22
2-7 ティーチングアシスタント 1	23
2-8 ティーチングアシスタント 2	23
2-9 リサーチアシスタント 1	24
2-10 リサーチアシスタント 2	24
2-11 研究状況 1	24
2-12 研究状況 2	25
2-13 アルバイト	25
2-14 アルバイト従事日数	26
2-15 アルバイト従事時間数	26
2-16 アルバイトの目的	27
2-17 アルバイトの種類	27
2-18 アルバイト収入	28
2-19 アルバイトの紹介者	28

2-20	アルバイトにおけるトラブル	29
<b>第3章</b>	<b>健康状態について</b>	<b>31</b>
3-1	睡眠時間	31
3-2	気になる症状	32
3-3	症状の内容	32
3-4	主な悩みや不安	33
3-5	相談相手	34
3-6	現在の精神状態	35
3-7	保健管理センターの認識	36
3-8	保健管理センターの利用	36
<b>第4章</b>	<b>学生生活上の問題点について</b>	<b>38</b>
4-1	配偶者の有無と子供の世話	38
4-2	迷惑行為	39
4-3	指導教員との親密度	41
4-4	大学事務室の対応への満足度	41
4-5	盗難等犯罪被害	42
<b>第5章</b>	<b>修学状況について</b>	<b>43</b>
5-1	本学を選んだ理由と目的	43
5-2	研究活動と研究指導	44
5-3	研究環境と所属研究科・専攻に対する満足度	47
5-4	図書館の利用状況	49
5-5	海外渡航の経験と英会話	50
5-6	パーソナルコンピュータ	53
5-7	本学の教育への期待	53
<b>第6章</b>	<b>進路選択・就職について</b>	<b>55</b>
6-1	博士（後期）課程への進学希望	55
6-2	本学または他大学への進学	56
6-3	進路選択で重視するもの	57
6-4	進路を考える上での情報入手手段	57
6-5	希望職種	58
6-6	就職支援室の利用	59
<b>第7章</b>	<b>研究科・教育部の現状と課題</b>	<b>61</b>
7-1	人間・自然環境研究科（人間自然環境）	61
7-2	医科学教育部・医学研究科（医科学）	62
7-3	栄養生命科学教育部・栄養学研究科（栄養生命科学）	64
7-4	薬科学教育部・薬学研究科（薬科学）	65
7-5	工学研究科（工学）	66
<b>第8章</b>	<b>総括と提言</b>	<b>69</b>
	あとがき	71

# 序章 大学院生生活実態調査の概要

## 1. 調査の目的

この調査は、本学大学院生の生活の実状を把握し、今後の福利厚生施設等の改善並びに修学支援に資する基礎資料を得ることを目的として実施した。

## 2. 調査の組織

この調査は、徳島大学学生支援センター学生生活支援室運営会議の次の委員が中心となり調査を実施し、分析作業を行った。

区 分	氏 名	所 属	職 名
委 員 長	野 間 隆 文	大学院ヘルスバイオサイエンス研究部	教 授
委 員	石 村 和 敬	”	教 授
委 員	北 村 清一郎	”	教 授
委 員	中 馬 寛	”	教 授
委 員	石 田 三千雄	総 合 科 学 部	教 授
委 員	大 宅 薫	工 学 部	教 授
委 員	前 田 健 一	保 健 管 理 セ ン タ ー	助 教 授

## 3. 調査の対象及び方法

この調査は、本学大学院修士課程・博士前期課程に在学する学生全員1,031人（平成17年11月1日に在籍する者のうち休学者を除いた者）を調査対象とした。

調査方法は、各大学院の学務（教務）係及び学生委員会委員の協力を得て調査票を配布し、回答用紙（マークシート）を回収した。

## 4. 調査の時期

この調査は、平成17年11月1日から11月11日まで実施し、11月1日現在の実状について回答を依頼し、回答用紙の提出期限を11月14日までとした。

## 5. 調査の内容

調査項目は、大学院生の生活全般を把握できるように精選した。

## 6. 調査票の回収状況

調査票の回収状況は、調査対象者1,031人のうち回答数は771人で、回収率は74.8%であった。研究科・教育部・専攻別、学年別、男女別の回収状況は次表のとおりである。

## 7. 図中の％表示

端数処理の関係で合計が100%にならない場合がある。

### 8. 研究科・教育部の略語表示

本報告書中、研究科・教育部名を以下のとおり略語で記載する。

人間・自然環境研究科→人間自然環境

医科学教育部・医学研究科→医科学

栄養生命科学教育部・栄養学研究科→栄養生命科学

薬科学教育部・薬学研究科→薬科学

工学研究科→工学

平成 17 年度学生生活実態調査 集計表（大学院修士課程・博士前期課程）  
（研究科・教育部・専攻・学年別）

研究科・教育部名	専攻名	1 年				2 年				計				回収率	
		全 体		うち留学生		全 体		うち留学生		全 体		うち留学生		全体 %	うち 留学生 %
		在学者数	回答数	在学者数	回答数	在学者数	回答数	在学者数	回答数	在学者数	回答数	在学者数	回答数		
人間自然環境	人間環境	26	16	8	2	31	15	11	6	57	31	19	8	54.4	42.1
	自然環境	15	7	0	0	17	6	0	0	32	13	0	0	40.6	
	臨床心理学	9	1	0	0	19	7	0	0	28	8	0	0	28.6	
	計	50	24	8	2	67	28	11	6	117	52	19	8	44.4	42.1
医科学	医科学	17	12	0	0	18	12	2	2	35	24	2	2	68.6	100.0
	計	17	12	0	0	18	12	2	2	35	24	2	2	68.6	100.0
栄養生命科学	人間栄養科学	29	19	2	2	24	16	3	3	53	35	5	5	66.0	100.0
	計	29	19	2	2	24	16	3	3	53	35	5	5	66.0	100.0
薬科学	創薬科学 (薬品科学)	23	23	0	0	30	30	0	0	53	53	0	0	100.0	
	医療生命薬学 (医療薬学)	36	31	2	0	29	21	1	0	65	52	3	0	80.0	0
	計	59	54	2	0	59	51	1	0	118	105	3	0	89.0	0
工学	建設工学	36	27	1	1	29	25	0	0	65	52	1	1	80.0	100.0
	機械工学	57	41	0	0	51	39	1	1	108	80	1	1	74.1	100.0
	化学応用	46	35	0	0	54	38	1	1	100	73	1	1	73.0	100.0
	電気電子工学	64	60	1	1	58	52	2	2	122	112	3	3	91.8	100.0
	知能情報工学	70	67	7	7	61	53	8	7	131	120	15	14	91.6	93.3
	生物工学	23	17	1	0	31	25	0	0	54	42	1	0	77.8	0.0
	光応用工学	34	16	1	0	34	20	2	1	68	36	3	1	52.9	33.3
	エコシステム工学	31	22	2	2	29	18	0	0	60	40	2	2	66.7	100.0
計	361	285	13	11	347	270	14	12	708	555	27	23	78.4	85.2	
合計		516	394	25	15	515	377	31	23	1031	771	56	38	74.8	67.9

注) 在学者数欄は11月1日現在で、休学者を除いた数である。

#### <学年別>

学 年	全 体		回収率 全 体
	対象者数	回収数	
1 年	516	394	76.4
2 年	515	377	73.2
計	1031	771	74.8

#### <男女別>

研究科・教育部名	回 収 率		
	男	女	計
人間自然環境	43.8	44.9	44.4
医科学	62.5	73.7	68.6
栄養生命科学	45.5	71.4	66.0
薬科学	91.3	85.7	89.0
工学	77.4	86.5	78.4
計	75.8	71.5	74.8

# 平成 17 年度 学生生活実態調査

平成 17 年 11 月  
徳 島 大 学

## お 願 い

この調査は、みなさんの学生生活を把握し、今後の福利厚生施設等の改善並びに修学指導に資する基礎資料を得ることを目的として実施するものです。

本調査は、平成 17 年 11 月 1 日現在、本学に在学する大学院修士課程・博士前期課程学生全員を対象に行います。マークカードに無記名で記入していただき、他の目的に使用することはありませんので、ありのままを正確にお答えください。

質問事項も多く、大変とは思いますが、この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

**[調査実施期間 11月1日～11月11日]**

**回答用紙(マークカード)の提出期限は、11月14日(月)です。  
所属研究科(教育部)の学務(教務)係へ提出して下さい。**

### 回答記入上の注意事項

- 1 平成 17 年 11 月 1 日現在で記入してください。
- 2 回答用紙はマークカードです。回答内容の該当するものを一つだけ選んで、その番号を塗りつぶして回答してください。  
ただし、複数回答可を指定している場合は、複数選んでも差し支えありません。
- 3 質問中、回答者を指定している箇所は、指定された人のみ回答してください。
- 4 マークカードの裏面に自由記入欄を設けていますので、質問 44, 61, 71 について、及び大学内における学生生活全般について、気づいたことや要望したいこと、あるいは期待することがあれば、自由に記入してください。

## 学生生活実態調査票（大学院修士課程・博士前期課程）

### A. 基本的事項について

1	【全員】 性別はどちらですか。	1. 男 2. 女
2	【全員】 所属研究科・教育部はどこですか。	1. 人間・自然環境研究科      2. 医科学教育部（医学研究科） 3. 栄養生命科学教育部（栄養学研究科） 4. 薬科学教育部（薬学研究科）      5. 工学研究科
3	【全員】 専攻はどこですか。	人間・自然環境研究科 [1. 人間環境専攻    2. 自然環境専攻    3. 臨床心理学専攻] 医科学教育部・医学研究科 [1. 医科学専攻] 栄養生命科学教育部・栄養学研究科 [1. 人間栄養科学専攻（栄養学専攻）] 薬科学教育部・薬学研究科 [1. 薬品科学専攻（創薬科学専攻） 2. 医療薬学専攻（医療生命薬学専攻）] 工学研究科 [1. 建設工学専攻      2. 機械工学専攻 3. 化学応用工学専攻    4. 電気電子工学専攻 5. 知能情報工学専攻    6. 生物工学専攻 7. 光応用工学専攻      8. エコシステム工学専攻]
4	【全員】 何年生ですか。	1. 1年生 2. 2年生
5	【全員】 社会人または留学生ですか。	1. 社会人大学院生 2. 留学生 3. どちらでもない

### B. 家族・住居、通学について

6	【全員】 あなたの家庭の年収（税込み）はおよそどれくらいですか。	1. 250万円未満      2. 250～500万円未満 3. 500～750万円未満    4. 750～1,000万円未満 5. 1,000～1,500万円未満    6. 1,500万円以上
7	【全員】 あなたの住居区分はどれですか。	1. 自宅（家族と同居）      2. アパート・マンション（家族と別居） 3. 国際交流会館      4. 間借り 5. 親戚・知人宅      6. その他
8	【国際交流会館入居者を除く自宅外通学者】 1か月の家賃（電気代、ガス代等諸費用を除く）はいくらですか。	1. 3万円未満      2. 3万円～4万円未満 3. 4万円～5万円未満    4. 5万円～6万円未満 5. 6万円～7万円未満    6. 7万円～8万円未満 7. 8万円～9万円未満    8. 9万円～10万円未満 9. 10万円以上
9	【国際交流会館入居者を除く自宅外通学者】 現在の住居に満足していますか。	1. 満足している      2. やや満足している 3. どちらともいえない    4. やや不満足である 5. 不満足である



10	【問9で「4」「5」を選んだ方】 その理由はどれですか。 (複数回答可)	1. 狭い 3. 通学に不便 5. 周りの環境が良くない	2. 家賃が高い 4. 日常生活に不便 6. その他
11	【全員】 あなたの主な通学方法は 何ですか。	1. 徒歩 3. バイク(原付自転車・自動二輪) 5. バス・JR	2. 自転車 4. 自動車
12	【全員】 通学時間はどれですか。	1. 15分未満 3. 30分～1時間未満 5. 2時間以上	2. 15分～30分未満 4. 1時間～2時間未満
13	【全員】 通学中に交通事故をおこ したことがありますか。	1. ある 2. ない	
14	【全員】 通学中に交通事故の被害 にあったことがあります か。	1. ある 2. ない	

C. 収入・支出について

15	【全員】 あなたの1か月の平均収 入額(親等からの援助を 除く)はいくらですか。	1. 3万円未満 3. 5～7万円未満 5. 10～15万円未満 7. 20～25万円未満 9. 30万円以上	2. 3～5万円未満 4. 7～10万円未満 6. 15～20万円未満 8. 25～30万円未満
16	【全員】 親等からの援助はいくら ありますか。	1. 全くない 3. 3～5万円未満 5. 7～10万円未満 7. 15～20万円未満	2. 3万円未満 4. 5～7万円未満 6. 10～15万円未満 8. 20万円以上
17	【全員】 あなたの1か月の平均支 出額(授業料支出は除く) はいくらですか。	1. 3万円未満 3. 5～7万円未満 5. 10～15万円未満 7. 20～25万円未満 9. 30万円以上	2. 3～5万円未満 4. 7～10万円未満 6. 15～20万円未満 8. 25～30万円未満
18	【全員】 1か月の平均の食費はど のくらいですか。	1. 2万円未満 3. 3～4万円未満 5. 5～7万円未満	2. 2～3万円未満 4. 4～5万円未満 6. 7万円以上
19	【全員】 現在の経済状況はどうで すか。	1. ゆとりがある(親等からの仕送りのみ) 2. 普通(あまり不自由を感じない) 3. やや苦しい(奨学金や軽度のアルバイトで充足できる) 4. 大変苦しい(定期的なアルバイトが必要である)	
20	【全員】 奨学金を受けることを希 望しますか。	1. 現在受給中であるが、更に希望する 2. 現在受給していないが、希望する 3. 現在受給していないし、希望もしない	
21	【全員】 TAをしていますか。	1. 現在している 2. 希望しているが、従事していない 3. 希望しない	

22	【問 21 で「1」を選んだ方】 TA の業務は何ですか。 (複数回答可)	1. 実験補助      2. 講義補助 3. 演習補助      4. その他
23	【全員】 RA をしていますか。	1. 現在している      2. 希望しているが、従事していない 3. 希望しない
24	【問 23 で「1」を選んだ方】 RA の業務は何ですか。 (複数回答可)	1. 実験補助      2. 講義補助 3. 演習補助      4. その他
25	【全員】 1 週間に平均何日大学に来ますか。	1. 1 日      2. 2 日 3. 3 日      4. 4 日 5. 5 日      6. 6 日以上
26	【全員】 1 日に平均何時間大学にいますか。	1. 4 時間未満              2. 4～6 時間未満 3. 6～8 時間未満          4. 8～10 時間未満 5. 10～12 時間未満       6. 12 時間以上
27	【全員】 現在、アルバイトをしていますか。	1. はい 2. いいえ
28	【問 27 で「1」を選んだ方】 ① 1 週間の平均従事日数は何日ですか。	1. 1 日              2. 2 日 3. 3 日              4. 4 日 5. 5 日以上
29	【問 27 で「1」を選んだ方】 ② 1 週間の従事時間は平均何時間ですか。(移動に要する時間も含む)	1. 5 時間未満              2. 5～10 時間未満 3. 10～15 時間未満       4. 15～20 時間未満 5. 20～25 時間未満       6. 25 時間以上
30	【問 27 で「1」を選んだ方】 ③ アルバイトは主にどのような目的でしていますか。 (複数回答可)	1. 生活費や学費のため      2. 学会参加のため 3. レジャー・旅行費のため 4. 日常の娯楽・嗜好品等購入のため 5. 高額商品 (パソコン、バイク、自動車等) 購入のため 6. 社会体験のため 7. その他
31	【問 27 で「1」を選んだ方】 ④ どのようなアルバイトをしていますか。 (複数回答可)	1. 家庭教師・学習塾講師等      2. 受付・接客 3. イベントスタッフ補助          4. 商品販売 5. 商品等整理・包装              6. 飲食店等手伝い 7. その他
32	【問 27 で「1」を選んだ方】 ⑤ あなたのアルバイトによる収入 (1 か月平均) はいくらですか。	1. 3 万円未満              2. 3～5 万円未満 3. 5～7 万円未満          4. 7～10 万円未満 5. 10～15 万円未満       6. 15 万円以上



E. 学生生活上の問題点

43	【全員】 あなたには現在、生計を共にしている配偶者・子供がいますか。	1. 配偶者なし、子供なし 2. 配偶者なし、子供あり 3. 配偶者あり、子供なし 4. 配偶者あり、子供あり								
44	【問43で「2」「4」を選んだ方】 授業や研究をしているとき、子供の世話は誰がみていますか。 (複数回答可)	1. 配偶者 2. 親や親戚 3. 保育施設にあずける 4. 小学校等の学校に通っている 5. その他 (注：要望事項があれば、回答用紙の裏面の自由記入欄に書いてください)								
45	【全員】 あなたは、クーリング・オフの制度について知っていますか。	1. はい 2. いいえ								
<p style="text-align: center;"><b>クーリング・オフとは</b></p> <p>普通、一度成立した契約は一方的に解消できないが、分割払いの割賦販売、セールスマンによる訪問販売などで勧誘にのせられ、つい不要なものの購入契約をした消費者が、一定の期間(通常8日間)内なら違約金無しに契約の解除(契約申し込みの解除)ができるという制度</p>										
46	【全員】 あなたは、これまで迷惑行為を受けたことがありますか。 (複数回答可)	<table border="0"> <tr> <td>1. 受けたことはない</td> <td>2. 悪徳商法に引っかかった</td> </tr> <tr> <td>3. いたずら電話を受けた</td> <td>4. ストーカーにあった</td> </tr> <tr> <td>5. 大学内でセクハラを受けた</td> <td>6. 大学内でアカハラを受けた</td> </tr> <tr> <td>7. 飲酒を強要された</td> <td>8. その他</td> </tr> </table>	1. 受けたことはない	2. 悪徳商法に引っかかった	3. いたずら電話を受けた	4. ストーカーにあった	5. 大学内でセクハラを受けた	6. 大学内でアカハラを受けた	7. 飲酒を強要された	8. その他
1. 受けたことはない	2. 悪徳商法に引っかかった									
3. いたずら電話を受けた	4. ストーカーにあった									
5. 大学内でセクハラを受けた	6. 大学内でアカハラを受けた									
7. 飲酒を強要された	8. その他									
<p style="text-align: center;"><b>アカハラ(アカデミック・ハラスメント)とは</b></p> <p>大学などで、指導教員が学生に対し、教育・研究活動への妨害を含めた学習・研究上の嫌がらせを継続的に行うこと。</p>										
47	【問46で「5」を選んだ方】 誰に相談しましたか。 (複数回答可)	<table border="0"> <tr> <td>1. 友人</td> <td>2. 家族</td> </tr> <tr> <td>3. 教員</td> <td>4. 学生相談室</td> </tr> <tr> <td>5. 学務(教務)係</td> <td>6. 1～5以外の人</td> </tr> <tr> <td>7. 誰にもしない</td> <td></td> </tr> </table>	1. 友人	2. 家族	3. 教員	4. 学生相談室	5. 学務(教務)係	6. 1～5以外の人	7. 誰にもしない	
1. 友人	2. 家族									
3. 教員	4. 学生相談室									
5. 学務(教務)係	6. 1～5以外の人									
7. 誰にもしない										
48	【問46で「6」を選んだ方】 誰に相談しましたか。 (複数回答可)	<table border="0"> <tr> <td>1. 友人</td> <td>2. 家族</td> </tr> <tr> <td>3. 教員</td> <td>4. 学生相談室</td> </tr> <tr> <td>5. 学務(教務)係</td> <td>6. 1～5以外の人</td> </tr> <tr> <td>7. 誰にもしない</td> <td></td> </tr> </table>	1. 友人	2. 家族	3. 教員	4. 学生相談室	5. 学務(教務)係	6. 1～5以外の人	7. 誰にもしない	
1. 友人	2. 家族									
3. 教員	4. 学生相談室									
5. 学務(教務)係	6. 1～5以外の人									
7. 誰にもしない										
49	【全員】 学生相談室を利用したことがありますか。 (複数回答可)	<table border="0"> <tr> <td>1. 利用したことがある</td> <td>2. 学生相談室があるのは知っているが、利用したことがない</td> </tr> <tr> <td>3. 学生相談室を知らない</td> <td>4. 今後、何かあれば利用したい</td> </tr> </table>	1. 利用したことがある	2. 学生相談室があるのは知っているが、利用したことがない	3. 学生相談室を知らない	4. 今後、何かあれば利用したい				
1. 利用したことがある	2. 学生相談室があるのは知っているが、利用したことがない									
3. 学生相談室を知らない	4. 今後、何かあれば利用したい									
50	【全員】 指導教員と研究以外のことで話しをしますか。	<table border="0"> <tr> <td>1. 度々ある</td> <td>2. たまにある</td> </tr> <tr> <td>3. まったくない</td> <td></td> </tr> </table>	1. 度々ある	2. たまにある	3. まったくない					
1. 度々ある	2. たまにある									
3. まったくない										
51	【問50で「3」を選んだ方】 話しをしない理由はどれですか。	<table border="0"> <tr> <td>1. 話すことがない</td> <td>2. 話しにくい</td> </tr> <tr> <td>3. 話したくない</td> <td>4. その他</td> </tr> </table>	1. 話すことがない	2. 話しにくい	3. 話したくない	4. その他				
1. 話すことがない	2. 話しにくい									
3. 話したくない	4. その他									

52	【全員】 大学事務室の対応に満足していますか。	1. 満足している 3. どちらともいえない 5. 不満足である	2. やや満足している 4. やや不満足である
53	【全員】 あなたは、入学以来、盗難（盗み）、強盗、傷害、痴漢事件の被害に遭ったことがありますか。	1. はい 2. いいえ	
54	【問 53 で「1」を選んだ方】 あなたが被害にあったのは次のどれですか。 (複数回答可)	1. 盗難（盗み） 3. 傷害 5. その他	2. 強盗 4. 痴漢
55	【問 54 で「1」を選んだ方】 あなたは、どこで盗難（盗み）の被害にあいましたか。 (複数回答可)	1. 大学構内 3. その他	2. 自宅、アパート

#### F. 修学状況

56	【全員】 あなたが本学大学院に入学した主な理由は何ですか。 (複数回答可)	1. 出身大学だから 3. 指導教員に勧められたから 5. 就職等将来を考慮して 7. 希望する就職先がなかったから 9. 先輩や友人に勧められて	2. 希望する研究分野があるから 4. 地元の大学だから 6. 国立大学だから 8. ただ何となく 10. その他
57	【全員】 大学院で勉学することにより、あなたの目指すものは何ですか。	1. 高度な専門的知識・能力を持つ、高度専門職業人 2. 創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ、研究者 3. 確かな教育能力と研究能力を兼ね備えた、大学教員 4. 知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある社会人 5. その他	
58	【全員】 授業以外の自分で行う研究活動は週何時間ですか。	1. 30分未満 3. 90分～5時間未満 5. 10時間以上	2. 30～90分未満 4. 5～10時間未満
59	【全員】 研究の直接の指導教員は誰ですか。	1. 教授 3. 講師 5. その他	2. 助教授 4. 助手
60	【全員】 指導教員から週何時間ぐらい研究指導を受けていますか。	1. 30分未満 3. 90分～5時間未満 5. 10時間以上	2. 30～90分未満 4. 5～10時間未満
61	【全員】 あなたは研究指導に対して満足していますか。 (注：「4」「5」を選んだ方は、回答用紙の裏面の自由記入欄に理由を書いてください)	1. 満足している 3. どちらともいえない 5. 不満足である	2. やや満足している 4. やや不満足である

62	【全員】 現在の研究環境についての満足度はどの程度ですか。	1. 満足している 3. どちらともいえない 5. 不満足である	2. やや満足している 4. やや不満足である
63	【問62で「4」「5」を選んだ方】 その理由はどれですか。 (複数回答可)	1. 施設・設備 3. 研究時間	2. 研究費用 4. その他
64	【全員】 あなたは所属している研究科・専攻に全体として満足していますか。	1. 満足している 3. どちらともいえない 5. 不満足である	2. やや満足している 4. やや不満足である
65	【全員】 図書館をどのくらいの頻度で利用しますか。	1. ほぼ毎日利用している 2. 1週間に2～3回ぐらい利用する 3. 1週間に1回程度利用する 4. 2週間に1回程度利用する 5. 1か月に1回程度利用する 6. 半年に1回程度利用する 7. 1年に1回程度か、それ以下の利用頻度である	
66	【日本人の方】 入学後、海外渡航をしたことがありますか。	1. ない 3. 2回 5. 4回以上	2. 1回 4. 3回
67	【問66で「2」「3」「4」「5」を選んだ方】 海外渡航の目的はどれでしたか。 (複数回答可)	1. 留学 3. 学会参加 5. 社会活動 7. その他	2. 語学研修 4. 学術調査 6. 観光
68	【日本人の方】 英語の会話はどの程度できますか。	1. 専門用語を使った会話ができる 3. なんとか日常会話ができる 5. できない	2. 日常会話ができる 4. あまりできない
69	【日本人の方】 語学力を高めるために何をしていますか。 (複数回答可)	1. 英会話等の学校に通っている 2. ラジオ・テレビの英会話番組で学習している 3. TOEIC TOEFL 等を受験する 4. 外国語の新聞、雑誌を購読している 5. 外国のラジオ、テレビを視聴している 6. つとめて外国人と英語でコミュニケーションする 7. 何もしていない	
70	【全員】 自分のPC（パーソナルコンピュータ）を持っていますか。	1. 持っている 2. 持っていない	
71	【全員】 あなたの将来のために、本学の教育に何を望みますか。 (複数回答可)	1. 学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修するコースワーク 2. 複数の教員による多様な視点に基づく教育・研究指導 3. 企業等での長期間の実践的なインターンシップ 4. 高度な水準にある他大学院等での勉学あるいは研究の機会 5. 産業界、地域社会との積極的な連携、共同研究 6. 個々の教員の教育・研究指導能力の向上 7. その他(回答用紙の裏面の自由記入欄に具体的に書いてください) 8. 特にない	

G. 進路選択・就職について

72	【全員】 博士（後期）課程への進学を考えていますか。	1. 進学したい（進学予定者を含む） 2. 奨学金等の経済的支援があれば進学したい 3. 未定 4. 進学しない
73	【問72で「1」「2」を選んだ方】 それは本学ですか、他大学ですか。	1. 本学 2. 他大学 3. 未定
74	【全員】 進路選択で重視するものは何ですか。 (複数回答可)	1. 収入 2. 就職先の将来性・安定性 3. 社会的評価 4. 能力を発揮できること 5. 勤務地の地理的条件 6. 研究評価をしてもらえるところ 7. 先端技術を駆使しているところ
75	【全員】 進路を考える上での情報入手手段は何ですか。 (複数回答可)	1. 指導教員 2. 就職担当教員 3. 先輩・知人 4. 直接会社に照会 5. 就職情報誌・新聞・マスコミ 6. 家族等 7. 大学内資料 8. その他
76	【全員】 希望職種は何ですか。 (複数回答可)	1. 大学・官公庁の教育・研究職 2. 1以外の公務員 3. 技術職 4. 事務職 5. 企業等の研究職 6. 教育職 7. マスコミ関係 8. 専門職（医師等） 9. その他
77	【全員】 本学の就職支援室を利用したことがありますか。	1. 現在も利用している 2. 以前に利用したことがある 3. 利用したことがない

ご協力ありがとうございました

# 第1章 家族・住居，通学について

## 1-1 家庭の年間所得 (図1-1)

家庭の年間収入について、全体では250万円～500万円未満(25%)と500～750万円未満(24%)でほぼ半数を占め、次いで750～1000万円未満(18%)、250万円未満(17%)、1000～1500万円未満(11%)、1500万円以上(2%)となっている。回答者のほぼ75%が工学研究科の学生なので、その結果が全体の結果に大きく影響している。また、回答者のうち男子が77%、女子23%(実数:男子590人、女子181人)であり、男子の結果が全体の結果に大きく影響するが、500万円未満のグループについて見ると男女の間に大きな差はない。すなわち、250万円未満では男子16%、女子19%、250万円～500万円未満は男子25%、女子24%となっている。

参考までに、研究科別の比率も出したが、薬科学と工学以外は実数が小さいので、この結果をそのまま比較するのは適当ではない。医科学における250万円未満の学生の比率が高いのは、社会人大学院生の比率の高さと関連しているものとも考えられる。

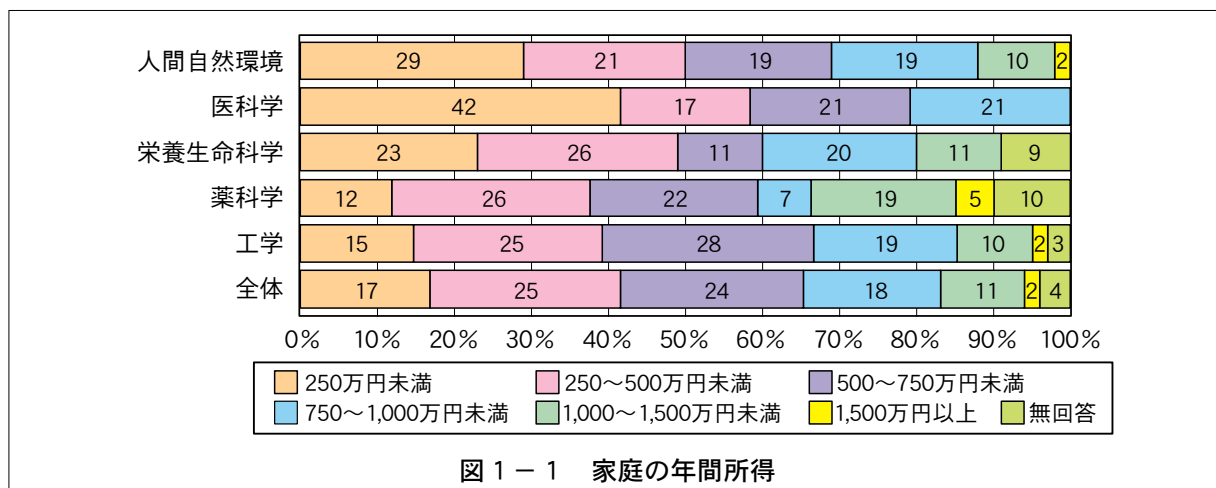


図1-1 家庭の年間所得

## 1-2 住居区分 (図1-2)

全体では、アパート・マンションが最多の68%で、自宅の27%がこれに次ぎ、この両者で95%を占める。国際交流会館入居者は実数で10人である。ここでも工学の結果が全体の結果に大きく影響して

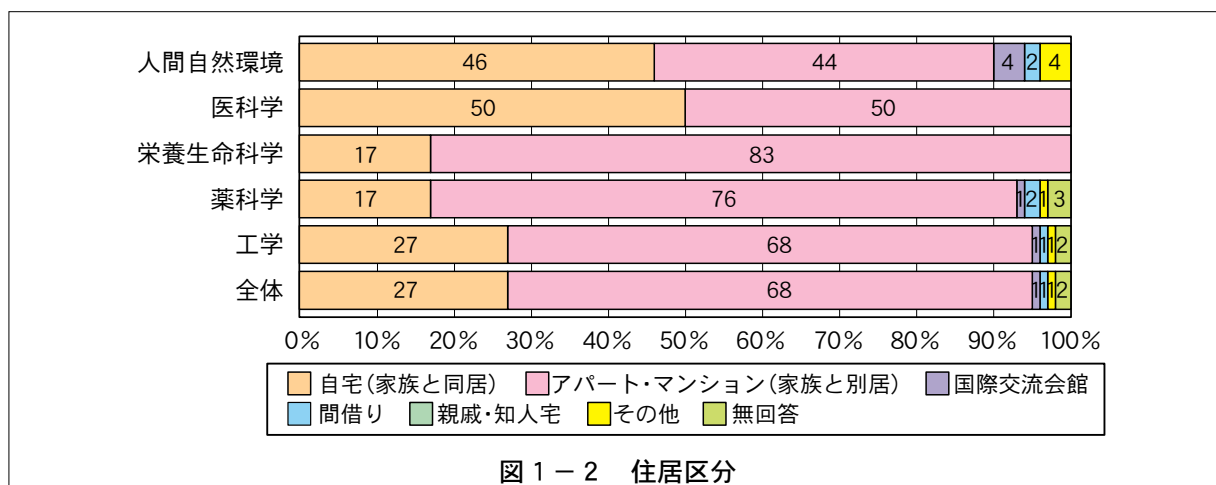


図1-2 住居区分



いる。率だけで見ると、栄養生命科学ではアパート・マンションが83%と、自宅の17%を大きく上回り、人間自然環境や医科学では両者がほぼ拮抗している。男女別で見ると、女子では自宅が34%と男子の25%を大きく上回る。学部学生の場合同様、女子では地元の大学院に進学する率が高いということが関係していると思われる。

### 1-3 住居費 (図1-3)

全体では4万円～5万円未満が39%で最も多く、次いで3万円～4万円未満(29%)、3万円未満(17%)、5万円～6万円未満(11%)と続く。6万円以上の所に住んでいるのは少数である。男女別でも全体の傾向はほぼ同じである。研究科別で見ると、栄養生命科学、薬科学では4万円～5万円未満にそれぞれ48%、45%とさらに多くなっている。これに対し、人間自然環境では3万円未満が最も多く、医科学では3万円～4万円未満が最も多い。ただし、実数が少ないのでこの結果から何らかの結論を導き出すのは難しい。強いて言うなら、学部学生の場合同様に薬科学では家庭の収入が多い傾向があることを反映しているのかも知れない。

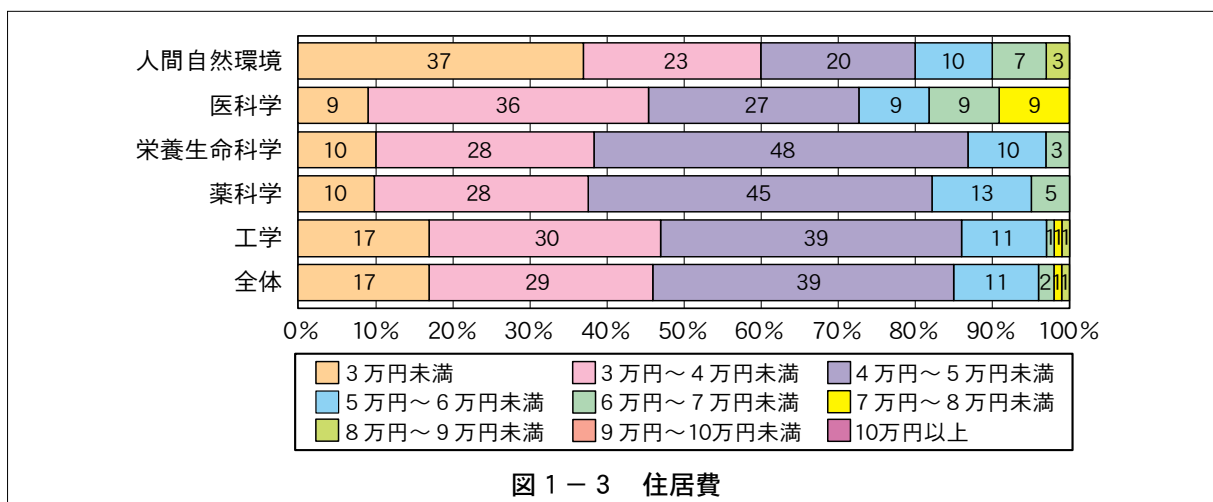


図1-3 住居費

### 1-4 住居の満足度 (図1-4)

全体では「満足している」が44%で最も多く、これに「やや満足している」の27%が続く。「不満足」の6%と「やや不満足」の11%と合わせても17%で、大体の学生は現状に満足していると推測できる。

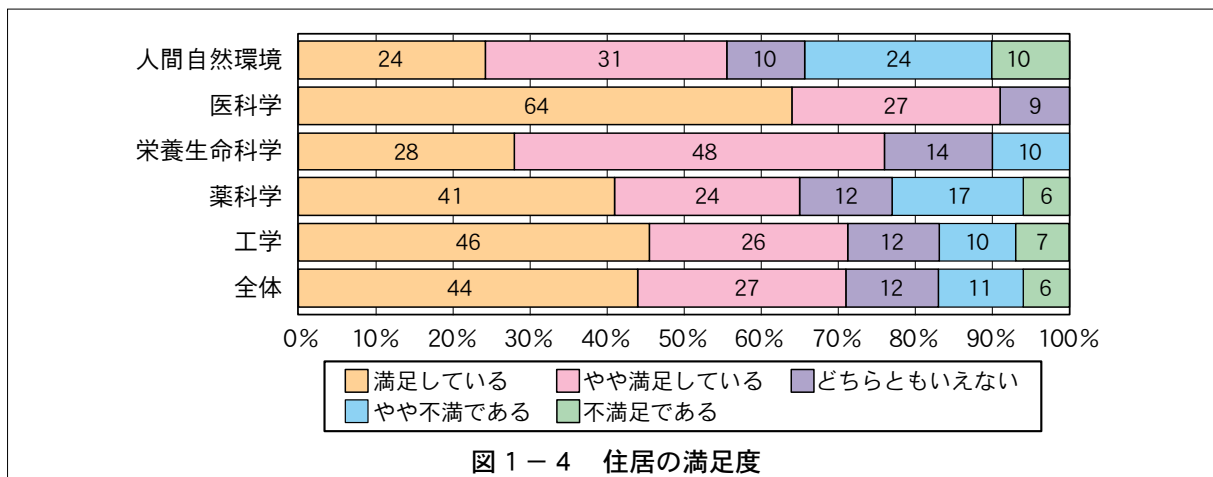
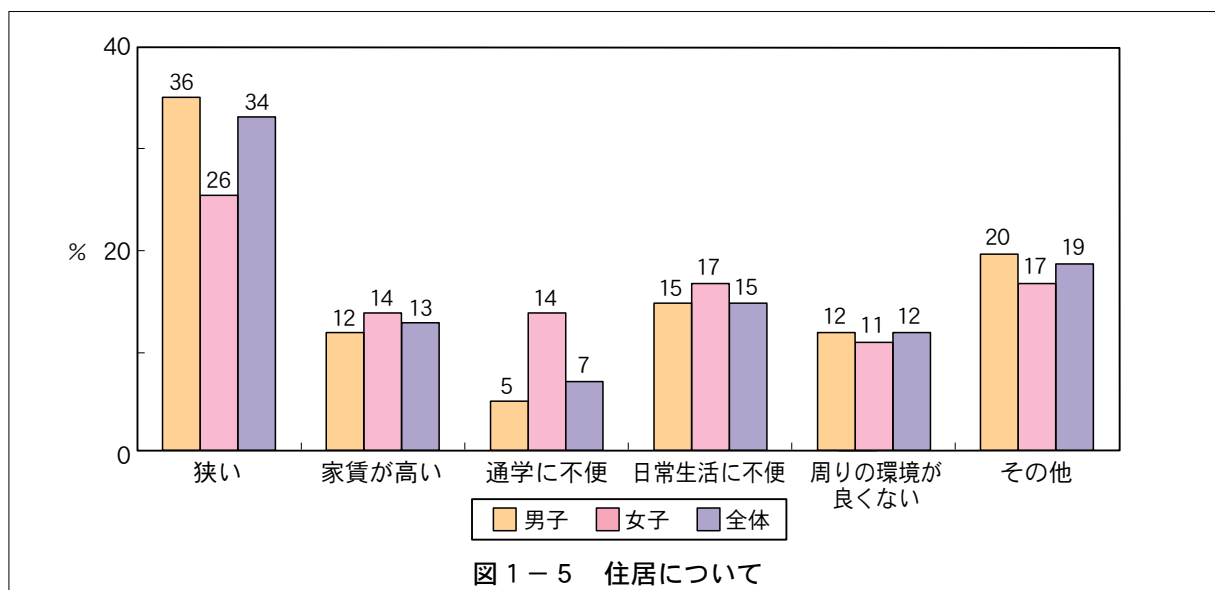


図1-4 住居の満足度

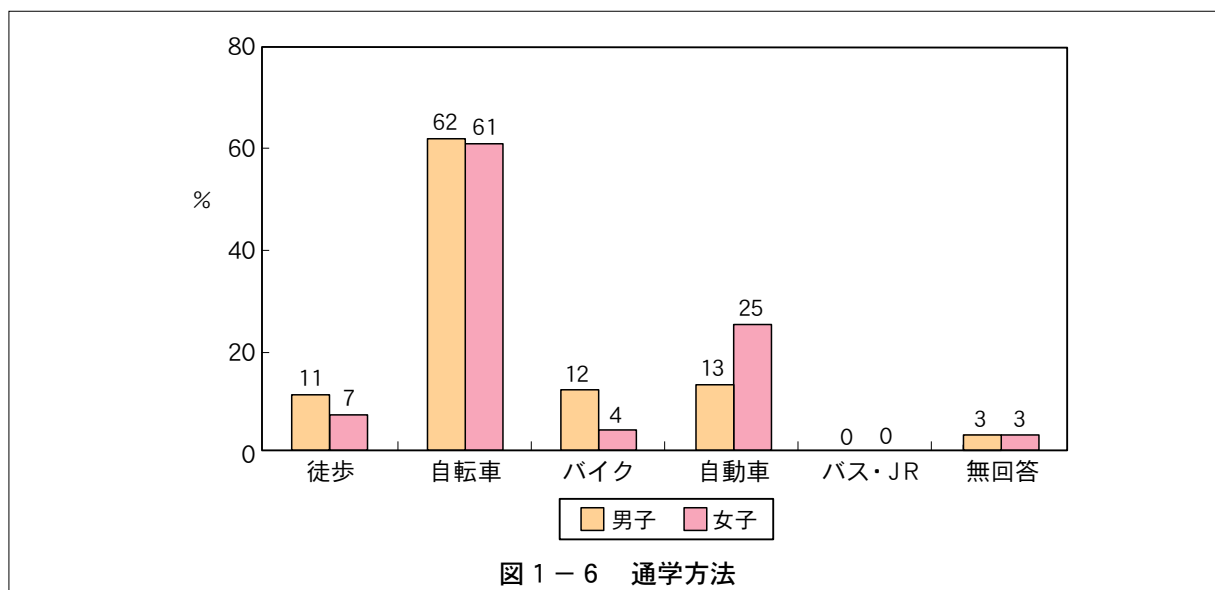
### 1-5 住居について (図1-5)

住居の不満足な点についての質問である。最も多いのは「狭い」ということで、次いで「日常生活に不便」、「家賃が高い」、「周りの環境が良くない」などが続く。「通学に不便」は比較的少ない。



### 1-6 通学方法 (図1-6)

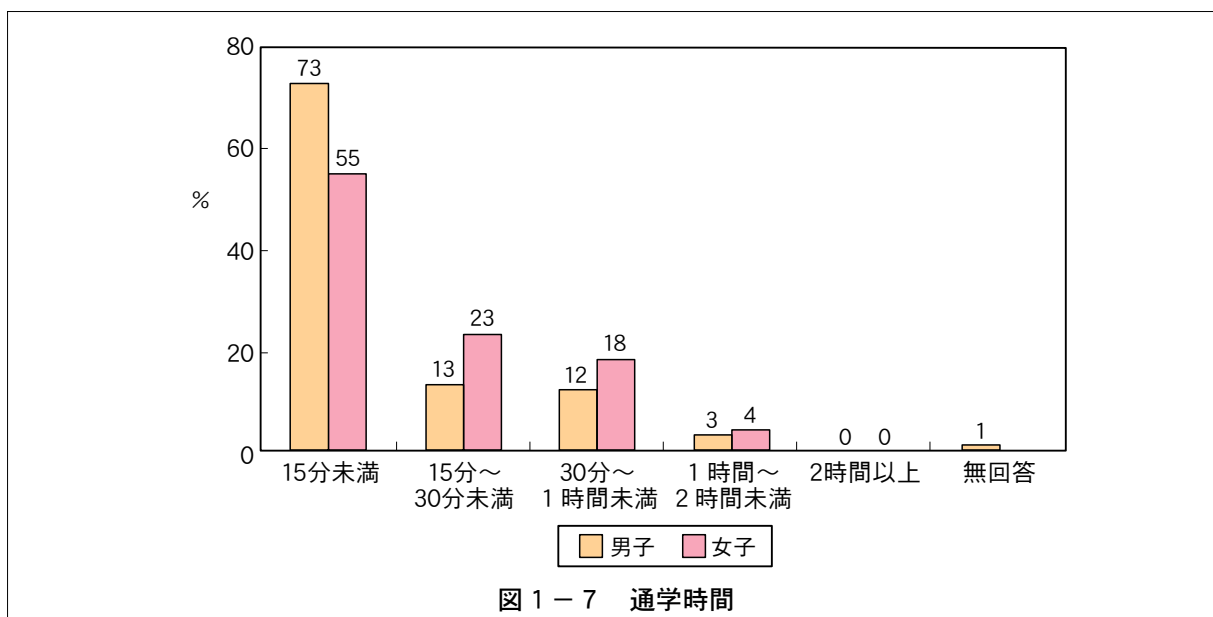
自転車通学が62%で最も多く、これに自動車が16%で続く。徒歩、バイク（原付自転車・自動二輪）はいずれも10%ほどである。自転車が多いのは男女とも差がないが、自動車は女子で比較的多く(25%)、バイクは男子で多い(12%)。上の質問の結果と合わせると、多くの学生が自転車で通学できる範囲内に住んでおり、結果として通学に不便を感じていない、ということであろう。医科学を除いて、研究科による違いはほとんどない。医科学については母数が少ないので比較が困難である。



### 1-7 通学時間 (図1-7)

15分未満が68%を占める。次いで15分～30分未満15%、30分～1時間未満13%である。1時間

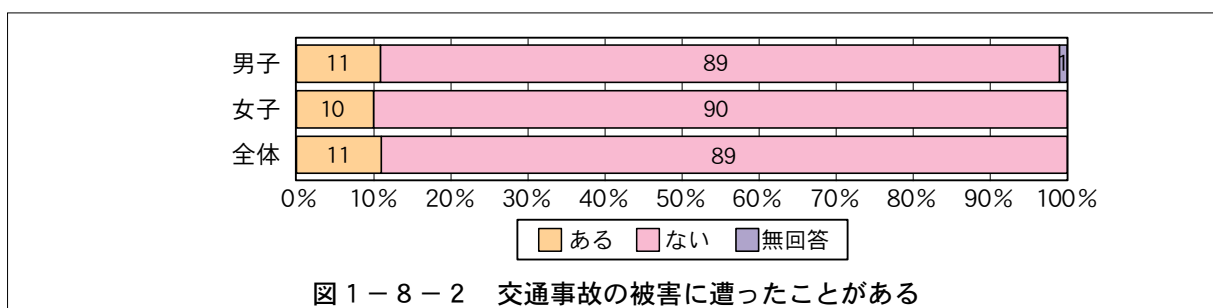
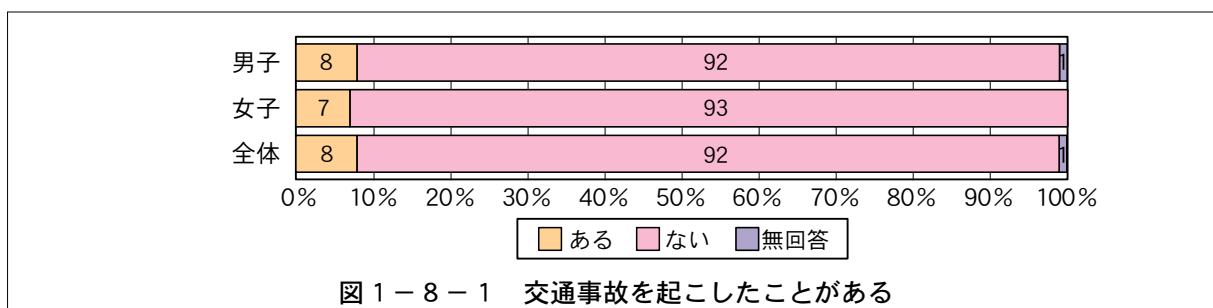
～2時間は3%に過ぎない。男女別で見ると、女子でやや時間のかかるほうへずれている。この理由はこの結果だけではわからない。研究科別では栄養生命科学、薬科学、工学は全体の傾向と同じであるが、人間自然環境、医科学はやや時間がかかるほうへシフトしている。自宅から通学しているか、少し遠くても住居費の安い所から通学しているということであろうか。



### 1-8 交通事故 (図 1-8-1, 図 1-8-2)

全体で約8%の学生が交通事故を起こし(図 1-8-1), 約11%の学生が交通事故の被害に遇っている(図 1-8-2)。

両方とも若干男子に多いが、その差はほとんどないと言って差し支えない。医科学では通学距離の長い学生が多いが、その割に事故の率が低い。しかし、学生数が少なく、その理由を推測することは困難である。栄養生命科学でも事故の率は低い。薬科学では事故を起こす学生は少ないが、事故の被害に遇った学生が多い。いずれもその理由を推測するのは困難である。



## 第2章 収入・支出について

### 2-1 1か月の平均収入額 (図2-1-1, 図2-1-2)

親等からの援助を除いた平均収入額は3万円未満が全体の過半数の52%をしめている。収入額の増加にしたがいその比率は減少している。3万円未満の回答は栄養生命科学では66%であり、他の研究科の33～55%と比較するとやや際立った割合となっている。全体ではあまり差が見られなかった男女差が現れ、栄養生命科学の男女構成人比（男子，女子はそれぞれ5，30名）による可能性もある。逆に薬科学（男子，女子はそれぞれ63，42名）においては5万円以上が48%をしめている。研究科ごとのばらつきはあるが、全体の過半数の平均収入額が3万円未満である結果は、親からの援助額とアルバイト収入額及び2-5（経済状況）の回答結果を考え合わせると過半数の大学院生は必要最低限の収入状況にあると判断できる。図2-1-2に一般大学院生，社会人大学院生，留学生別での割合を示したが、3万円未満の割合が一般大学院生で過半数をしめ、留学生では5～7万円の割合が最も大きいことが分かる。

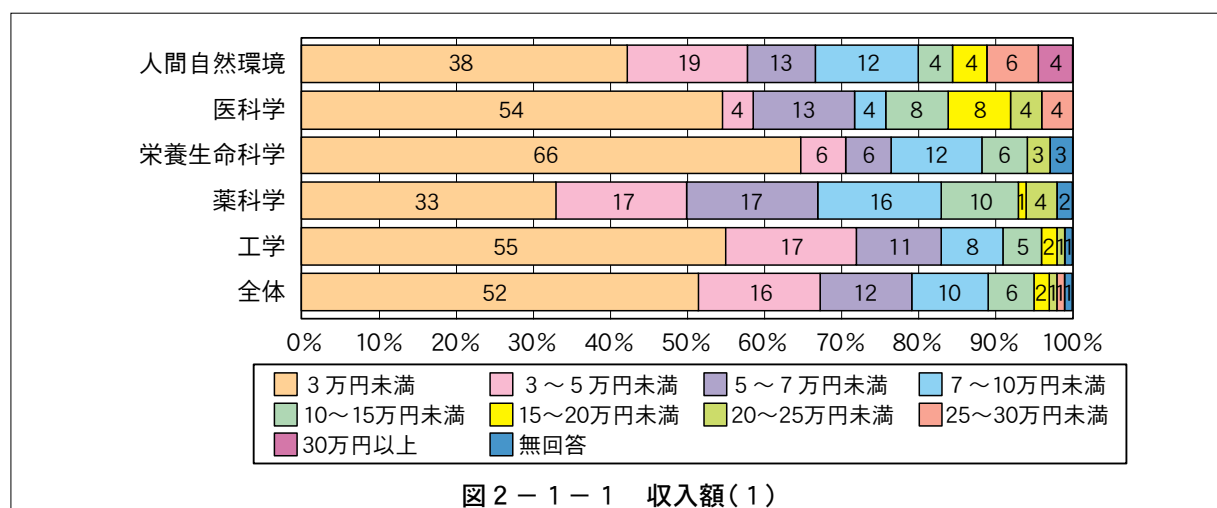


図2-1-1 収入額(1)

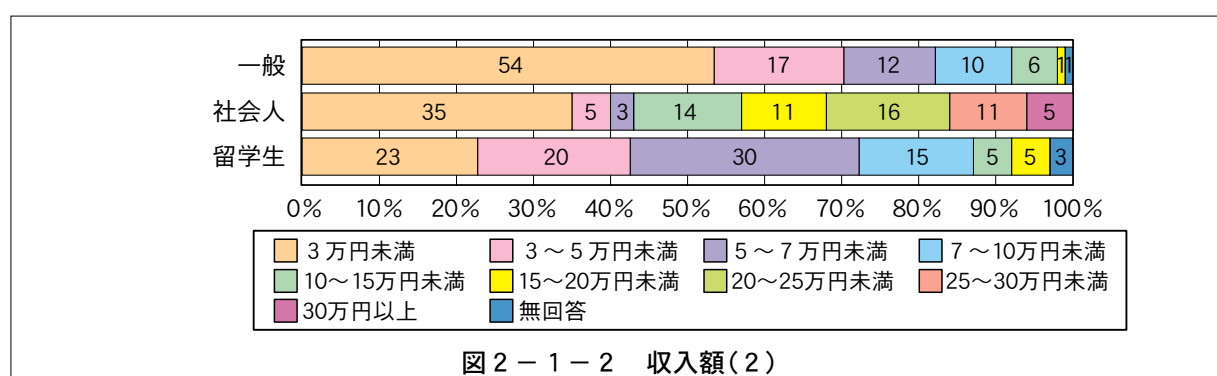
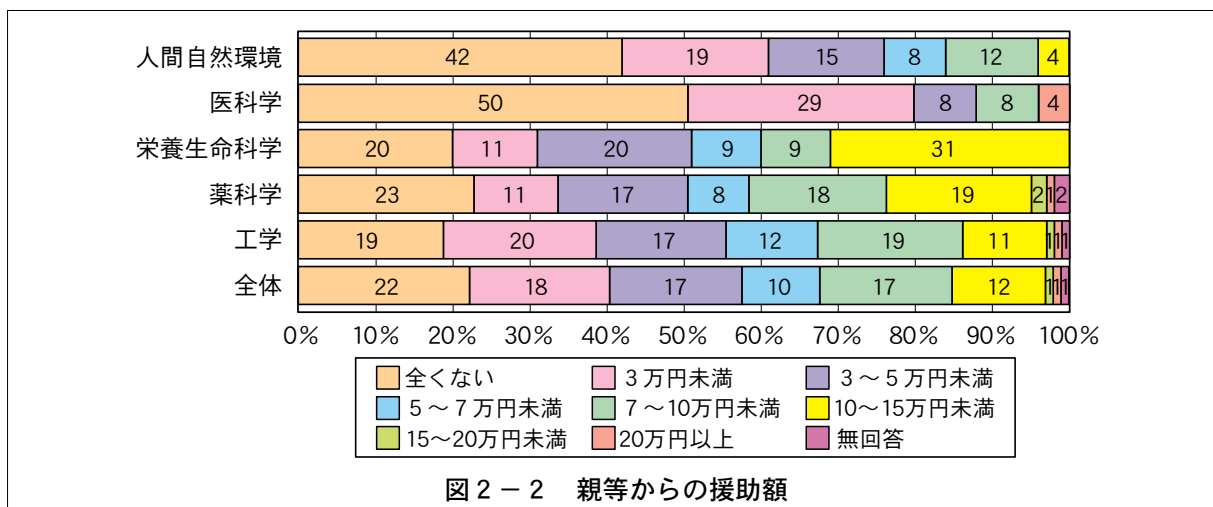


図2-1-2 収入額(2)

### 2-2 親等からの援助額 (図2-2)

全体では「援助額が全くない」が22%と最も多く、次に3万円未満が18%と続き、これら二つを合わせると40%に達し、半数近くの大学院生がある程度自活した生計をたてていると考えられる。「全くない」の回答についての男子は20%、女子は29%で、やや女子のほうが多い割合になっている。研究科別に見ると医科学の50%、人間自然環境の42%が「援助が全くない」の回答であり、工学の19%、

栄養生命科学の20%、薬科学の23%と比較すると大きな開きがある。この結果は、1-2(住居区分)の項目に示されているように、この二研究科の回答の約半数が自宅通学(家族と同居)であることと対応すると思われる。また医科学での高い割合は社会人大学院生が多いことと関連している可能性も考えられる。



### 2-3 1か月の平均支出額 (図 2-3-1~図 2-3-3)

授業料を除いた平均支出額は、全体では3万円未満(16%)、3~5万円(21%)、5~7万円(21%)、7~10万円(23%)、10~15万円(16%)と、ほぼ同じ割合で分布し、男女差はあまり大きく出ていない。医科学では3万円未満が最も多く33%をしめる。逆に栄養生命科学では10万円未満の割合が66%をしめている。同じ医療関連の研究科でありながら異なる割合であることについては、次回はアンケート設問設定の工夫もあわせ、さらなる調査と検討が必要と思われる。また昨年度実施された学部学生を対象とする生活実態調査の結果(第22回学生生活実態調査報告書、キャンパスライフ、平成17年3月号)においては3万円未満が28%と最も多く、大学院生の支出額が学部学生に比較して増加していることが読み取れる。

図 2-3-2 に全体についての1か月の平均収入額(2-1)と平均支出額の分布を対比する形で示した。収入額が3万円未満の割合が過半数であるのに対して、支出額はそれを超える額であることが分かり、親からの援助やティーチングアシスタントやアルバイトによる収入が大学院生の生活において一般に不可欠であることが読み取れる。

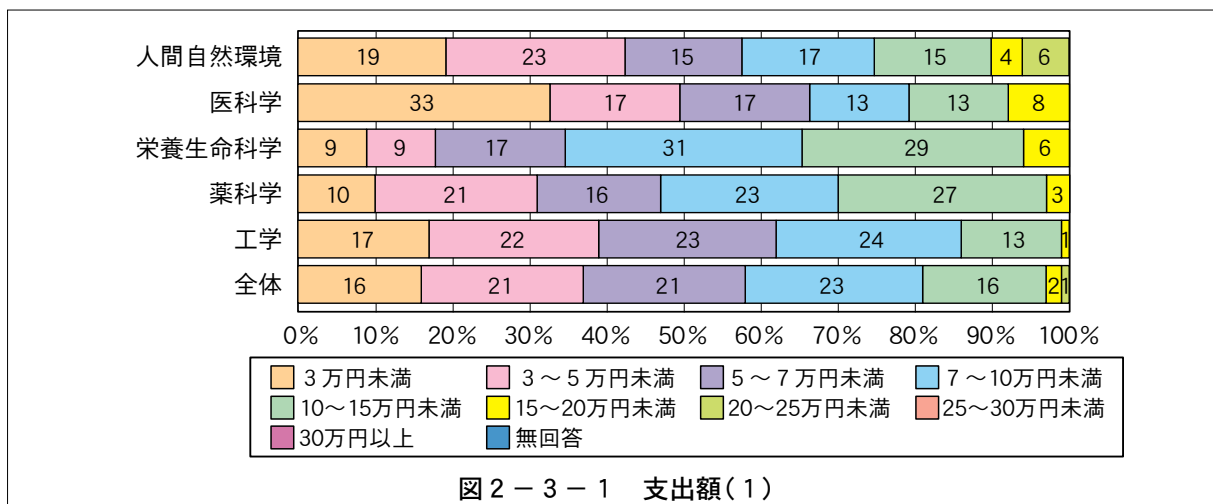
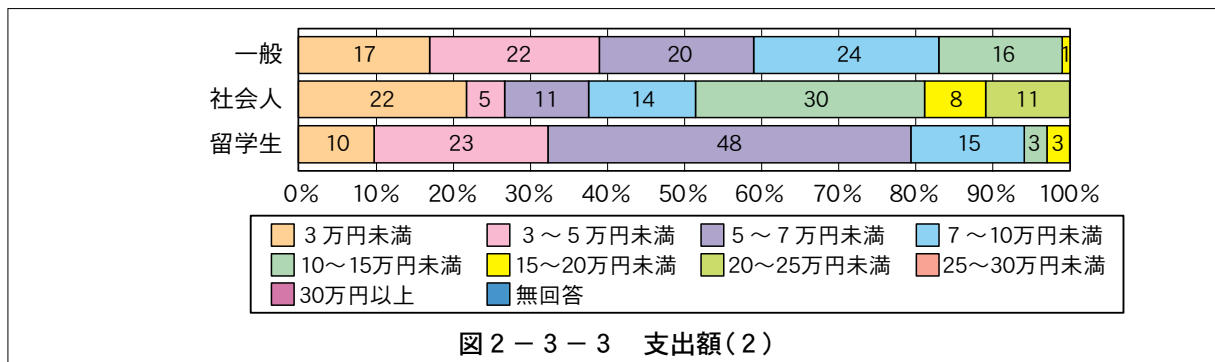
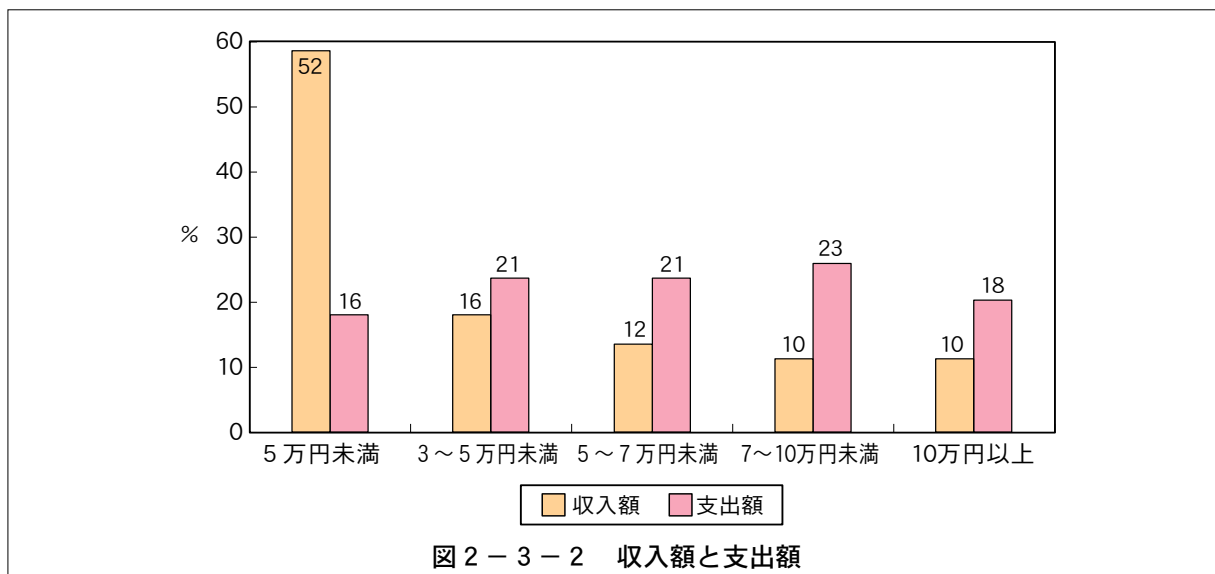
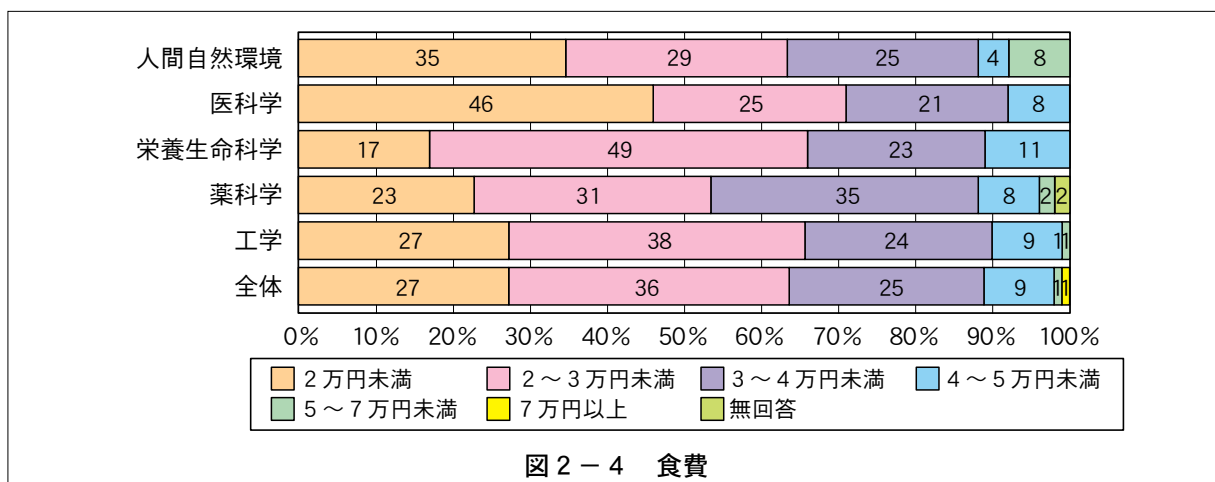


図2-3-3から留学生の半数近くが5～7万円の支出で、一般、社会人に比較してその割合が大き  
いことが分かる。留学生の場合は日本での生活一般により費用がかかると推定される。



## 2-4 1か月の平均食費額 (図2-4)

全体では食費支出額は2～3万円が最も多く、単純に考えれば一日あたり約700～1000円となる。男女差はあまり顕著ではないが2万円未満の回答では女子の割合が35%と男子の24%を上回っている。食費額そのものより外食、自炊等の別を含む食事の質が重要であり、この関連調査も別途必要と思われる。医科学の46%が2万円未満と最も多い割合となっているが、1-2(住居区分)の項目における医科学の自宅通学(家族と同居)の割合の50%とほぼ一致している。



## 2-5 経済状況 (図2-5)

全体の78%が、「普通」または「やや苦しい」の回答で、平均的大学院生は「必要最低限の経済状況」であることが読み取れる。学部学生への調査結果では「普通」または「やや苦しい」の回答は79%であり、ほぼ同じ割合となっている。「大変苦しい」の回答は常三島キャンパスの人間自然環境の15%、工学の12%に対して、蔵本キャンパスの3研究科では3~8%の範囲にあり、二つのキャンパスで少し異なる結果であることが分かる。常三島と蔵本キャンパス間の大学院生の微妙な意識の差もあろうが、何よりも自宅/自宅外通学者の割合との関連が示唆され、今後より多面的なアンケートによる分析と検討が必要と思われる。また「大変苦しい」と「やや苦しい」を合わせた割合は各研究科で38%から54%の範囲にあり、全体でも41%をしめ、やはり半数近くの大学院生の経済状況は「苦しい」と判断できる。留学生からの回答数は38件と少ないもののそのうち10名が「苦しい」、16名が「大変苦しい」と回答し、過半数の26名が「苦しい」状況で、留学生に対する経済援助の検討が急務と思われる。

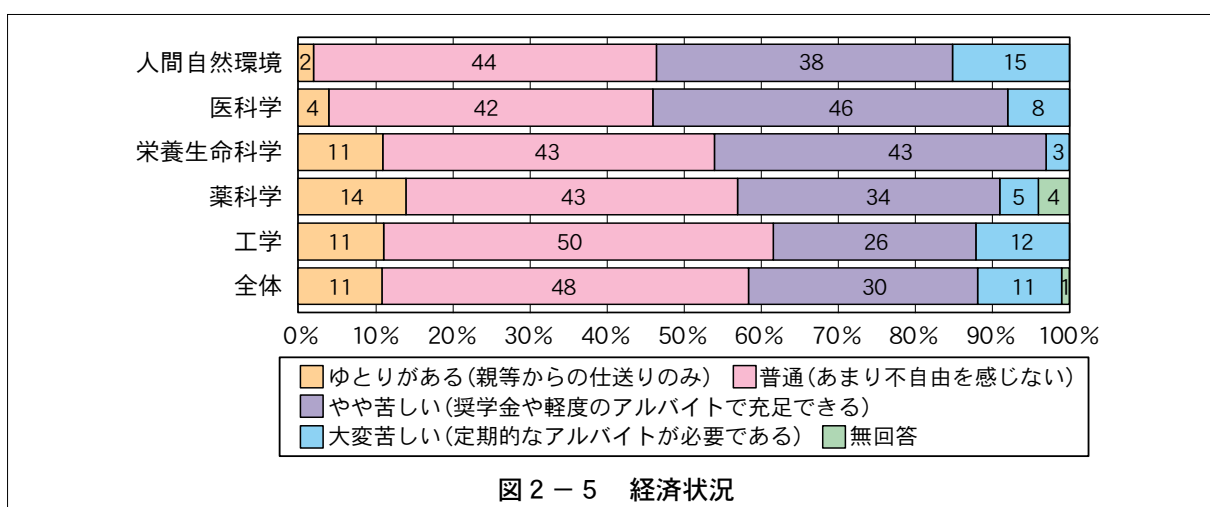


図2-5 経済状況

## 2-6 奨学金 (図2-6)

「現在受給中であるが、更に希望する」の回答は全体で35%であり、また「現在受給していないが希望する」の回答は14%をしめ、現在奨学金受給の有無にかかわらず「希望する」が約半数となる。できる限り奨学金受給希望者への対応が必要であろう。研究科ごとのばらつきは少ないが、栄養生命科学において「現在受給中であるが、更に希望する」の回答が46%と最も高い割合となっている。

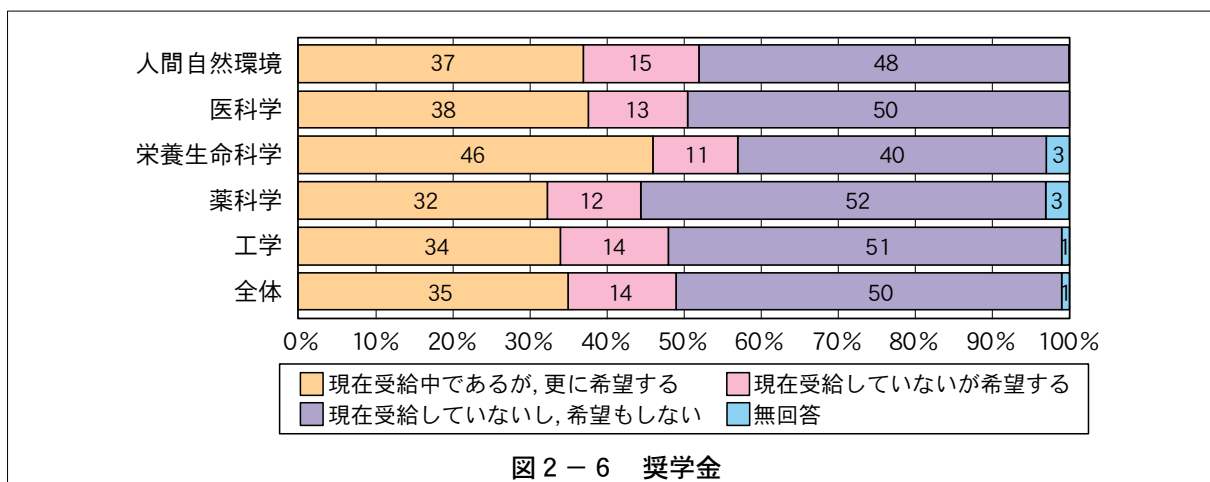


図2-6 奨学金

## 2-7 ティーチングアシスタント1 (図2-7-1, 図2-7-2)

ティーチングアシスタント (TA) を「現在している」との回答は全体では44%と半数近くをしめ、男女別では女子が52%と男子の42%より多くなっている。一方、「希望しない」も36%と全体の約1/3を占めている。研究科ごとに見ると栄養生命科学の86%がTAに従事し、次いで医科学の63%となっている。一方、薬科学は14%と最低の割合となっている。一概には判断できないが、2-5の回答を考え合わせると、TAの枠を広げ大学院生への経済的援助をできる限り行うべきであろう。

図2-7-2から留学生のTAへの従事率が一般大学院での45%に比較して35%と低く、また留学生の45%がTAを希望していることが分かる。言葉等の問題もあろうが、できるだけ希望にそうよう配慮することも必要であろう。

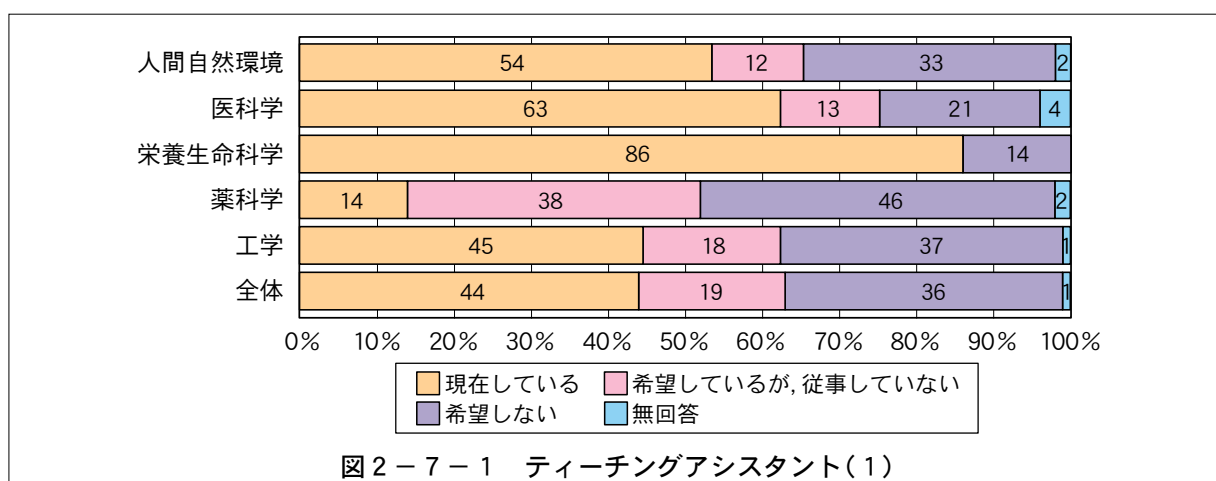


図2-7-1 ティーチングアシスタント(1)

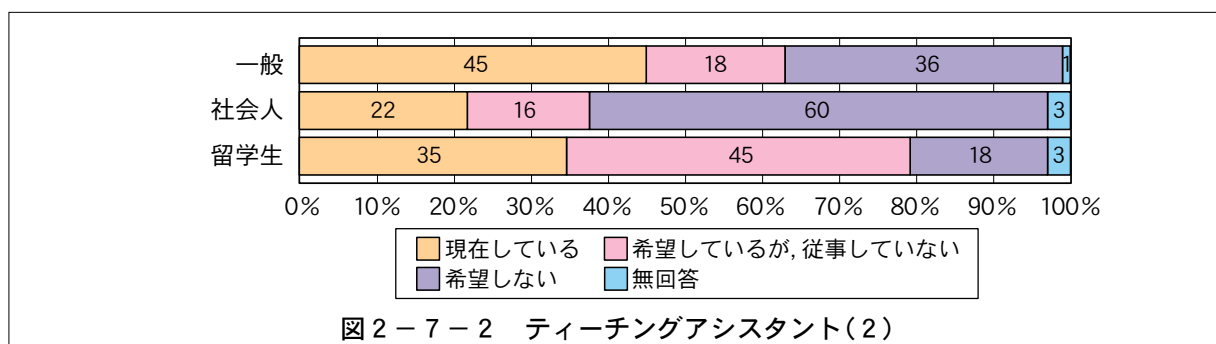
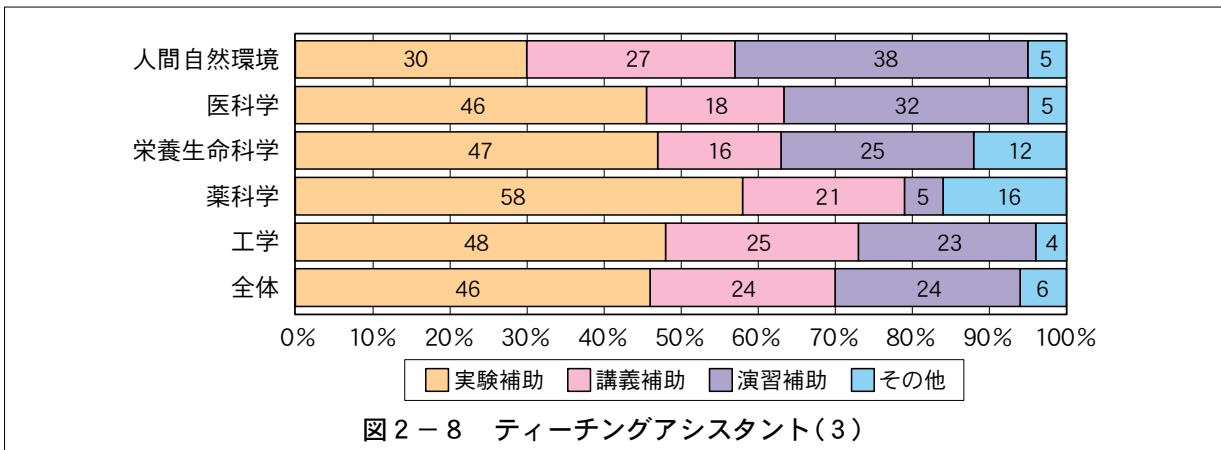


図2-7-2 ティーチングアシスタント(2)

## 2-8 ティーチングアシスタント2 (図2-8)

複数回答が可能な設問である。TAの業務内容は講義補助が最も多いと予想していたが、全体の回答者の46%がTAの業務内容として実験補助と回答している。各研究科でのTAの業務内容の違いはそれぞれの学部のカリキュラムに依存していると思われるが、総合科学部(人間自然環境)では実験補助、講義補助、演習補助の中で演習補助が38%と最も多く、総合科学部のカリキュラムの特性に起因する結果とも思われる。





## 2-9 リサーチアシスタント 1

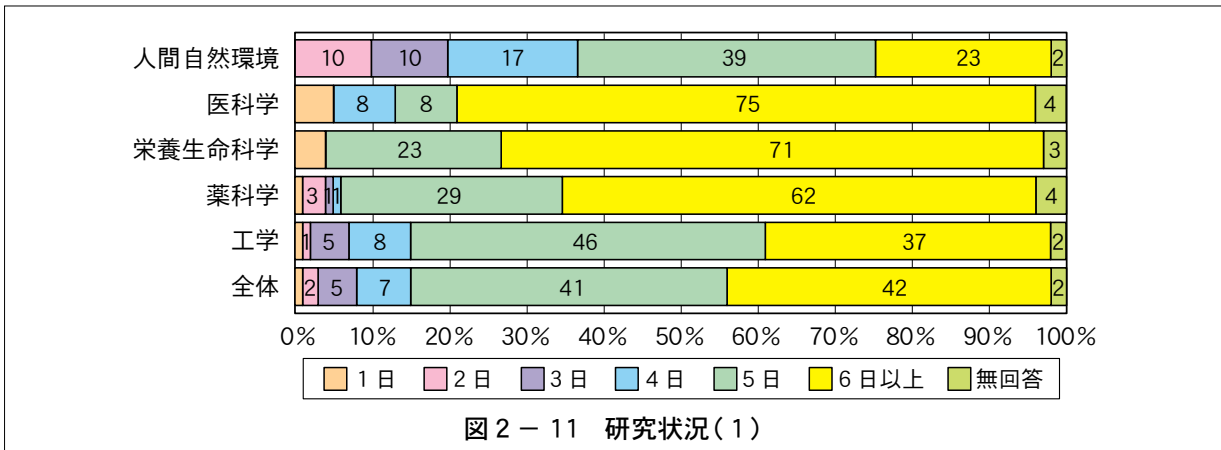
リサーチアシスタント (RA) を「現在している」との回答は全体では極めて少人数である。この結果は TA に対して RA が主に博士後期課程の大学院生を対象としていることによる。また、全体の 13% が RA を希望する結果となっている。各研究科によって RA と TA の業務に対するとらえ方の差はあるが、大学院生への RA 及び TA の業務についての説明と周知が必要と思われる。

## 2-10 リサーチアシスタント 2

RA の業務内容 (実験補助, 講義補助, 演習補助, その他) を問うアンケートはその母数が小さく、何らかの傾向や結論を導き出せるものではない。このアンケート項目は次回アンケート調査において博士後期課程の大学院生を対象として行うべきであろう。

## 2-11 研究状況 1 (図 2-11)

全体では、週 5 日が 41% (男子 44%, 女子 34%) と週 6 日以上が 42% (男子 40%, 女子 53%) でほとんどをしめ、一般的な勤務日数あるいはそれ以上に大学に来ていることが分かる。医科学で週 6 日以上の 75% をトップに栄養生命科学で 71%, 薬科学で 62% であり常三島キャンパスの二研究科に比較して大きな割合である。この結果は蔵本キャンパスの特性の一端を表わしているとも思われる。



## 2-12 研究状況2 (図2-12-1, 図2-12-2)

全体では6～8時間未満が26%（男子30%，女子13%）と最も多いが，研究科間でばらつきがある。医科学で10時間以上が71%，栄養生命科学で77%，薬科学で59%と蔵本キャンパスの3研究科は常三島キャンパスの二研究科と比較して大きな割合となっている。この結果は2-11の結果と同様に蔵本キャンパスの特性の一端を表わしていると思われる。また，上記の蔵本キャンパスの研究科と比較すると，10時間以上の割合は人間自然環境で8%，工学で24%であり，これら二つの研究科のカリキュラムと関連している可能性も示唆される。図2-12-2に一般大学院生，社会人大学院生，留学生別の割合を示したが，社会人では研究時間の時間的制約があることが読み取れ，また留学生では6～8時間が最も多く，10時間以上は23%となっている。

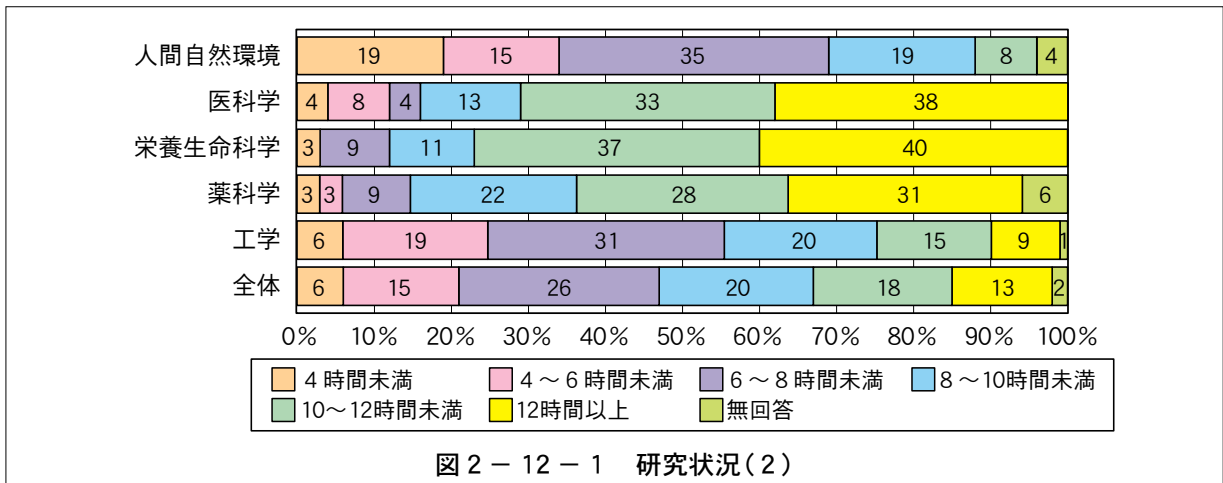


図2-12-1 研究状況(2)

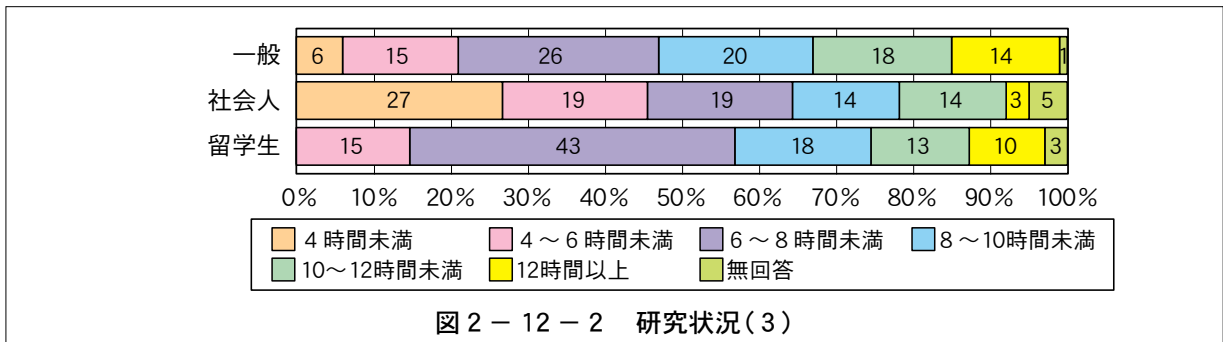
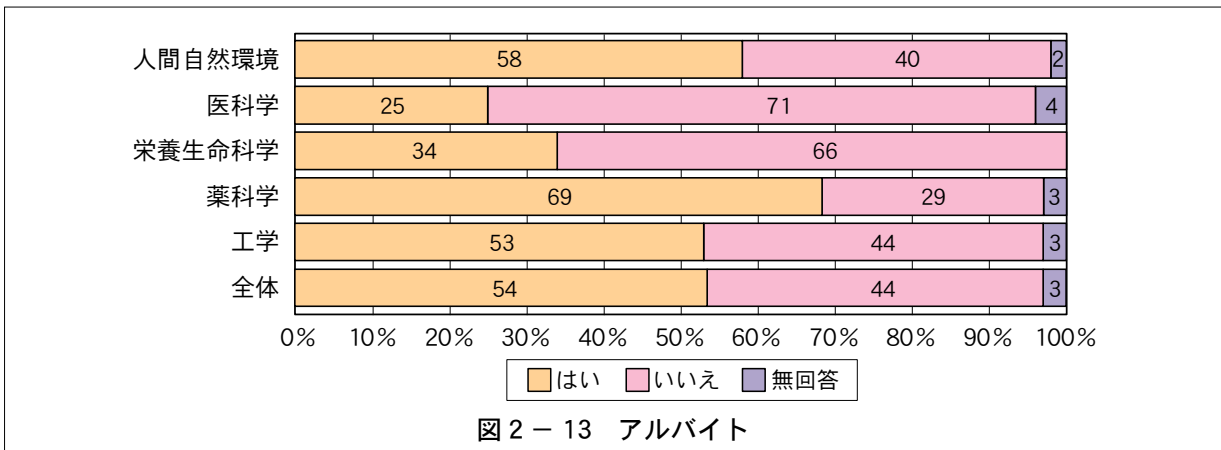


図2-12-2 研究状況(3)

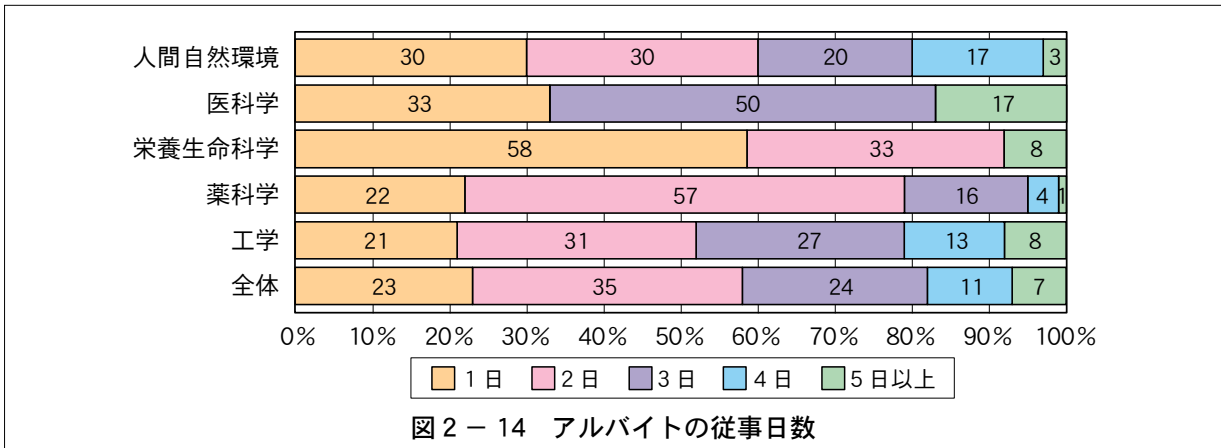
## 2-13 アルバイト (図2-13)

全体では過半数の54%が何らかのアルバイトに従事している（一般大学院生，社会人大学院生，留学生での割合はそれぞれ55%，22%，58%）。「アルバイトに従事している」の回答は女子が62%と男子の53%より高い割合になっている。また学部学生への調査結果でもアルバイトに従事している割合は58%でほぼ同じ割合である。研究科別に見ると薬科学の69%がアルバイトに従事し，最も大きな割合になっている。この結果は薬剤師免許を持っていることにより薬局等での時間当たり比較的高収入のアルバイトが可能であることを反映していると思われる。医科学と栄養生命科学では「アルバイトをしていない」が過半数をしめ，研究状況(1)(2-11)と対応させるとこれらの研究科に所属する大学院生のアルバイトに対する時間的制約がその理由とも考えられる。



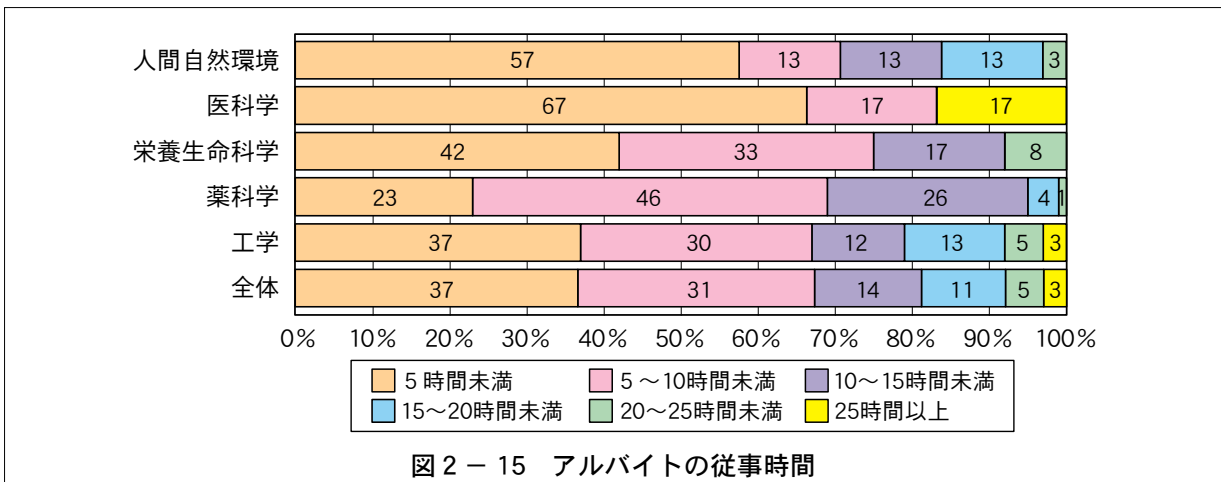
## 2-14 アルバイト従事日数 (図 2-14)

全体では週 2 日が 35% と最も多く、週 4 日以上は 18% となっている。週 2 日以下は栄養生命科学では 91%、薬科学では 79% と比較的短時間のアルバイト従事日数となっているが、残りの研究科ではやや多くなっている。この理由は栄養生命科学及び薬科学の大学院学生の専門性と関連して時間あたりの収入が比較的良いことと関係している可能性がある。



## 2-15 アルバイト従事時間数 (図 2-15)

全体では週 10 時間未満が 68% で、男女差はあまりない。週 10 時間未満の割合は学部学生への調査結



果（49%）と比較して多くなっている。この理由は研究活動のための時間的制約と解釈できよう。また10時間未満が勉学及び研究時間に影響を及ぼさない実際上の範囲と推定される。一方、20時間以上の長時間アルバイトは8%と少ない割合ではあるが、アルバイトの目的に関連させ、長時間アルバイトの内容について検討し、大学側の何らかの対応が必要と思われる。

## 2-16 アルバイトの目的 (図2-16)

複数回答が可能な設問である。アルバイトの目的として最も多いのは「生活費や学費のため」であり、全体として38%をしめる。これを昨年度実施された学部学生を対象とした調査結果の28%と比較するとやや多い割合となっている。また2-5（経済状況）の結果で示された「やや苦しい」あるいは「大変苦しい」の割合の合計41%と比較するとやや低い割合がほぼ対応していると考えられる。生活費や学費のため「アルバイトをせざるをえない状況」が全体の1/3以上であることを強く認識すべきである。逆に「日常の娯楽・嗜好品購入のため」、「レジャー・旅行費のため」がそれぞれ23%、13%とトップの「生活費や学費のため」が続いていることは、学生の経済状況がほぼ二層化していることを反映している可能性がある。

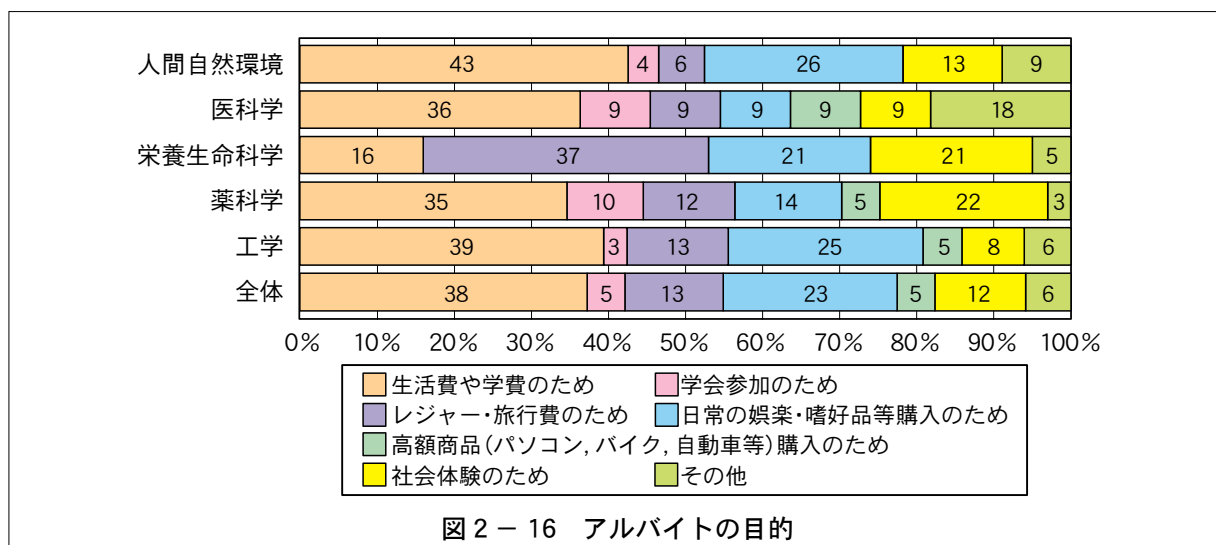


図2-16 アルバイトの目的

## 2-17 アルバイトの種類 (図2-17-1, 図2-17-2)

これも複数回答が可能な設問である。全体では家庭教師・学習塾講師等が31%でトップをしめるが、

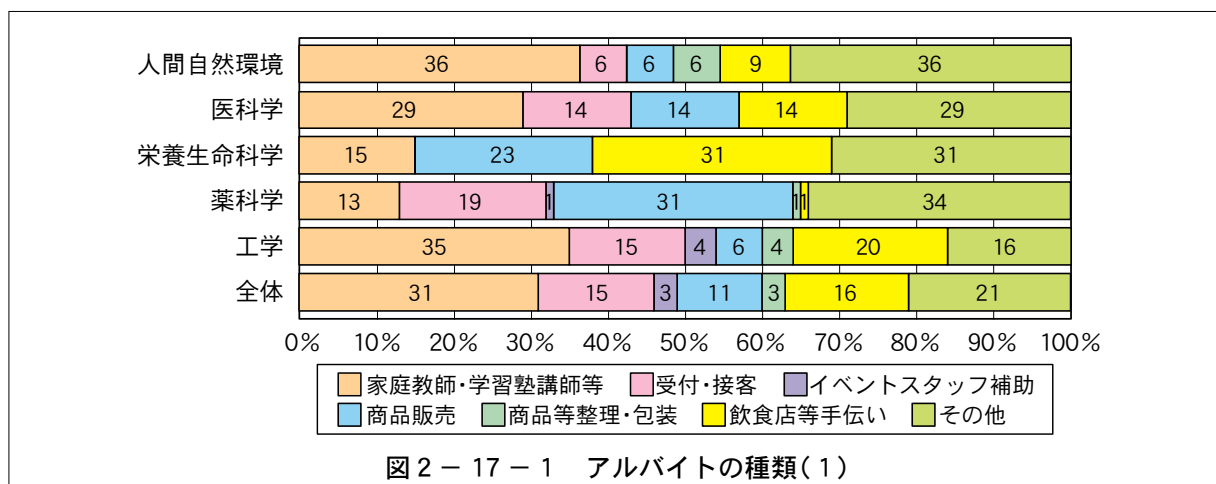
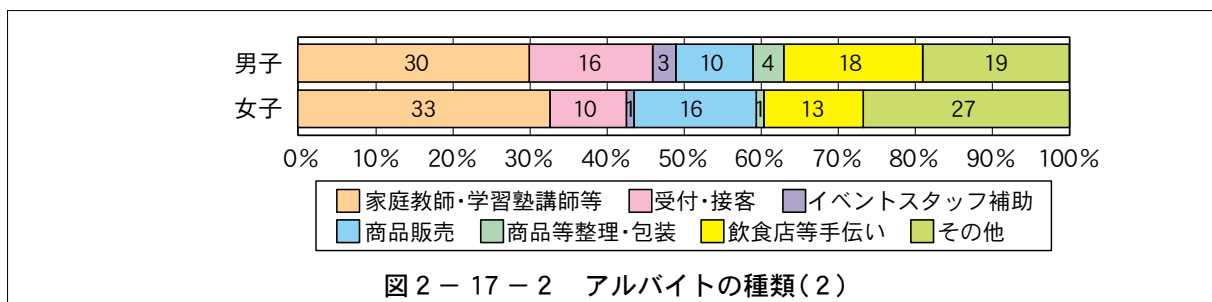


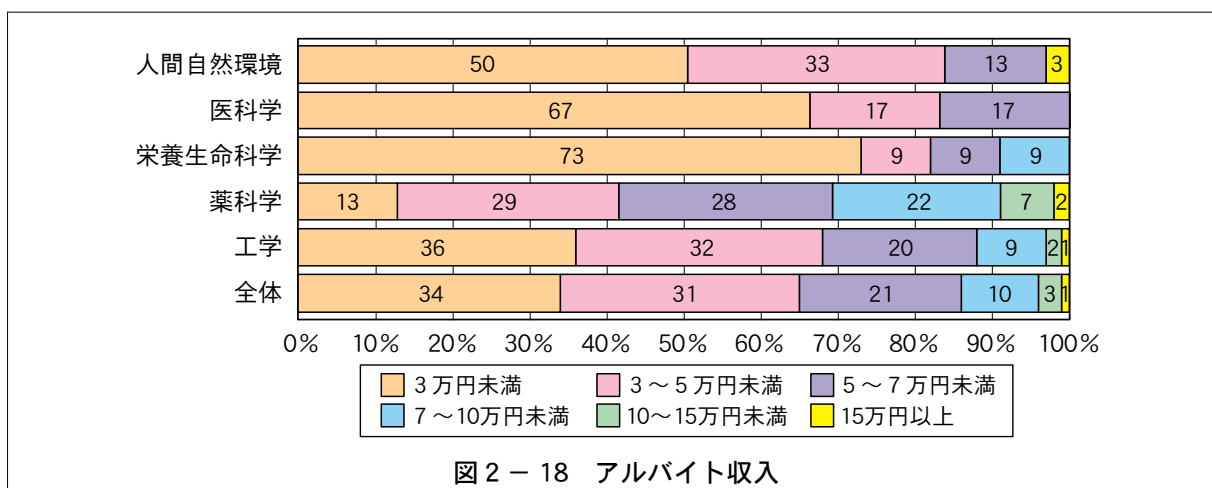
図2-17-1 アルバイトの種類(1)

学部学生の調査結果の40%と比較すると、やや少ない割合になっている。次に大きな割合をしめるのが飲食店手伝いの16%と受付・接待の15%で、これらをあわせたサービス業では男子のほうが多い割合（飲食店手伝いと受付・接待をあわせて、男子34%、女子23%）となっている。図2-17-2には全体についての男女別分布を示した。次回の調査ではアルバイトを選ぶ基準（賃金、時間、目的、労働環境等）をあわせて調査することによってアルバイトの実態をより明確に浮かび上がらせることが可能であろうと思われる。また、全体で「その他」の回答が21%（人間自然環境及び薬科学では1/3以上）をしめていることから、回答項目についての工夫も必要であろう。



## 2-18 アルバイト収入 (図2-18)

3万円未満と3～5万円未満をあわせた回答が全体で65%をしめ、学部学生を対象とした調査結果(65%)と同じ割合となっている。男女別内訳をみると、3万円以内では男子と女子がそれぞれ30, 47%であり、3～5万円未満では32, 29%になっている。10万円以上の高収入は全体で4%あまりと少ない割合である。次回は、アルバイト従事時間、目的及び経済状況と相互に関連するアンケートを実施することによりアルバイトの実態がより明確に把握できるものと思われる。



## 2-19 アルバイトの紹介者 (図2-19)

複数回答が可能な設問である。紹介者は全体では友人・先輩が48%と約半数をしめている。特に薬科学では69%に達している。次にアルバイト情報誌・新聞等の広告・チラシが21%と続いている。一方、学務部からの紹介は4%と低く、アルバイトを探すのにあまり利用されていないか、学務部でのアルバイト紹介活動が知られていない可能性がある。学部学生への調査結果でもこの項目は6%と小さな割合であるが、この理由は学務部においてアルバイトの質を厳選していることによる。アルバイトの紹介について今後とも大学側がどのようなスタンスで取り組むべきかの検討が必要であろう。

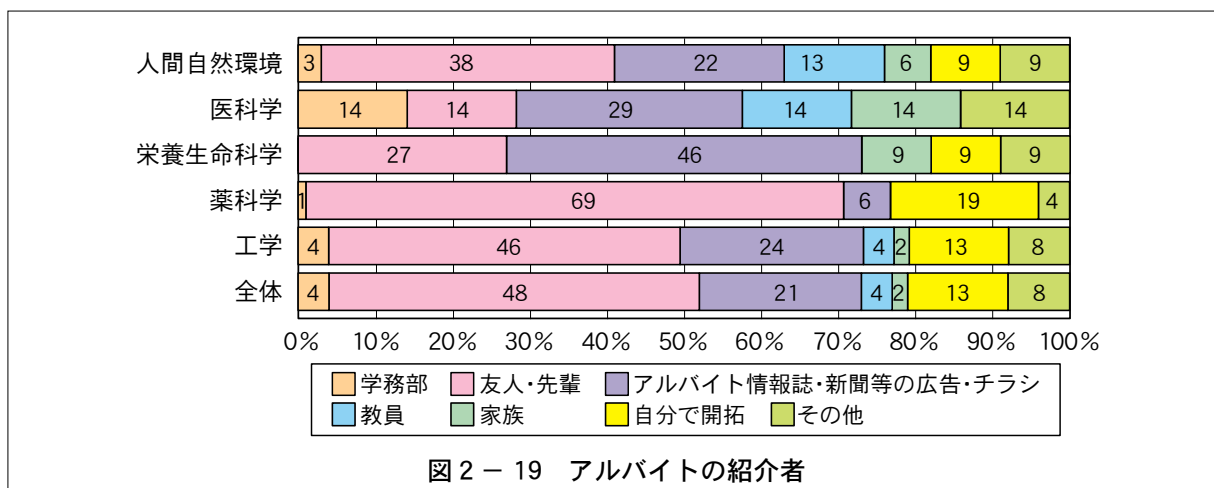


図 2-19 アルバイトの紹介者

## 2-20 アルバイトにおけるトラブル (図 2-20-1, 図 2-20-2)

複数回答が可能な設問である。「トラブルがない」の回答は全体では76%をしめ、学部学生を対象とした調査結果と同じ割合となっている。「トラブルがあった」の男女別割合は学部学生の結果では男子のほうが女子よりも多い結果であったが、大学院学生についても同様の傾向がある(男子28%, 女子14%)。「トラブルがあった」の回答で最も多かったのは客とのトラブル(8%)で、アルバイトの種類との対応が不明であるが、基本的には良質なアルバイトの選択が肝要であろう。良質なアルバイトと関連して、「給料の不払い」及び「給料が契約より安かった」のトラブルはあわせて5%であり、学部学生を対象とした調査結果(24%)より少ない点については改善されていると思われる。「トラブルがあった」の回答数は少ないが(男子88名, 女子15名)、トラブルの内容の男女別人数(全体)を図2-20-2に示す。男子で最も多いのは客とのトラブル(32名)であり、女子では雇用者との意見の不一致(5名)であることが分かる。アルバイトにおける具体的なトラブルの調査、分析を行い大学側の適切な対応が必要かどうかを検討することも必要であろう。

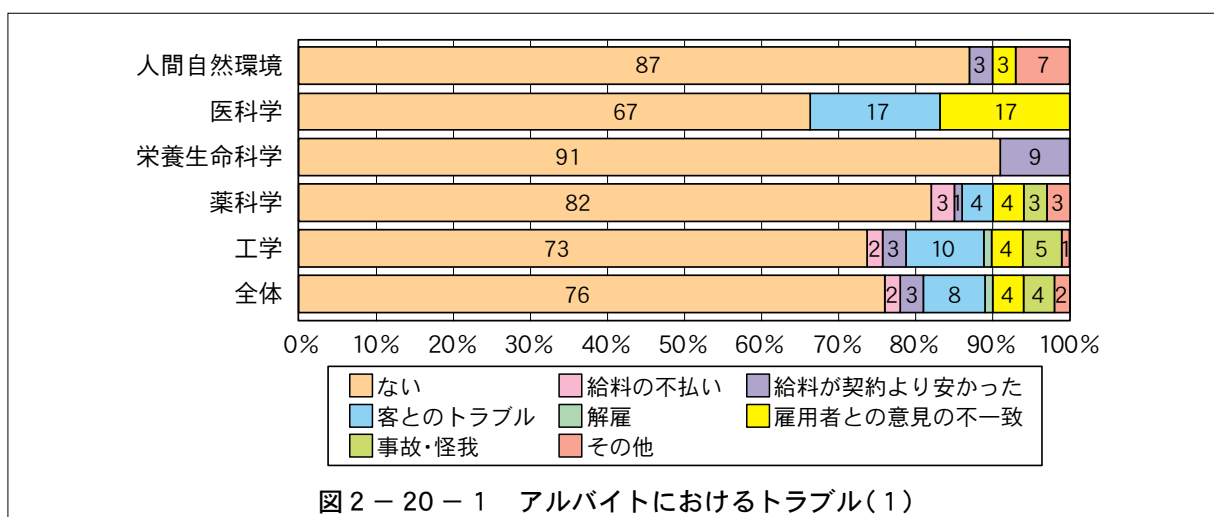


図 2-20-1 アルバイトにおけるトラブル(1)

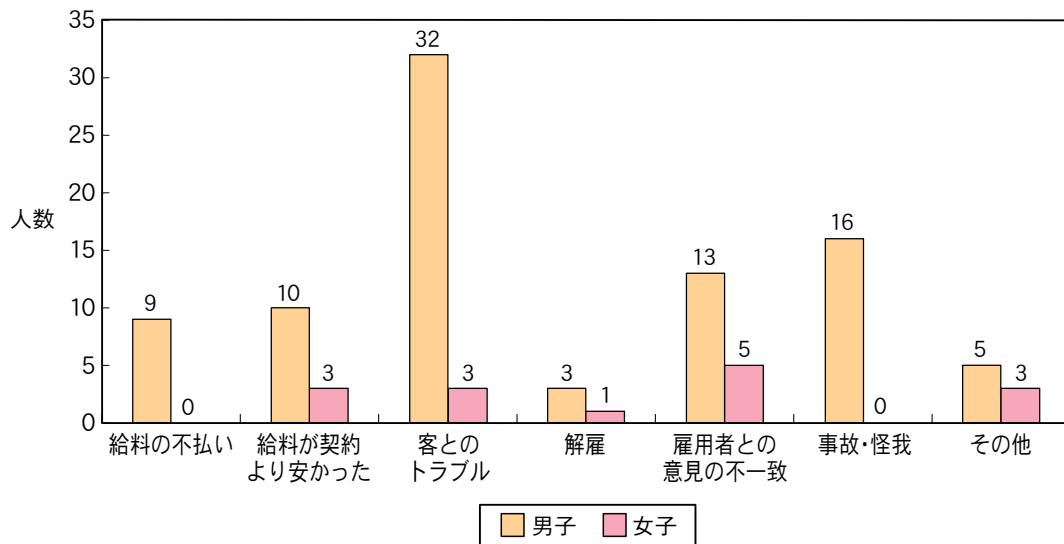


図 2 - 20 - 2 アルバイトにおけるトラブル(2)

# 第3章 健康状態について

## 3-1 睡眠時間 (図3-1-1, 図3-1-2)

睡眠時間は健康的な睡眠時間と考えられる「6～8時間未満」が最も多い。しかし、「4～6時間未満」と睡眠不足と考えられる学生は、男子で34%、女子で38%と高率であり、さらに「4時間未満」と過度の睡眠不足と思われる学生も男子では薬科学で4名、工学で14名認められた。忙しい大学院生の生活状況の反映であると思われるが、睡眠不足は集中力や活動能力の低下に繋がる可能性があり、改善の必要がある。今回の調査では工学以外の研究科の母数が少ないため、研究科間の傾向について検討するのはやや困難である。

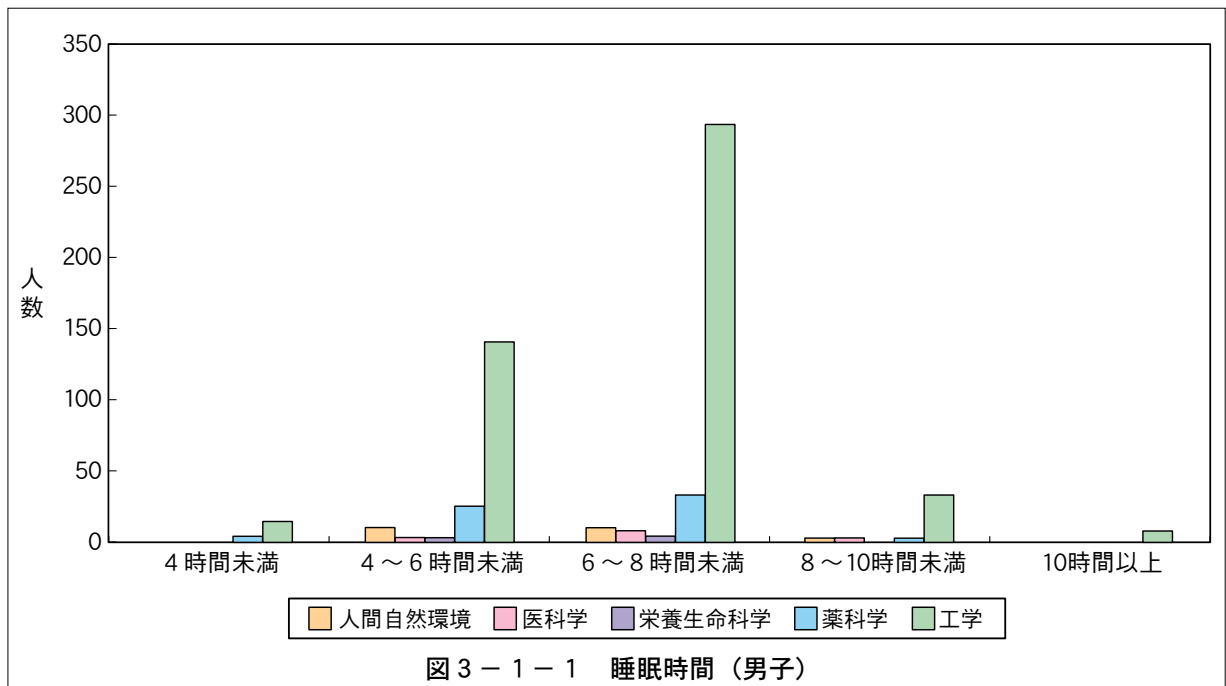


図3-1-1 睡眠時間 (男子)

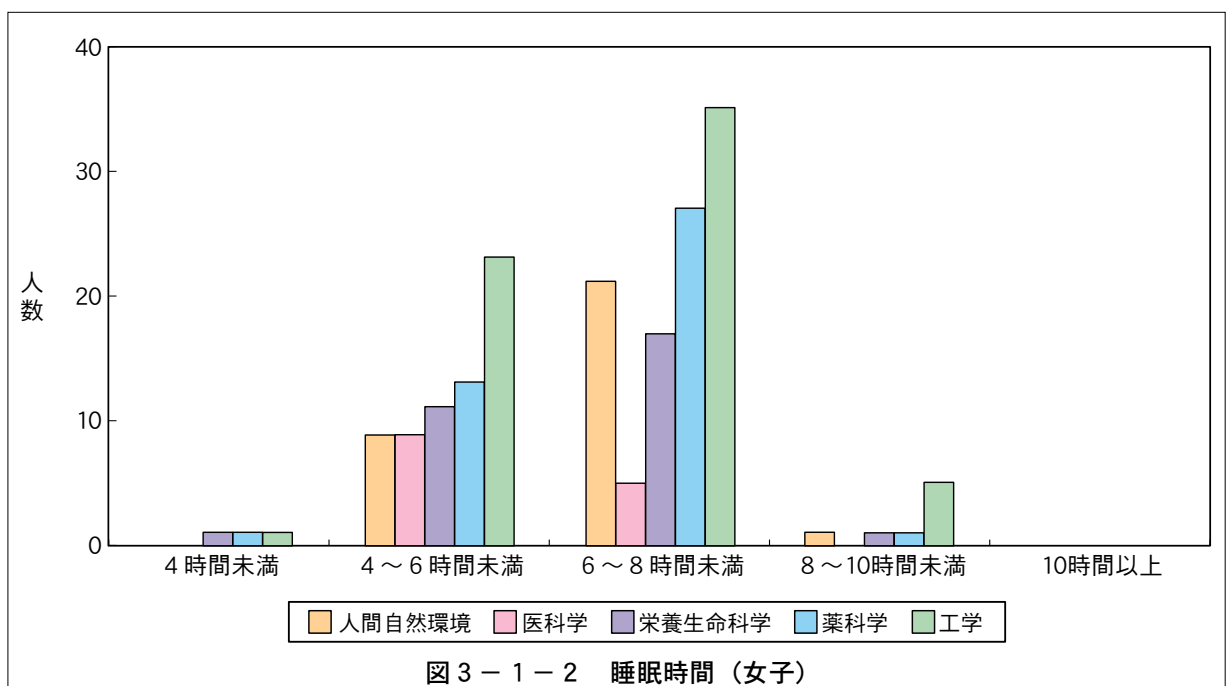
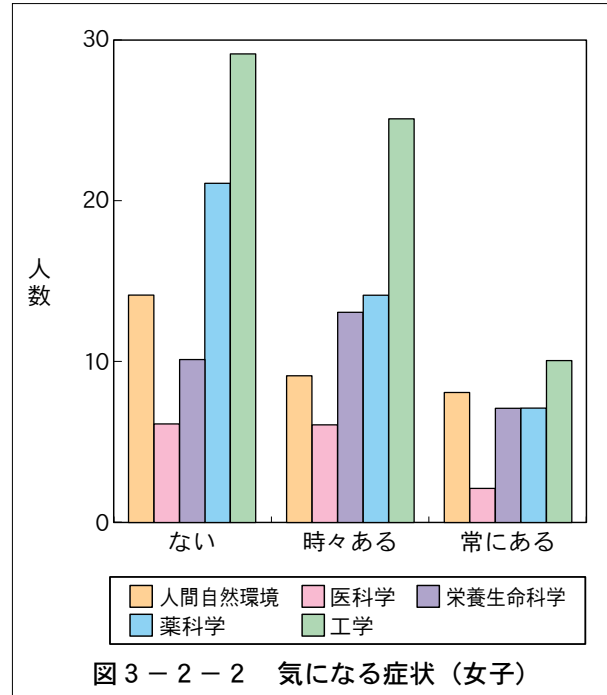
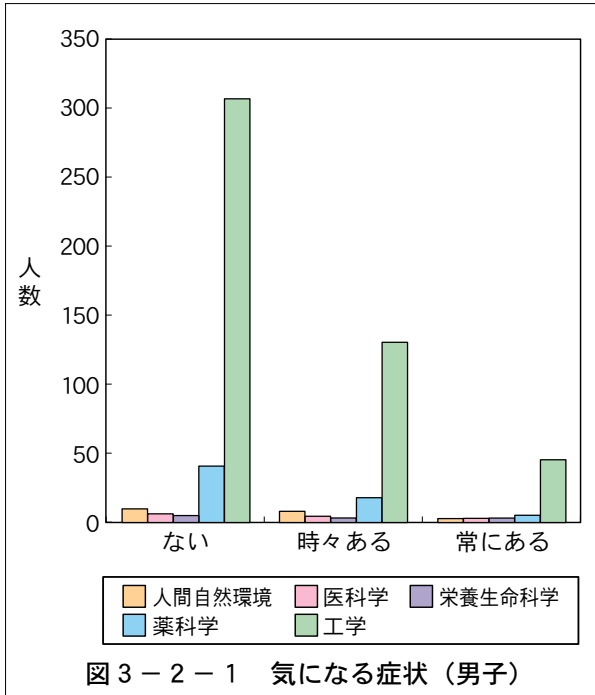


図3-1-2 睡眠時間 (女子)



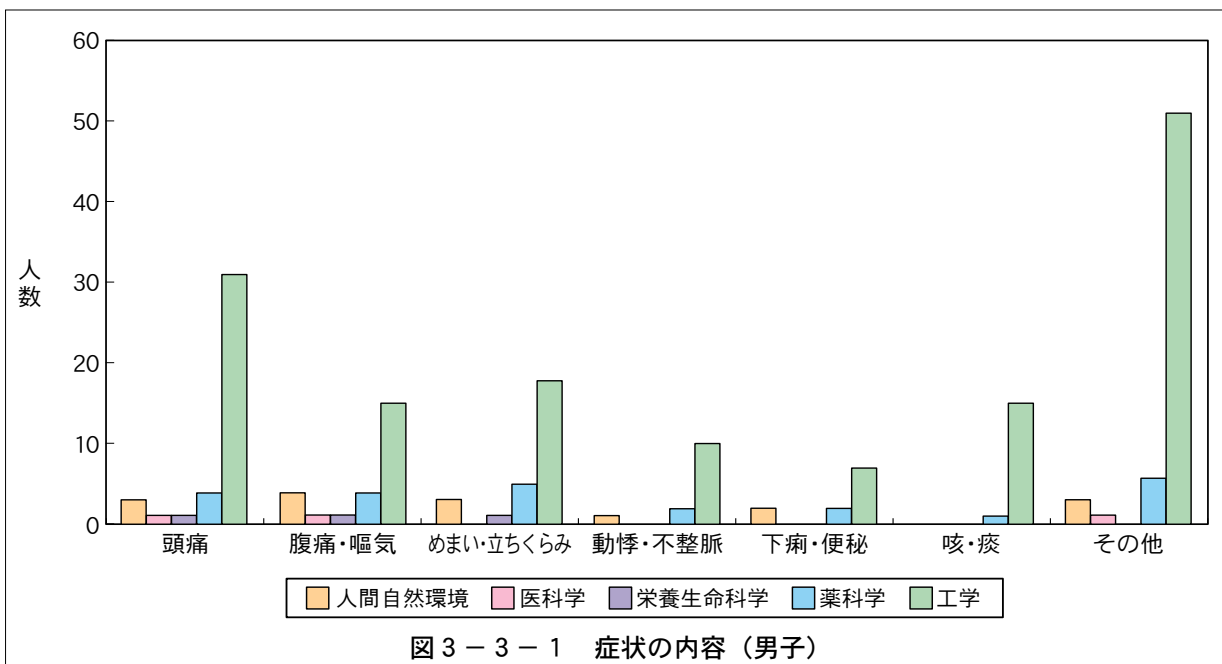
### 3-2 気になる症状 (図3-2-1, 図3-2-2)

何らかの症状を持つ学生は女子が男子より多い傾向が認められる。「時々ある」とする学生は女子37%, 男子28%であり, 「常にある」とする学生は女子(19%)が男子(9%)の2倍以上となっている。結局女子では半数以上が何らかの症状に悩まされていることになり, 予想以上に健康面で問題を抱えていることが認識された。こうした症状は生活の質(QOL)とも密接に関連するため生活指導等の対策が今後必要であると考えられる。

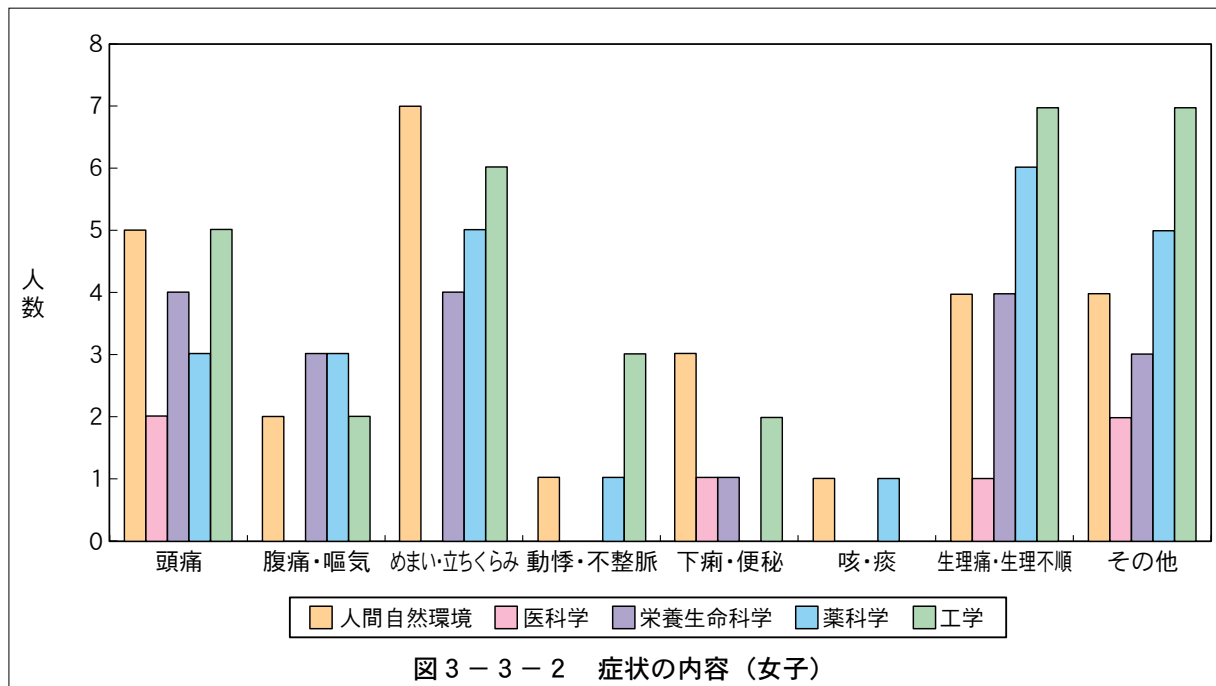


### 3-3 症状の内容 (図3-3-1, 図3-3-2)

男子学生が訴えた症状は頭痛が最も多いのに対し, 女子学生では生理痛・生理不順, めまい・立ちくらみがほとんど同数で並び女子特有の症状が目立っている。女子では健康診断で高度の貧血が見つかる

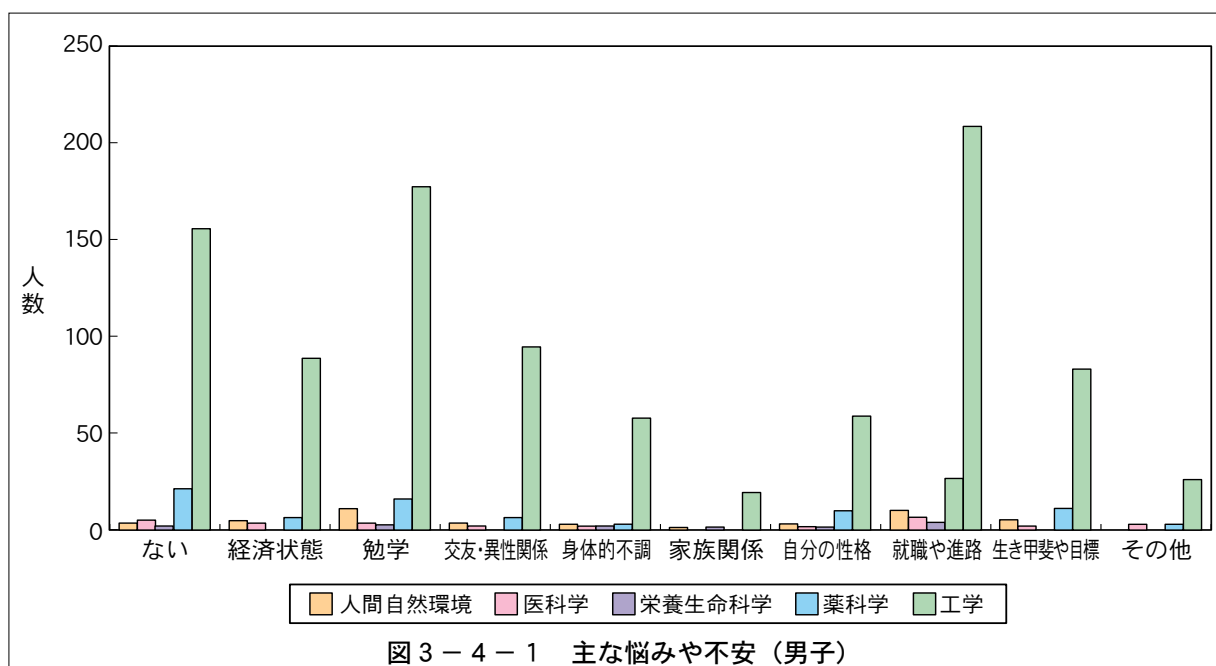


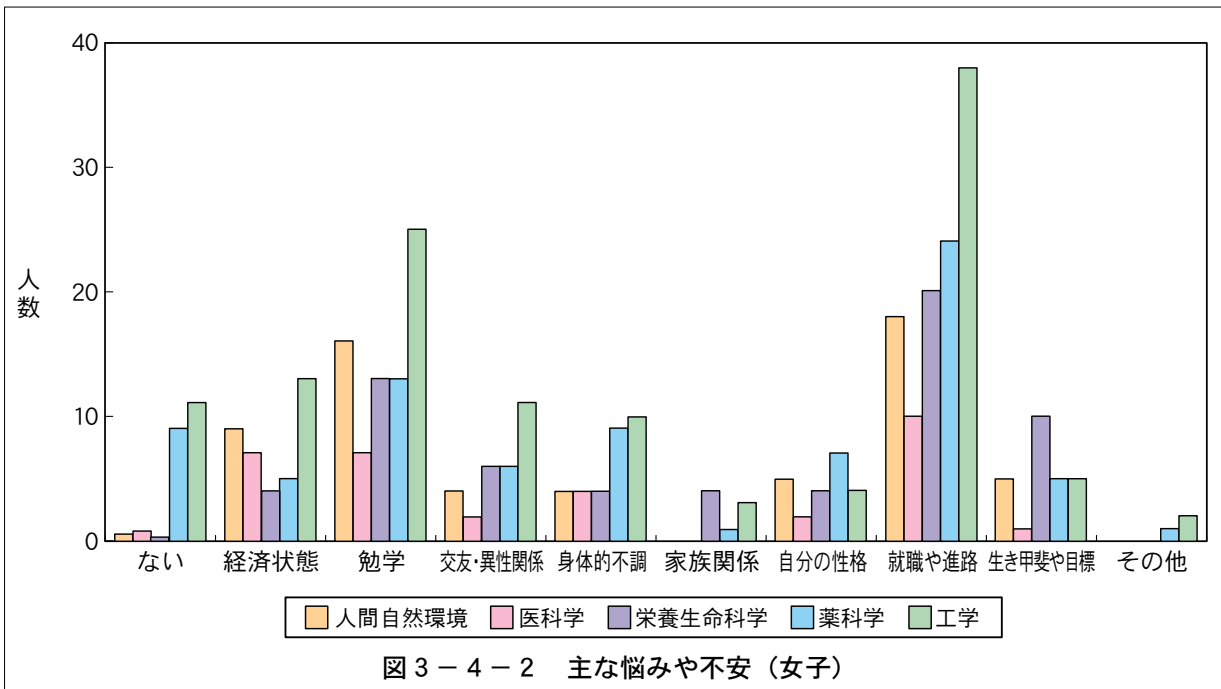
こともあり、夜型生活のために低血圧症状が出ているケースもあると思われる。また男女とも「その他の症状」があるとする回答が多く、今後は「その他の症状」の内容に関する項目も選択肢に入れる必要がある。「その他の症状」の主な内容としてはアレルギー性疾患や不眠などが推測される。



### 3-4 主な悩みや不安 (図 3-4-1, 図 3-4-2)

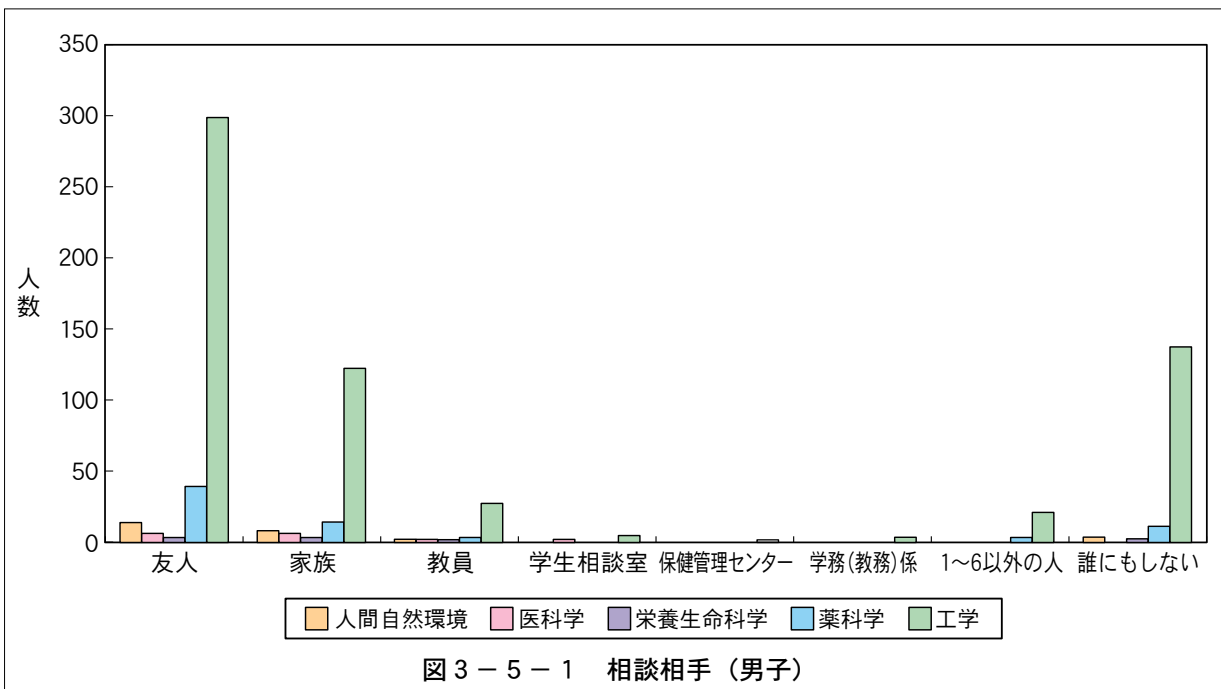
悩みや不安として最も多かったのが「就職や進路」であり、次いで「勉学」であり、学生特有の問題に関する悩みが多く、妥当な結果であると考えられる。一方「自分の性格」や「生き甲斐や目標」といった悩みは少なく、最近の学生は割合と現実主義的である。男女差が目立っているのが「悩みがない」との回答である。女子では8%であるのに対し、男子では16%と倍であり、男子で目標が明確で現在の環境に満足している割合が高いようである。しかし一方で悩みや不安は努力の糧であるとも考えられ、この中に現状維持的で向上心を失っている人がいないことを期待したい。

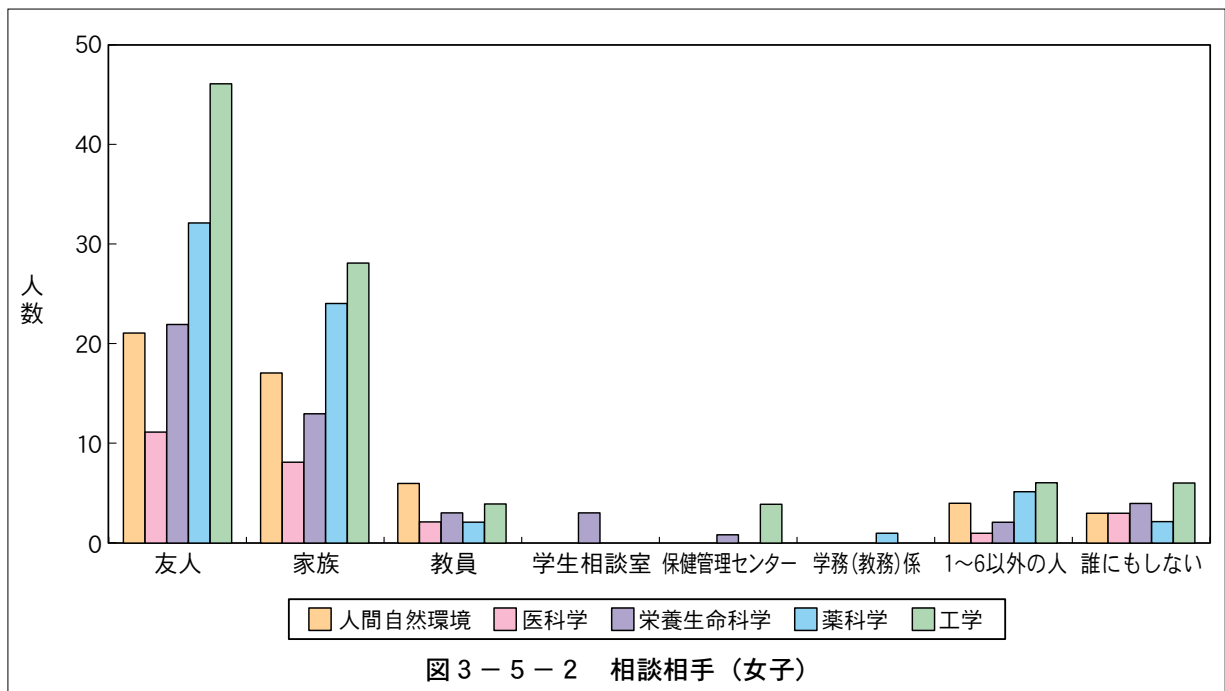




### 3-5 相談相手 (図 3-5-1, 図 3-5-2)

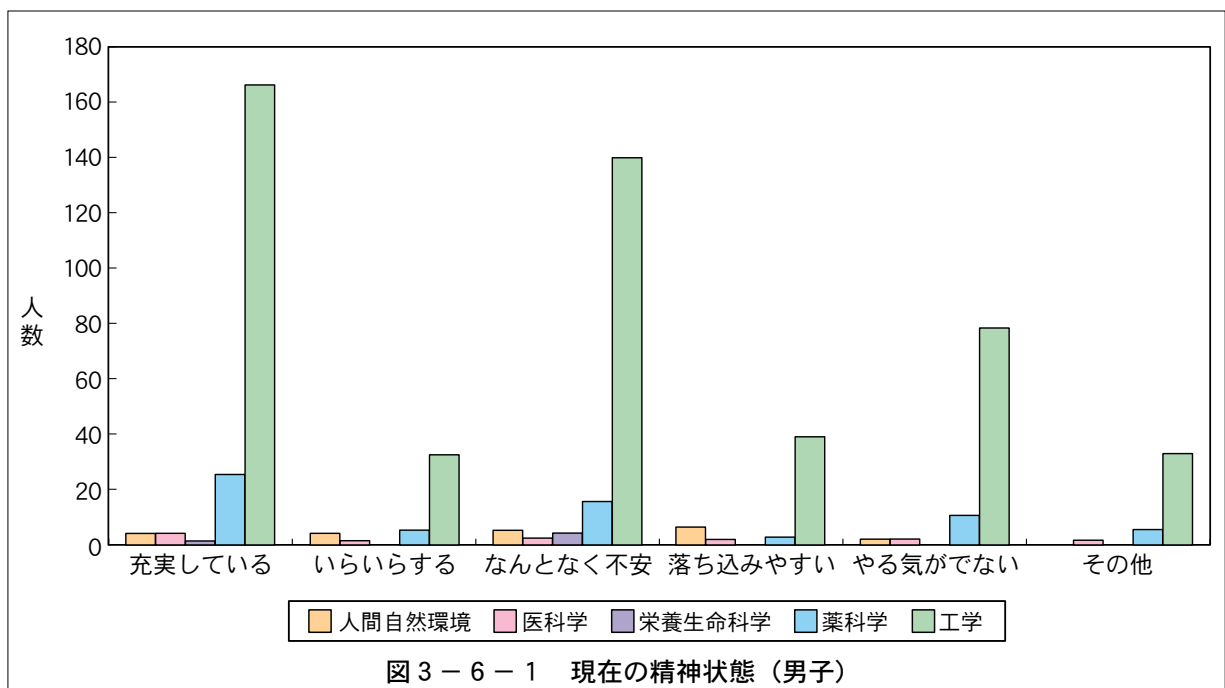
悩み事の相談相手は友人や家族がほとんどであり健全な状態である。特に友人は最も多く、頼れる友人を持っているかどうかは、精神衛生上大きな要素であると考えられる。誰にも「相談しない」との回答は、女子ではごく少数であるが男子では21%と相当の割合を占める。女子では誰かに相談することでストレスを軽減させ、なんらかの問題解決行動をとっているようである。一方男子は自分だけで解決しようとする傾向が強いようなので、問題を自分の中に抱え込みストレス過剰となる場合や問題解決から逃避している場合もあるのかもしれない。

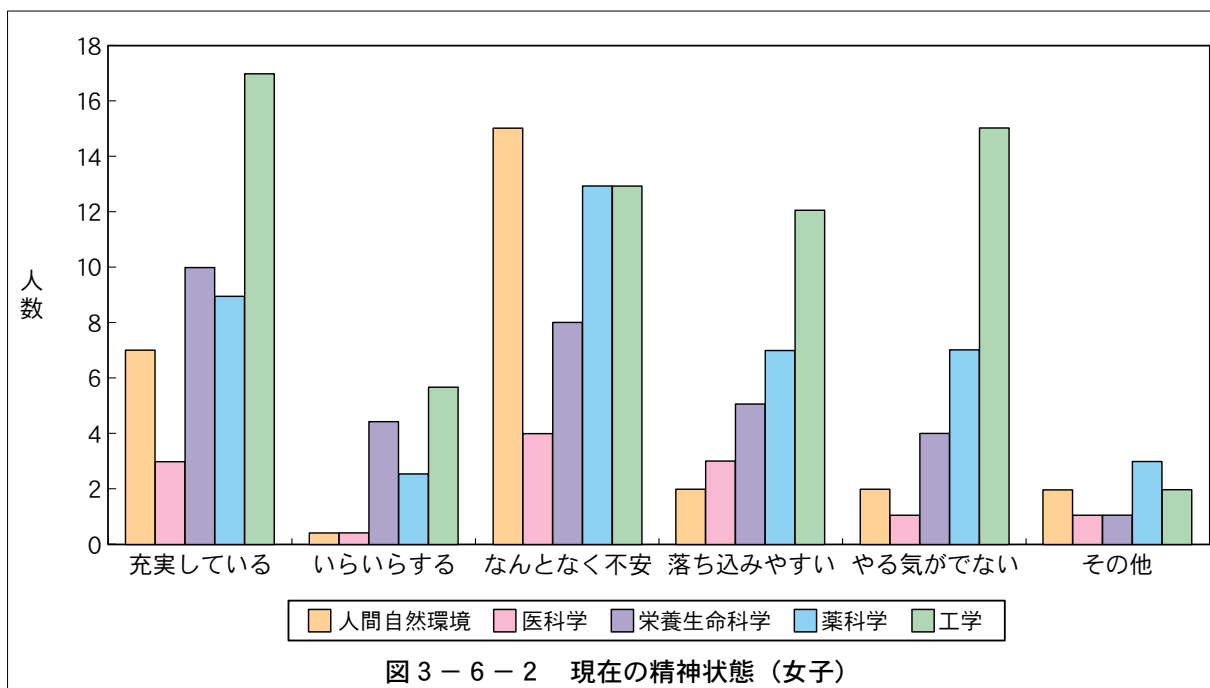




### 3-6 現在の精神状態 (図 3-6-1, 図 3-6-2)

「充実している」と回答した学生は男子で34%，女子で25%となっており，充実感は女子でやや低い傾向がある。一方で，「落ち込みやすい」と回答した学生は男子8%，女子16%であり，女子に精神的不安定性が高い。「充実している」以外で最も多い回答は男女とも「なんとなく不安」で目標を見出しにくい現在の社会状況を反映している。人間自然環境や薬科学の女子学生で「なんとなく不安」が特に多いのに対し，工学の女子では「やる気が出ない」とする回答が目立ち，研究内容に対する不適應がやや心配される。





### 3-7 保健管理センターの認識 (表 3-7)

常三島地区では保健管理センターの利用率および認識率はある程度高い状態となっているが、蔵本地区の学生では「保健管理センターを知らない」もしくは「利用したことがない」とする回答が多く、蔵本地区で保健管理センターの周知が十分でない現状が認識された。今後は蔵本地区の学生に対する保健管理センターの周知をさらに徹底するとともに、新しく設置された蔵本保健室の利用を積極的にPRしていく必要がある。

学 部	健康診断のため行ったことがある	健康診断以外で利用したことがある	保健管理センターがあることを知らなかった	保健管理センターは知っているが行ったことがない
人 間 自 然 環 境	27	7	0	7
医 科 学	8	0	6	9
栄 養 生 命 科 学	11	3	7	14
薬 科 学	39	5	29	30
工 学	305	86	23	65

表 3-7 保健管理センターの認識

### 3-8 保健管理センターの利用 (表 3-8)

常三島地区の学生では「これからも利用したい」とする回答が最も多く、保健管理センターはそれなりに評価を受けていると思われる。しかし蔵本地区の学生に関しては認識率の低さとあいまって、利用したいと考えている学生は少数にとどまっており、今後蔵本地区での活動の充実が求められる。

学 部	これからも利用したい	健康診断だけに利用する	特に考えていない
人 間 自 然 環 境	17	1	8
医 科 学	2	2	3
栄 養 生 命 科 学	4	1	6
薬 科 学	7	6	24
工 学	151	46	80

表 3 - 8 保健管理センターの利用

## 第4章 学生生活上の問題点について

### 4-1 配偶者の有無と子供の世話 (図4-1-1, 図4-1-2)

配偶者及び／または子供をもつ大学院生の比率は男子に比べて女子で高く、男女を問わず、栄養生命科学、薬科学、工学に比べて、人間自然環境と医科学で高い(図4-1-1, 図4-1-2)。

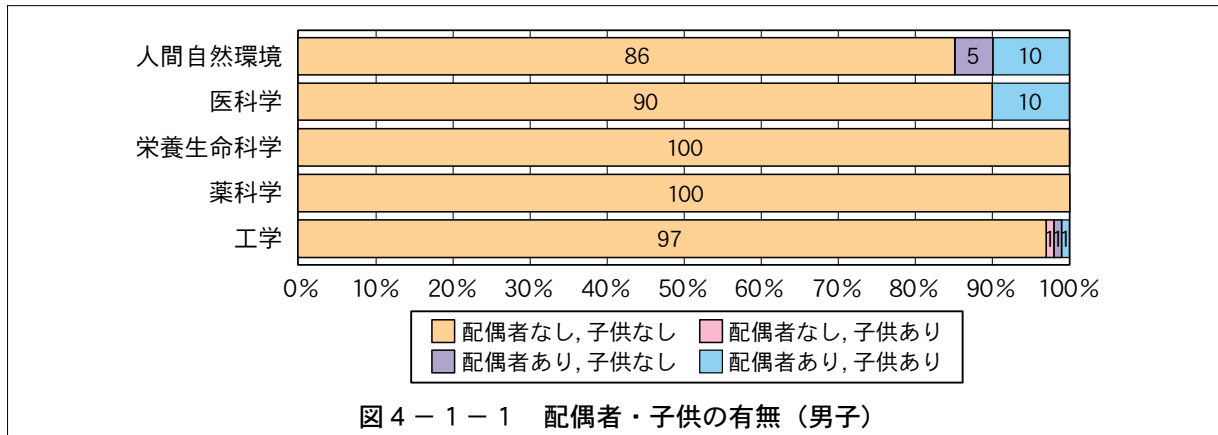


図4-1-1 配偶者・子供の有無 (男子)

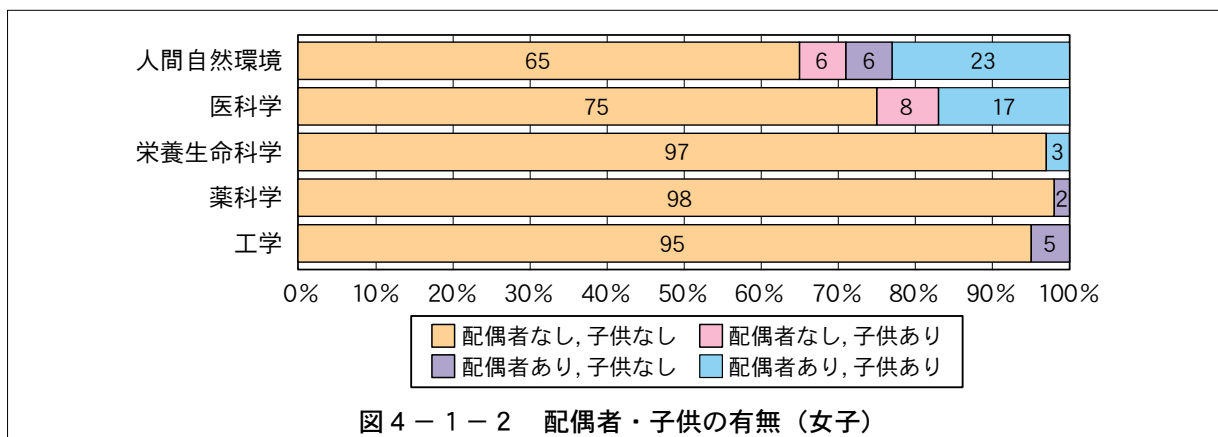


図4-1-2 配偶者・子供の有無 (女子)

この比率は大学院生の種別でも差があり、一般大学院生(配偶者有り3%, 子供有り3%)に比べ、社会人大学院生(配偶者有り32%, 子供有り27%)と留学生(配偶者有り35%, 子供有り22%)でかなり高い。

授業や研究をしている時に誰が子供の世話をしているかについて、回答は学生の種別で異なる。男子社会人大学院生では、配偶者、親・親戚、保育施設、「学校に通う」が同率(25%)であるが、女子社会人大学院生では、配偶者と保育施設が同率(33%)で高く、ついで親・親戚(22%)、「学校に通う」(11%)の順に続く。男子留学生では配偶者(60%)、保育施設(40%)の順であり、女子留学生では親・親戚(60%)、保育施設(40%)の順である。女子留学生の場合、子供を国元に置いての留学の多いことがうかがわれる。男子一般大学院生では配偶者の比率(54%)が高く、親・親戚(38%)、保育施設(8%)がこれに続き、女子一般大学院生では親・親戚と「学校に通う」が同率(40%)で高く、配偶者(20%)がこれに続く。

学生生活上の問題点を探るのであれば、もう少し踏み込んで、子供の世話に関する悩みを聞く必要があったのではないと思われる。親・親戚や配偶者がみているにせよ、それで問題はないのか、保育施設に預けている場合の問題点、学校へ通っている場合の放課後の問題点など、色々あげられる。

18歳人口の減少を考えると、大学とすれば社会人や留学生の受け入れが急務となる。社会人大学院生

や留学生が子供をもつ比率が高いことを考えると、彼等が授業を受けている時や研究している時の子供の世話の問題が、今後大きくなることが予想される。

## 4-2 迷惑行為 (図4-2-1~図4-2-4)

全ての研究科を通して3~4割の大学院生が何らかの迷惑行為を受けており、男女別でみた場合、そ

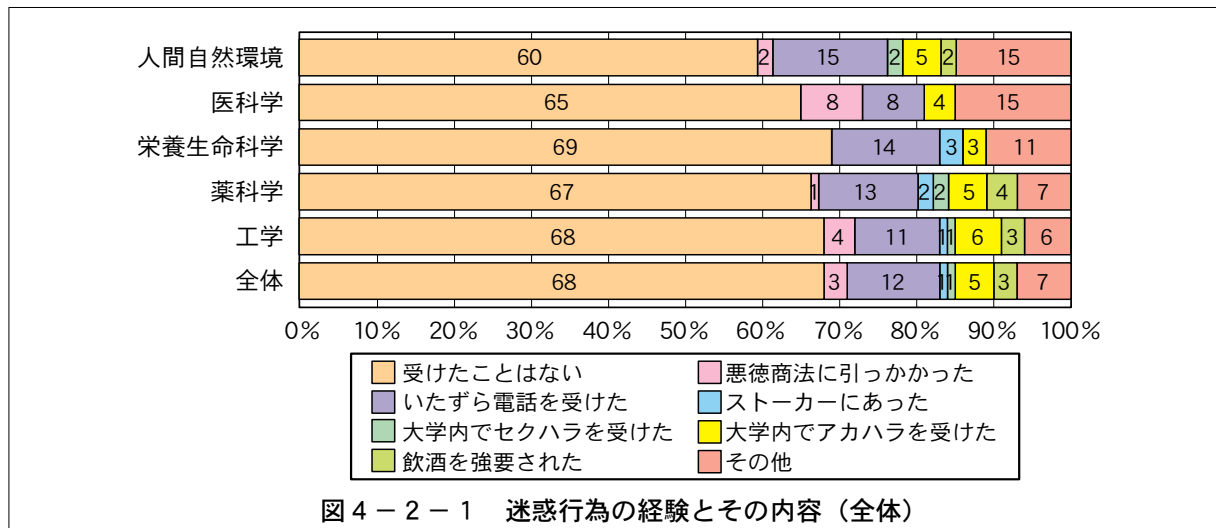


図4-2-1 迷惑行為の経験とその内容 (全体)

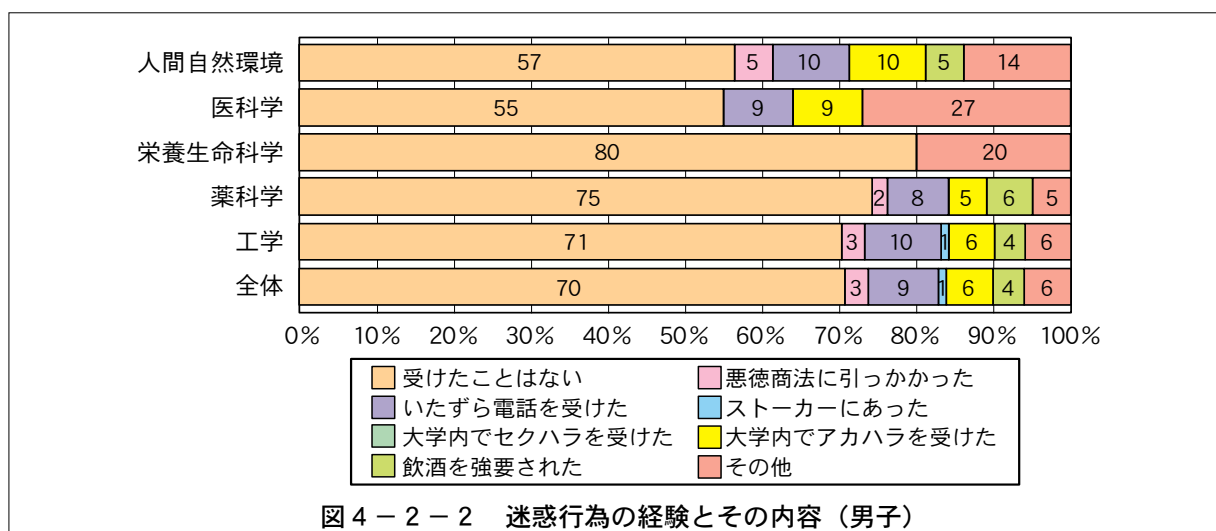


図4-2-2 迷惑行為の経験とその内容 (男子)

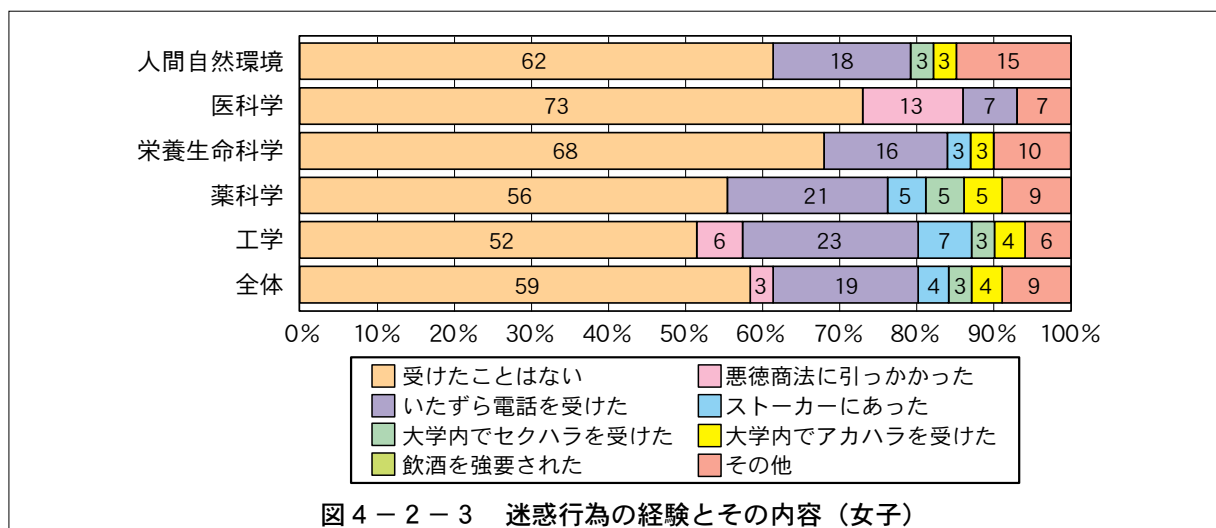


図4-2-3 迷惑行為の経験とその内容 (女子)

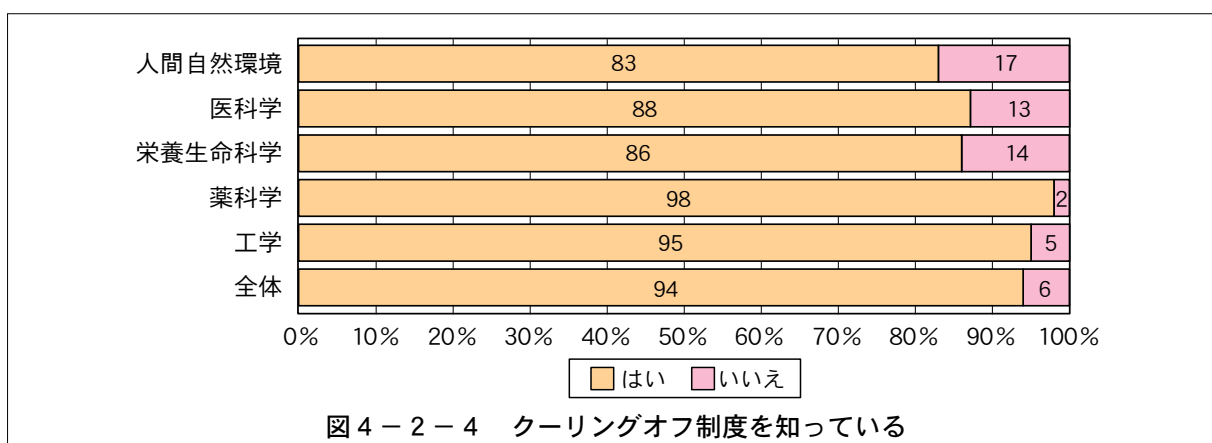


の比率は女子が多い。被害の種類でいうと、男子ではいたずら電話が最も多く、アカハラ、飲酒強要、悪徳商法の順に続くが、ばらつきの度合は女子に比べて少ない。女子ではいたずら電話が圧倒的に多く、ストーカー、アカハラ、悪徳商法、セクハラの順に続くが、後の4つについてはばらつきが少ない。

[悪徳商法]

全ての研究科を通して、1～8%の大学院生が被害を受けている。この数字は学部学生の場合と同じである。

クーリングオフ制度については、全ての研究科を通して83～98%の大学院生が知っているが、人間自然環境、医科学、栄養生命科学で知らない人が比較的多く(図4-2-4)、留学生はほとんどが知らない。これらの研究科、及び留学生に対して、クーリングオフ制度の説明会を行う必要がある。



[いたずら電話]

迷惑行為の中で最も多く、男子に比べて女子に圧倒的に多い。この傾向は学部学生の場合と同じである。

[ストーカー]

人間自然環境と医科学を除く研究科で、1～3%の大学院生が被害を受けており、男子に比べて女子に圧倒的に多い。この傾向も学部学生の場合と同じである。

[セクハラ]

人間自然環境、薬科学及び工学で、「被害を受けた」と回答した学生がそれぞれ2%、2%、1%いるが、ほとんどが女子である。

セクハラを受けた場合の相談先は、男女ともに、友人、教員、家族がこの順に上位3位までを占めるが、女子ではこれで9割強を占め、残りは「誰にも相談しない」であるのに対し、男子では上位3者で約7割5分、残りを学生相談室や学務係、「1～5以外の人」「誰にも相談しない」がほぼ同率で占める。

[アカハラ]

人間自然環境で5%、医科学で4%、栄養生命科学で3%、薬科学で5%、工学で6%の大学院生が被害を受けたと回答しており、男子に多い。

アカハラを受けた場合の相談先は、女子では友人、家族がこの順に上位2位を占め、残りを「1～5以外の人」が占めるのみであるが、男子では友人が1位で、教員と家族が同率で2位を占め、上位3者で8割強を占め、残りを学生相談室や学務係、「1～5以外の人」「誰にも相談しない」がほぼ同率で占める。

アカハラ・セクハラ被害を受けた際の相談先として学生相談室が設置されているが、学生相談室を知らない院生がまだ多く、この比率は栄養生命科学、薬科学及び工学で高い。セクハラ・アカハラの被害を受けた大学院生は少なからずいるわけで、この相談先に学生相談室が必ずしも選ばれていないことは問題である。今後は、学生相談室の存在や役割を、広くアピールしていく必要がある。また、被害を受

けた学生が、相談先として学生相談室を選ばなかった理由も調べる必要がある。

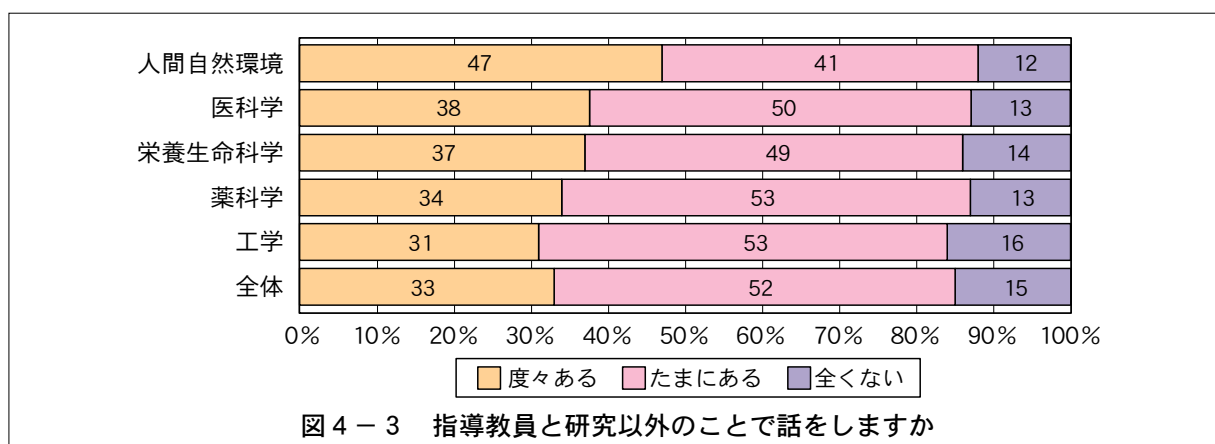
[飲酒の強要]

人間自然環境で2%，薬科学で4%，工学で3%の大学院生が被害を受けたと回答しており、全員が男子である。

### 4-3 指導教員との親密度 (図4-3)

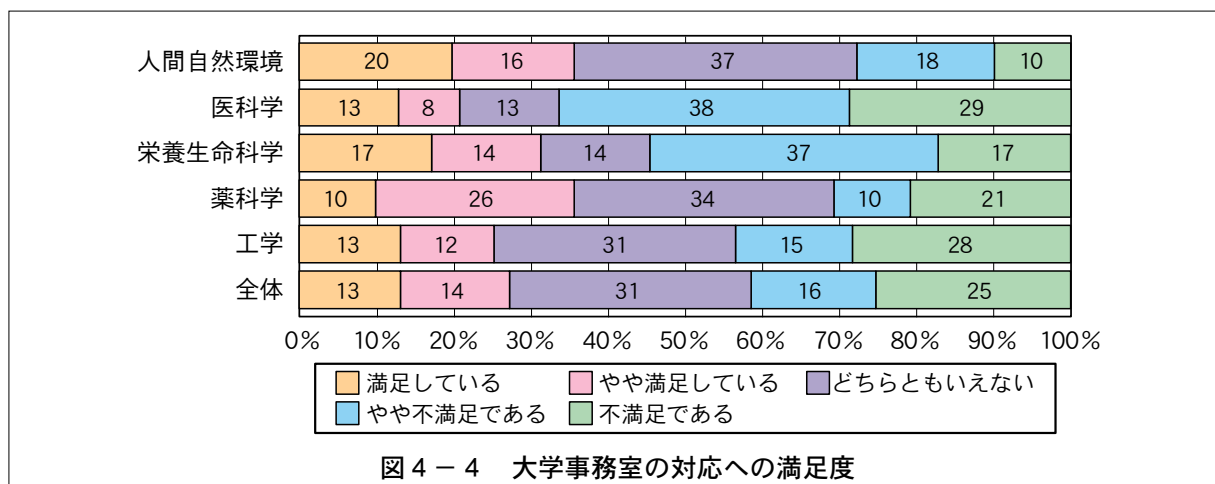
「指導教員と研究以外のことで話をしますか」との問いに対して、「全くない」と回答した大学院生が、全ての研究科を通して12～16%おり、研究科間でその比率に顕著な差をみない。一方、「度々ある」と答えた大学院生は31～47%で、人間自然環境で特に高い(図4-3)。男女差でいうと、一般に女子の方が指導教員とよく話をしているようである。

なお、「全くない」と回答した大学院生に対して「話をしない理由」をたずねたが、「話したくない」と回答した大学院生が少なからずいる。指導教員と大学院生の間での人間関係が必ずしもうまくいっていないことを表していると思われる。



### 4-4 大学事務室の対応への満足度 (図4-4)

医科学、栄養生命科学及び工学では、不満足・やや不満足と回答した大学院生が満足・やや満足と回答した大学院生に比べて多い(図4-4)。学部学生でも同様の結果が得られている。どういう点が不満足なのか、自由記入欄にも多少の記載があったが、改善に向けてより具体的に聞いていく必要がある。



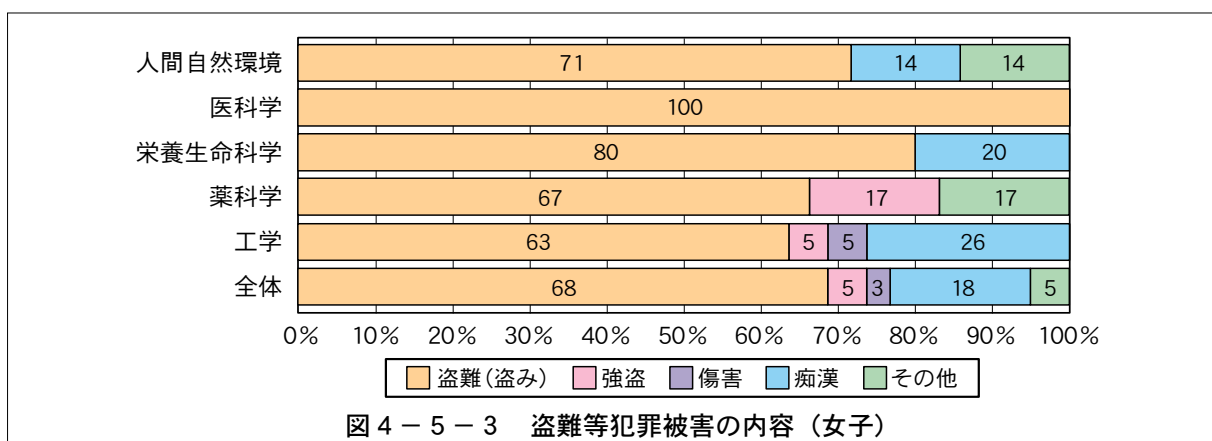
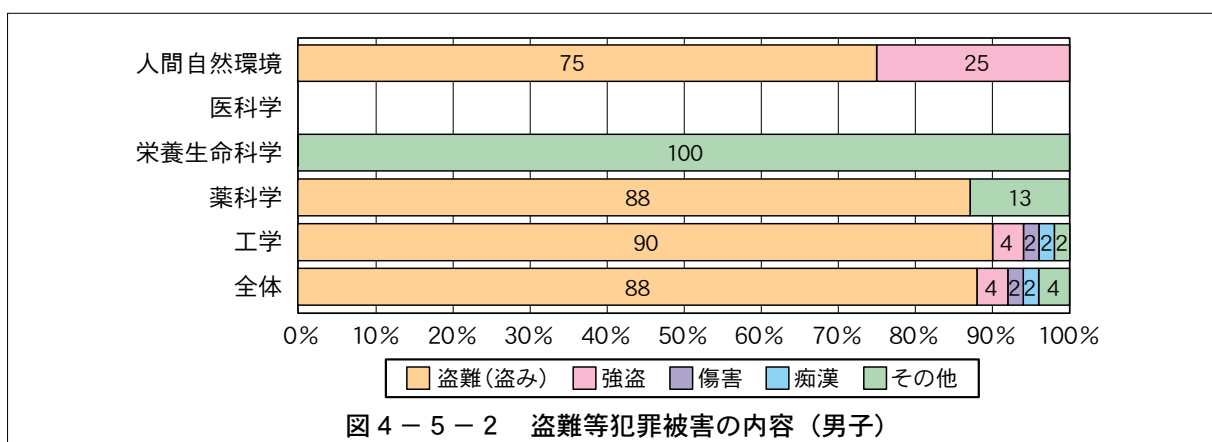
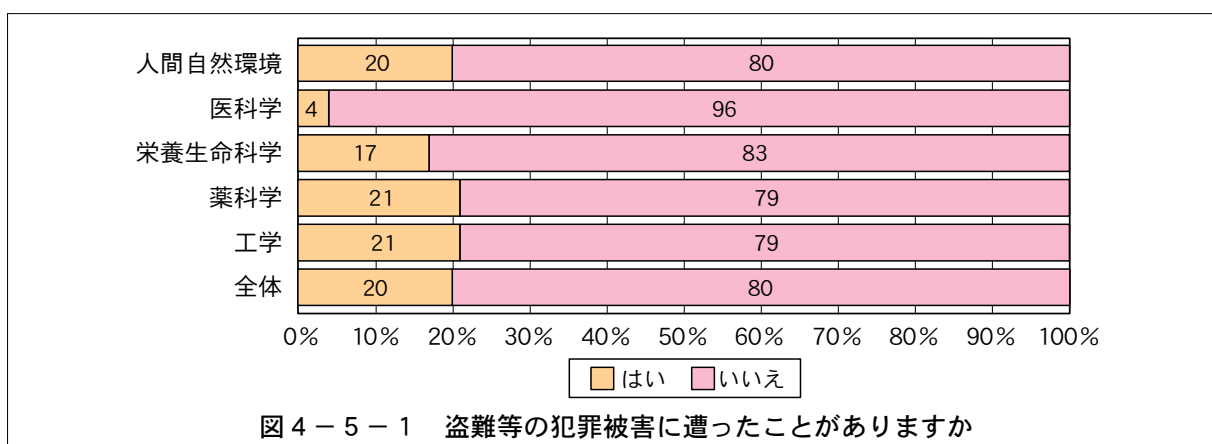
## 4-5 盗難等犯罪被害 (図4-5-1~図4-5-3)

医科学ではそれほど高くはない(4%)が、その他の研究科では、17~21%の大学院生が何らかの被害に遭っている(図4-5-1)。

男女を通して、被害の中で圧倒的に多いのが盗難(盗み)であるが、女子では、男子に比べて痴漢の被害が多くなる(図4-5-2, 図4-5-3)。

どこで盗難(盗み)にあったかについては、大学構内・自宅やアパート・その他で、研究科間にばらつきがあり、一定の傾向は得られないが、少なからぬ大学院生が大学構内で被害に遭っている。

大学構内での盗難(盗み)の予防に関しては、「現金・貴重品を肌身につけておく」ことを周知徹底させる以外にない。学部学生も含め、この観点からの啓蒙活動が必要である。



## 第5章 修学状況について

### 5-1 本学を選んだ理由と目的 (図5-1-1~図5-1-4)

図5-1-1の学生全体では、「出身大学だから」29%、「就職等将来を考えて」23%、「希望する研究分野があるから」18%の順に多い。これらの回答について、研究科別では、人間自然環境と医科学に「希望する研究分野があるから」と答える学生が多く、工学は「出身大学だから」が多い。栄養生命科学与薬科学は「出身大学だから」と「就職等将来を考えて」がほぼ同程度となっており、研究科ごとの違いが見られる。また、その他の回答では、医科学に「地元の大学だから」が17%でこれらの回答に次ぎ、他の研究科に比べて多い。一方、図5-1-2の一般学生、社会人学生、留学生の別では、一般学生、社会人学生、留学生の順に、「希望する研究分野があるから」が増加する傾向にある。逆に、「出身大学だから」と「就職等将来を考えて」は社会人学生、留学生で少なく、本学学部出身者だけでなく、海外や企業から研究目的での入学が多いことが分かる。彼らの勉学意識の高さが一般学生へよい影響を与えることを期待する。

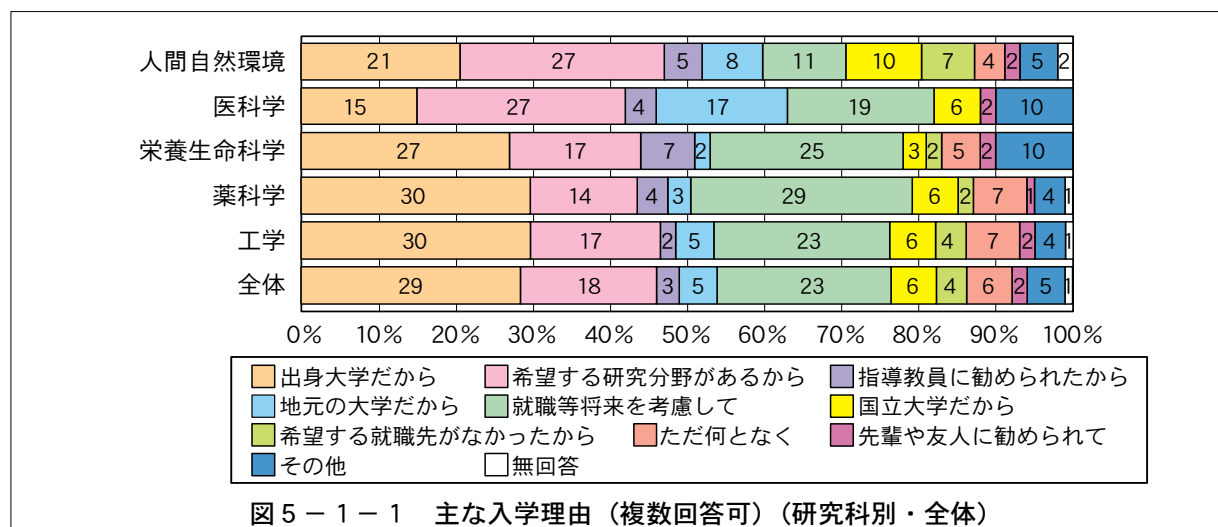


図5-1-1 主な入学理由 (複数回答可) (研究科別・全体)

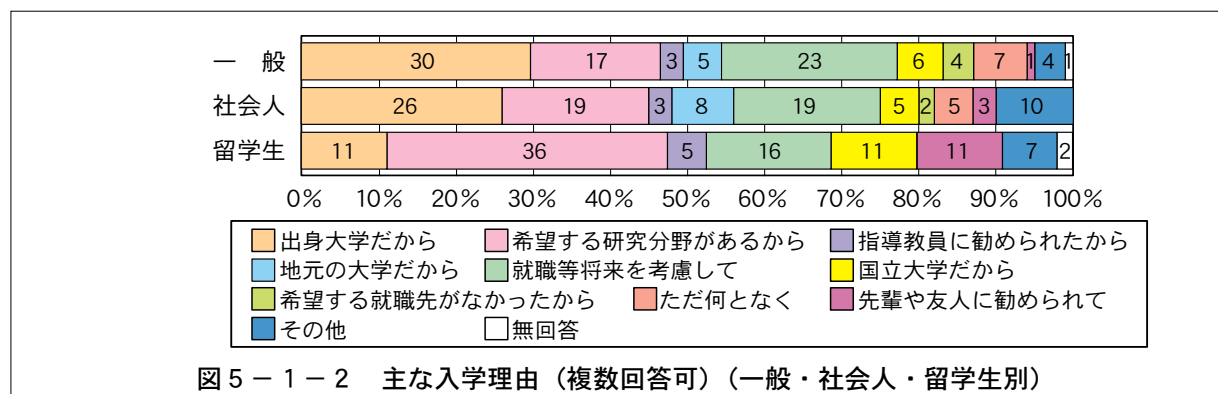


図5-1-2 主な入学理由 (複数回答可) (一般・社会人・留学生別)

図5-1-3と図5-1-4は、平成17年9月に発表された中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」に関連して設けた項目であるが、大学院が担うべき4つの人材養成機能についての質問に対して、学生全体では「高度で知的な素養をもつ社会人」31%、「高度専門職業人」29%、「研究者」24%の回答に大きく分かれている。研究科別では、人間自然環境に、「高度で知的な素養をもつ社会人」と「高度専門職業人」を目指す学生が多く、「研究者」が少ない。この研究科に「大学教員」を目指す学生がやや多くなっているのは留学生の回答による。その他、栄養生命科学において「高度で知的な素養をもつ社会

人」と答える学生が多く、図5-1-4において、留学生に「大学教員」を目指すものが多い。全体的に、「高度専門職業人」、「研究者」、「高度で知的な素養をもつ社会人」の3つの回答に大きく分かれており、それぞれの学生の目標をサポートする教育と指導が望まれる。学生全体で、「その他」と答えた学生が10%、無回答の学生も3%おり、将来の目的意識、職業意識についても詳細な調査が必要であると思われる。

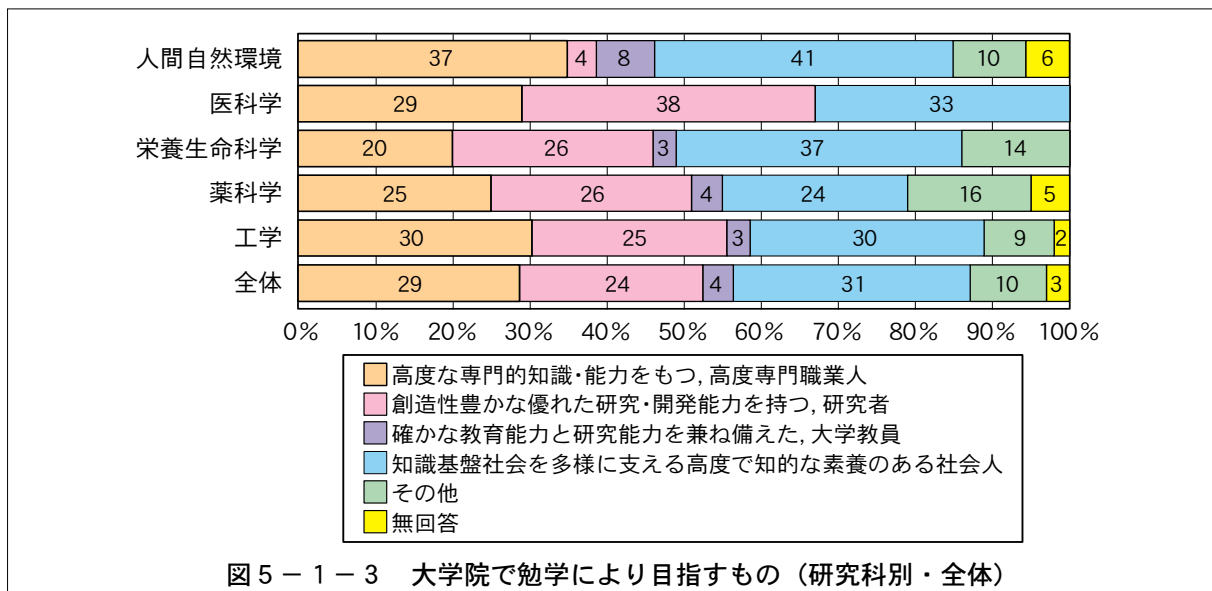


図5-1-3 大学院で勉学により目指すもの (研究科別・全体)

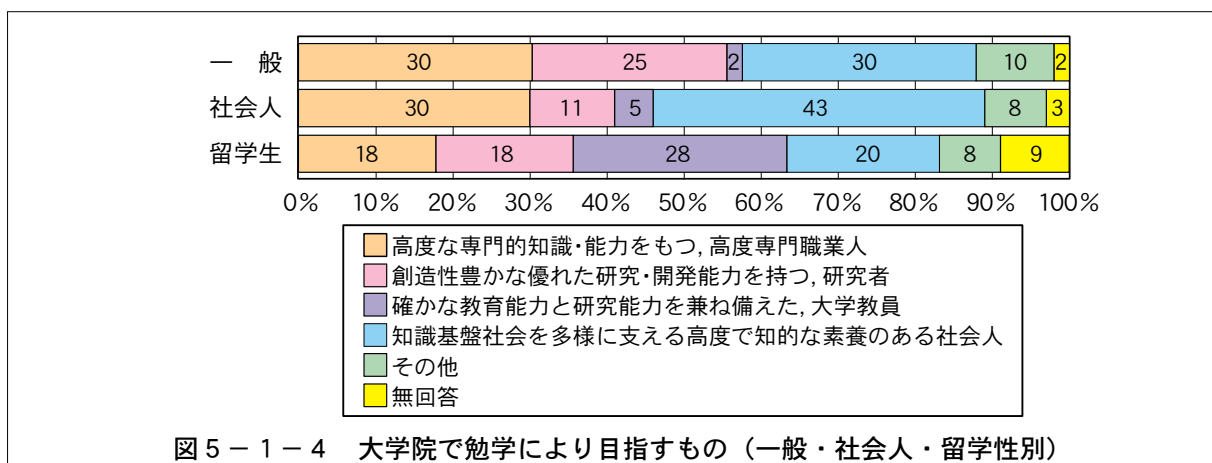


図5-1-4 大学院で勉学により目指すもの (一般・社会人・留学性別)

## 5-2 研究活動と研究指導 (図5-2-1~図5-2-8)

図5-2-1~図5-2-8は学生の研究活動についての質問に対する回答である。学生自身が研究活動に費やしている時間は、図5-2-1から、全体の学生のうち、56%が1週間に10時間以上、5時間以上の学生も加えると、76%となる。休日を除くと、半数以上の学生が1日平均2時間以上研究活動を行っている。実際には、休日にも大学へ出てきている学生も多いと思われる。研究科別でみると、特に、栄養生命科学、医科学、薬科学に研究時間が多い学生が多く、人間自然環境に少ない。人間自然環境の学生の研究時間に費やす時間が少ないのは、社会人学生が多いことと「高度で知的な素養をもつ社会人」を目指す学生が多く(図5-1-3で、41%)、研究より勉学を中心に考える学生が多いためではないと思われる。また、薬科学と工学において、多くの学生が研究時間を1週間に「10時間以上」と答える反面、30分未満の学生も各専攻に数名いる。工学において、その約半数は1年次の学生で、研究よりも授業履修に重きをおく学生であると思われるが、2年次学生にもほとんど研究時間を持たない学

生があり、詳細な状況は不明である。図5-2-2では、社会人学生は一般学生や留学生に比べ研究時間が少ない傾向にあり、指導に工夫が必要である。

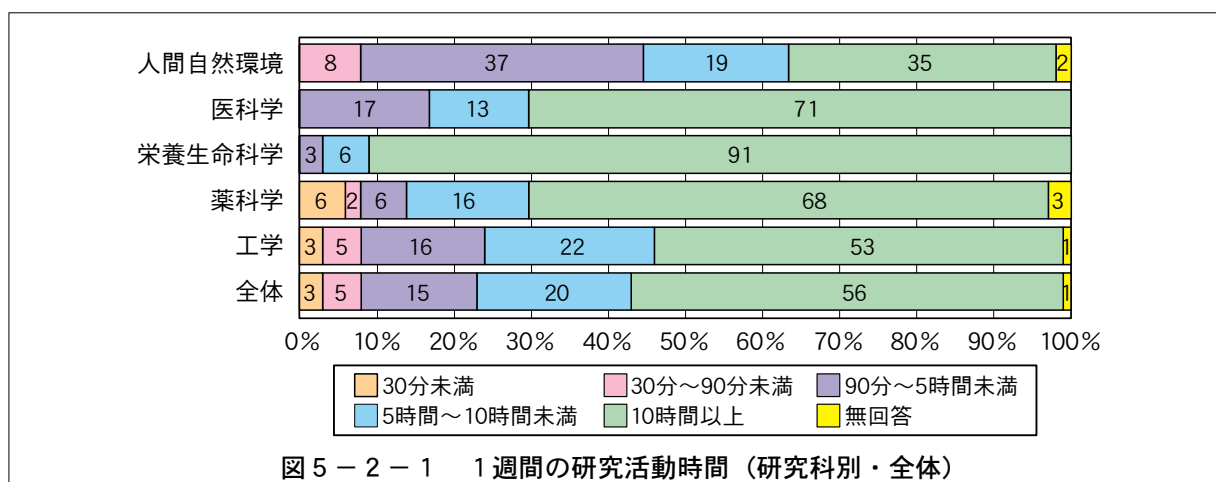


図5-2-1 1週間の研究活動時間（研究科別・全体）

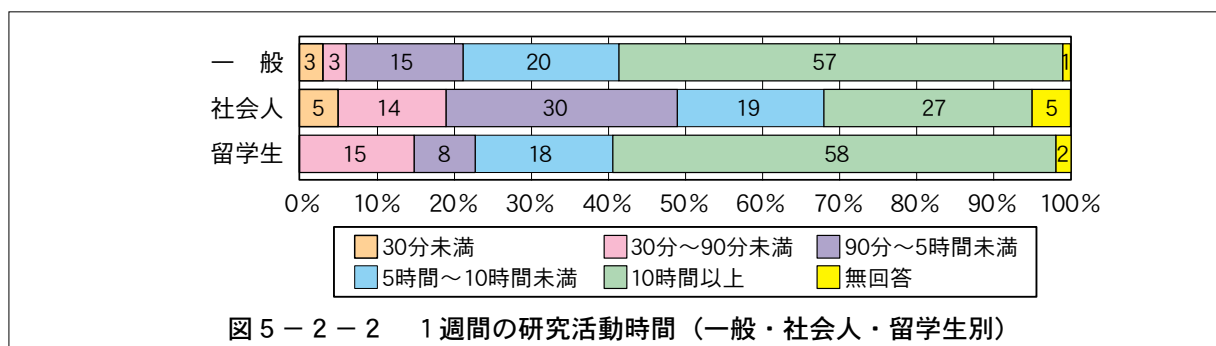


図5-2-2 1週間の研究活動時間（一般・社会人・留学生別）

研究における直接の指導教員は、図5-2-3の全体では、42%が教授、30%が助教授、7%が講師、16%が助手、その他が5%、無回答1%であった。研究科別では、人間自然環境は60%を超える学生が教授から直接研究指導を受けており、他の研究科において多くの助教授、講師、助手も指導を分担している状況と異なっている。医科学、栄養生命科学においては、直接指導を受ける教員を助手と答える学生が多い。その他と答えた学生には、他大学、他機関あるいは企業との共同研究において、本学以外の研究者から指導を受けている学生も多いのではないと思われる。図5-2-4において、留学生、社会人学生、一般学生の順に、教授を直接の指導教員と答える学生が多く、留学生の63%は教授から直接指導を受けている。逆に、一般学生に若い教員による指導が多く、学生の希望によるものか、図5-2-8の研究指導についての学生の満足度との関係に注意が必要であると思われる。

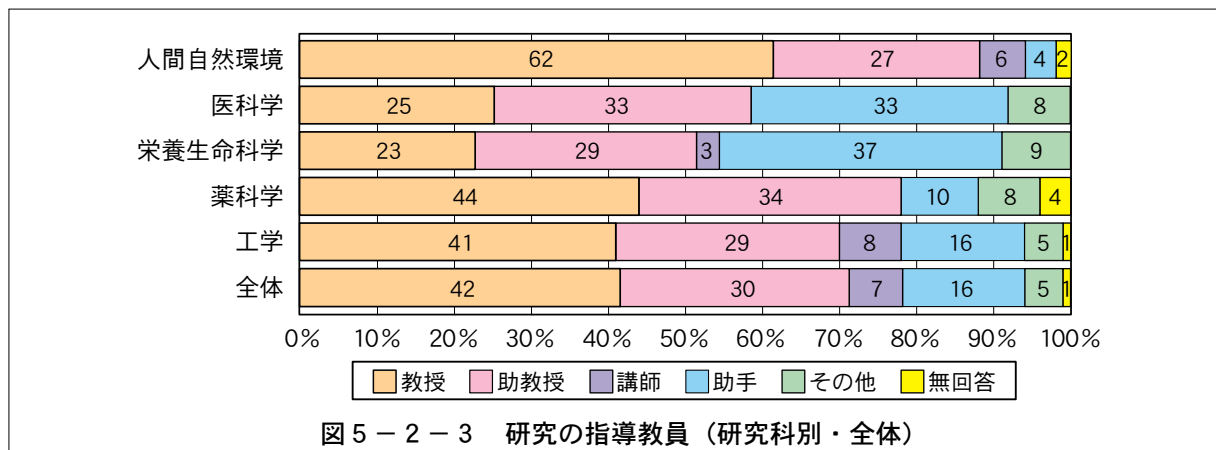


図5-2-3 研究の指導教員（研究科別・全体）



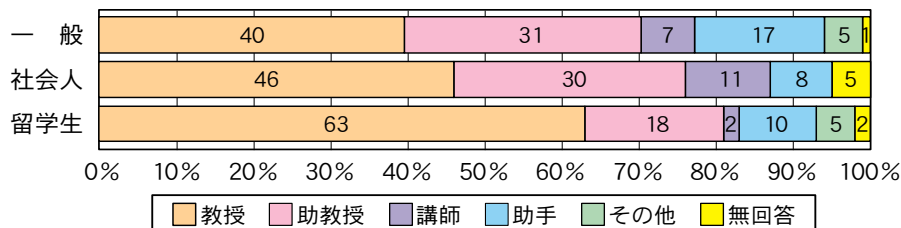


図5-2-4 研究の指導教員（一般・社会人・留学生別）

1週間に学生が教員から受ける研究指導の時間は、図5-2-5の学生全体で、「30分～90分未満」（35%）、「90分～5時間未満」（27%）、「30分未満」（26%）の順に多い。研究科別では、医科学と栄養生命科学には10時間以上と答える学生も多く（それぞれ、21%、17%）、学生によって研究指導を受ける時間に大きな差があることがわかる。人間自然環境では、58%の学生が1週間に「90分～5時間未満」の研究指導を受けており、他研究科に比べ「30分未満」「30分～90分未満」と答える学生が少ない。研究指導が十分に行われていることが推察され、以下に述べる図5-2-7の学生の満足度も高い。薬科学と工学はよく似た傾向を示しているが、工学に、1週間の研究指導時間が30分未満と答える学生がやや多く、また1年次、2年次にあまり差がない。それぞれの学生で研究指導を受ける時間が大きく異なるのは学生の不公平感に繋がりがやすいので、改善が必要であると思われる。社会人学生は、図5-2-2の研究活動時間が他学生より少ない結果と同様に、図5-2-6で研究指導を受ける時間も「30分未満」（30%）と答える学生が他学生より多い。留学生については、彼らの研究活動時間（図5-2-2）の多さと同じく、研究指導を受ける時間も他学生に比べてかなり多く、留学生への十分な指導が行われていることが分かる。

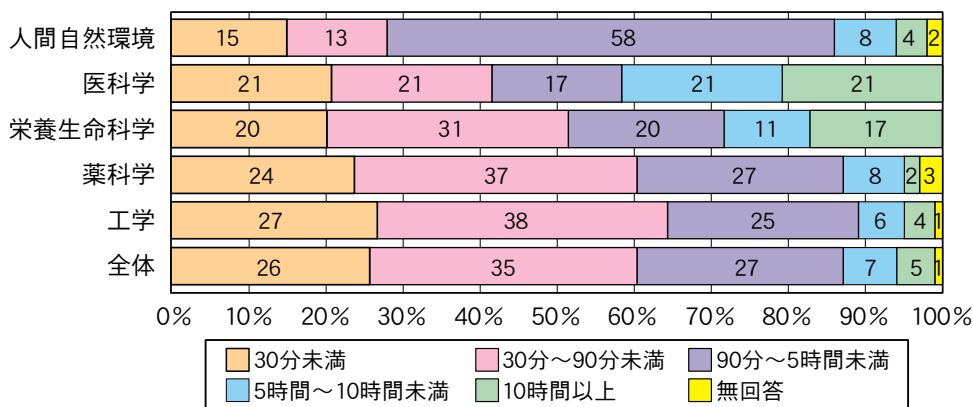


図5-2-5 1週間に研究指導を受ける時間（研究科別・全体）

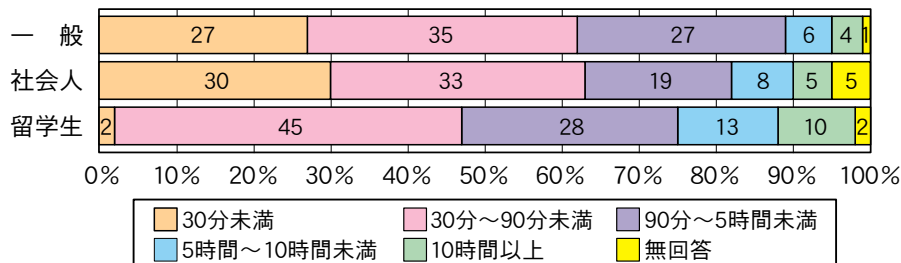


図5-2-6 1週間に研究指導を受ける時間（一般・社会人・留学生別）

研究指導に対する学生の満足度は、図5-2-7の全体で、62%の学生は「満足している」あるいは「やや満足している」と答えており、「やや不満足である」と「不満足である」は合わせて13%である。85%以上の学生は教員の研究指導に対して肯定的あるいは中立の意見であることは、個々の問題は別と

して、まずは安心できる結果ではないかと思われる。研究科別では、人間自然環境は他研究科に比べて満足度が高く、研究指導時間が長いことが要因であると思われる。図5-2-8において、留学生の満足度も、「どちらともいえない」も合わせると96%と高く、研究指導が十分に行われている結果である。一般学生は、社会人学生、留学生に比べ満足度がやや低く、15%の一般学生は現在の研究指導に何らかの不満を持っている。これら学生の不満に対して個別の対応が必要であると同時に、教員の研究指導時間と学生の研究活動時間が留学生に比べて少ないことと関連していることも考えられ、彼らに対する研究指導時間の増加、現在の学生気質に沿った指導など、改善を行う必要があると思われる。

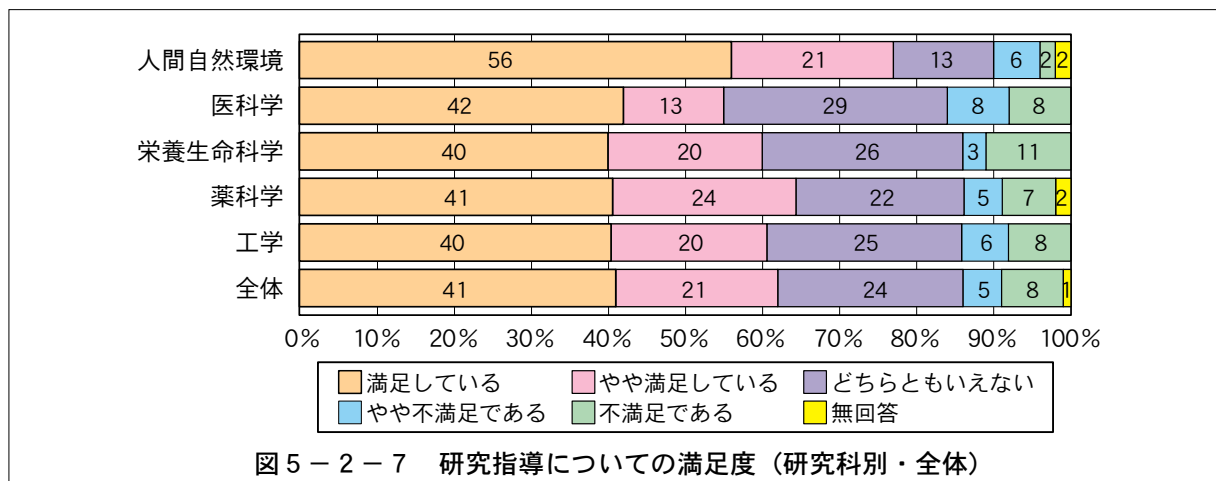


図5-2-7 研究指導についての満足度（研究科別・全体）

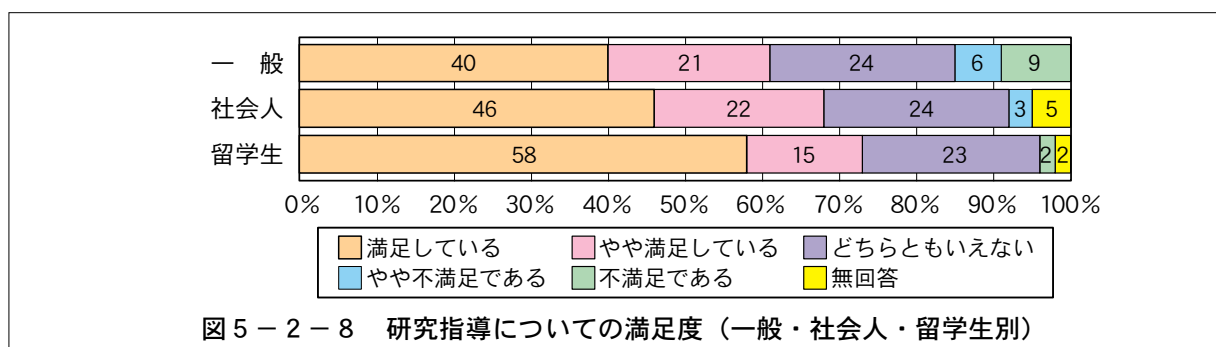


図5-2-8 研究指導についての満足度（一般・社会人・留学生別）

### 5-3 研究環境と所属研究科・専攻に対する満足度 (図5-3-1~図5-3-6)

研究環境については、全体で、「満足している」と「やや満足している」の合計が61%、「やや不満足である」と「不満足である」の合計は19%である（図5-3-1）。研究科別でも、医科学、薬科学、

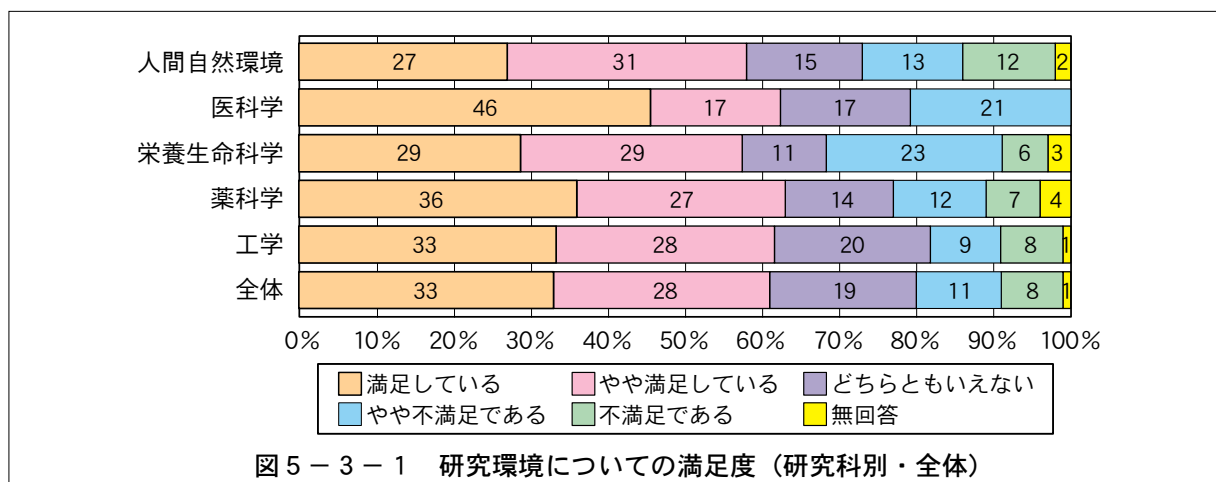


図5-3-1 研究環境についての満足度（研究科別・全体）



工学においてやや満足度は高いが、他研究科もその差は小さい。「やや不満足である」あるいは「不満足である」と答えた学生は、栄養生命科学、人間自然環境にやや多い。図5-3-2のように、ここでも、留学生の満足度は特に高い。一般学生には、研究環境についても、社会人学生、留学生より不満足な学生がやや多い。

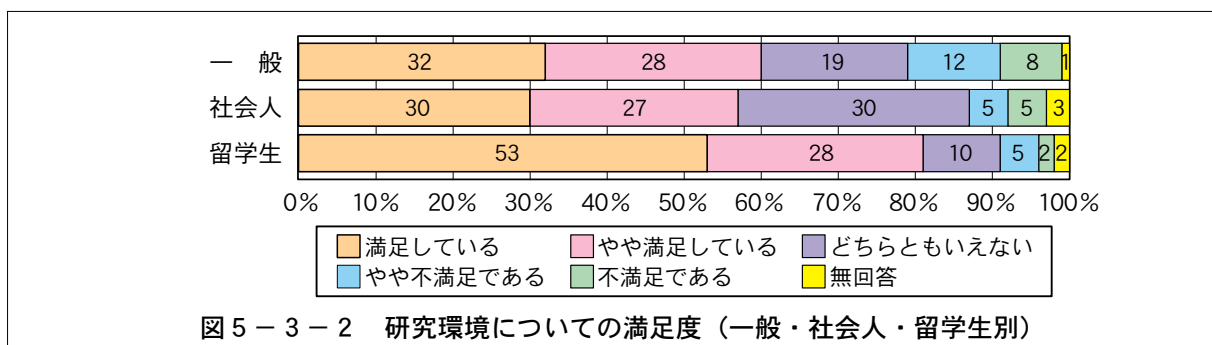


図5-3-2 研究環境についての満足度（一般・社会人・留学生別）

「やや不満足である」あるいは「不満足である」と答えた学生にその理由を問うたところ、図5-3-3のように、人間自然環境では65%の学生が「施設・設備」と答えた。薬科学、工学ではそれに「研究費用」を含めて50%を超える。医科学では、研究時間を挙げる学生も多く、図5-2-1において医科学学生の研究活動時間が栄養生命科学に次いで長く、研究時間が長すぎるとの不満なのか、あるいは逆に、授業その他の研究以外に費やさねばならない時間のため研究時間が少ないとの不満なのか、いくつかの理由が考えられるが、この回答項目では明らかではない。栄養生命科学で、「その他」と答えた学生が64%おり、その内容については不明である。図5-3-4の留学生についても、不満足な理由に「施設・設備」と答えた学生が多く、更なる研究施設・設備の向上と研究費の獲得への積極的な努力を学生が期待している。一方、多くの社会人は、不満足な理由に「研究時間」を挙げており、勤務時間による制約で研究時間が少ないためと思われるが、何らかの方策が必要である。

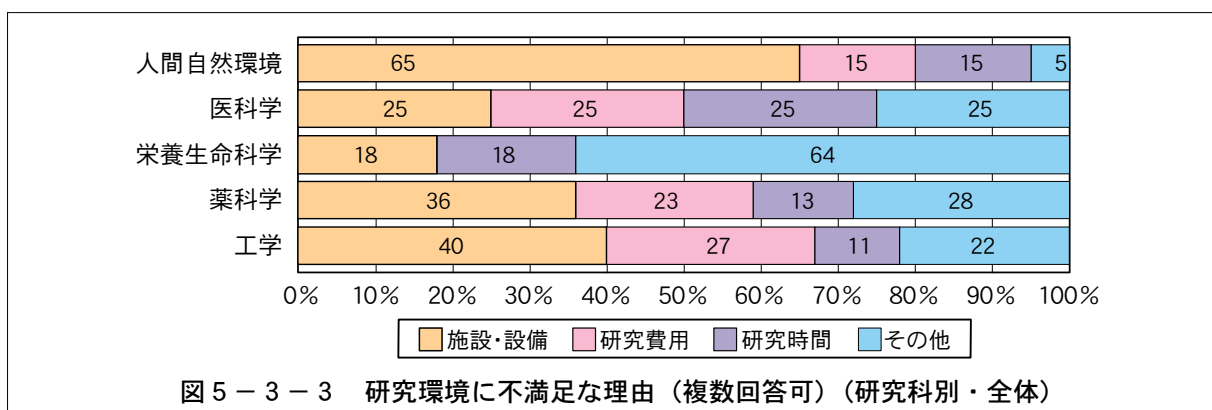


図5-3-3 研究環境に不満足な理由（複数回答可）（研究科別・全体）

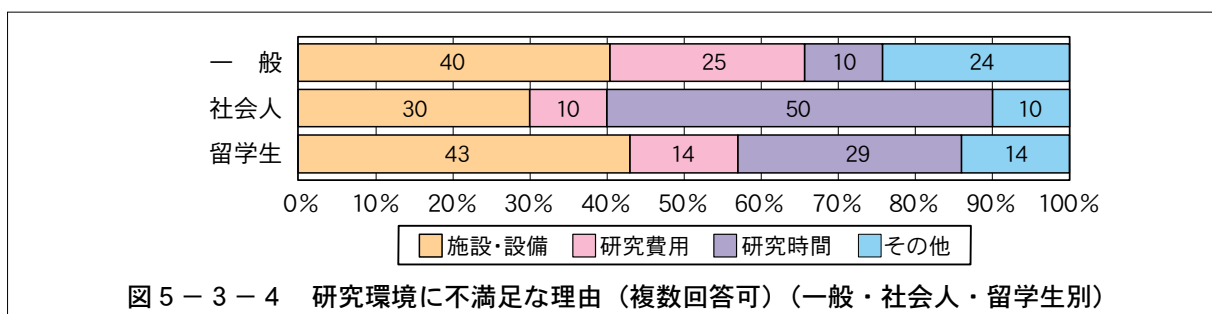


図5-3-4 研究環境に不満足な理由（複数回答可）（一般・社会人・留学生別）

所属している研究科・専攻について、「満足している」あるいは「やや満足している」と答えた学生は、図5-3-5の全体で62%、「どちらともいえない」を入れると86%となり、大方の学生は、一応、本学における勉学に不満をもっていないと思われる。研究科別では、薬科学、工学の順に学生の満足度が

高い。一方、「やや不満足である」あるいは「不満足である」と答えた学生が人間自然環境に18%、医学、栄養生命科学、工学にも10%を超える学生がいる。図5-3-6のように、これらは主として一般学生であり、不満足な理由の調査とこれら学生に対する個別の指導が必要である。社会人学生の満足度は一般学生よりやや低く、留学生の満足度はここでも高い。

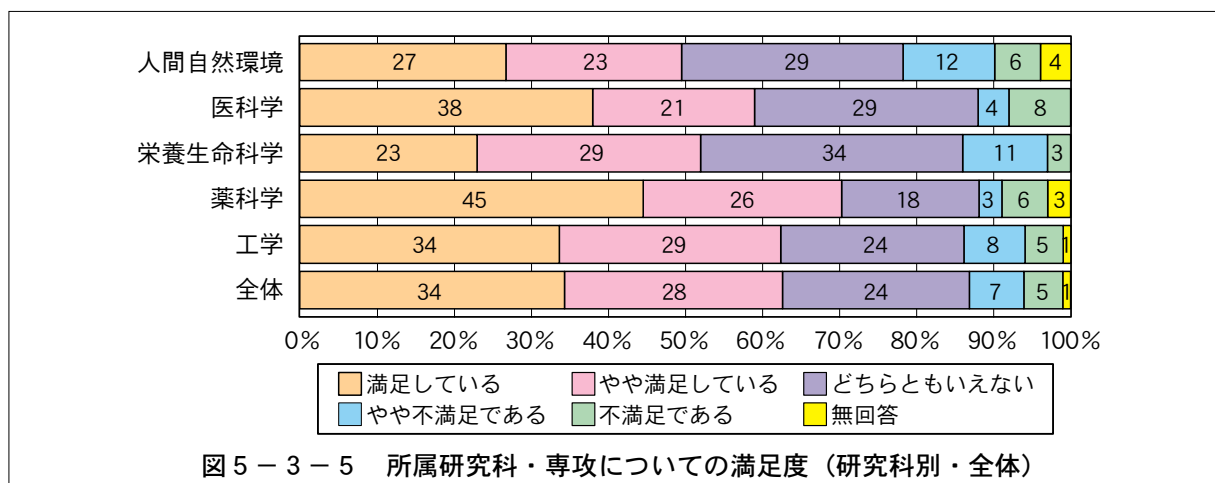


図5-3-5 所属研究科・専攻についての満足度 (研究科別・全体)

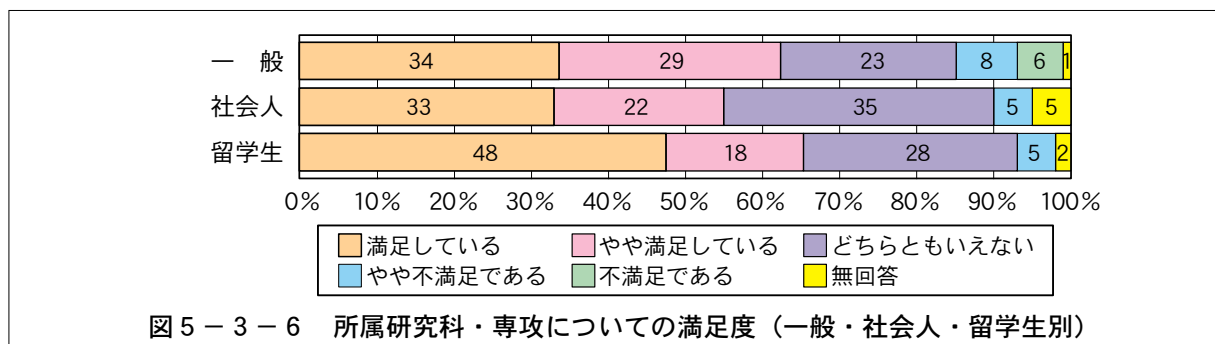


図5-3-6 所属研究科・専攻についての満足度 (一般・社会人・留学生別)

## 5-4 図書館の利用状況 (図5-4-1, 図5-4-2)

図5-4-1で、図書館をほぼ毎日利用していると答えた学生は人間自然環境の8%が最高で、学生全体として2%に留まっている。69%の学生は1か月に1回あるいはそれ以下の利用頻度である。他研究科学生に比べ、人間自然環境の学生はよく利用しており、42%の学生が1週間に1回以上利用している。また、図5-4-2のように、1週間に1回以上利用する学生は、留学生が43%と一番多く、社

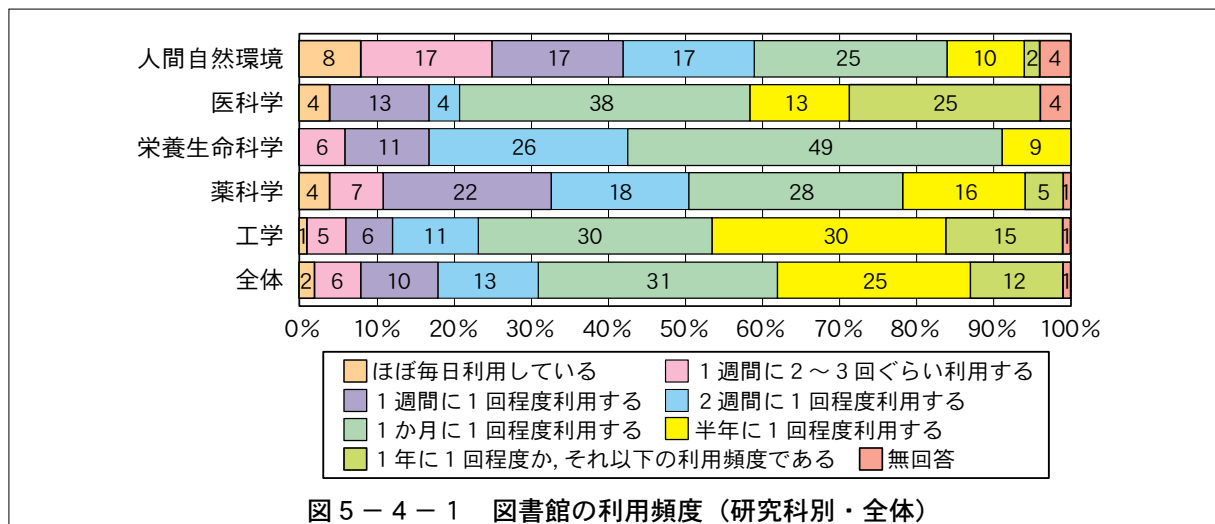


図5-4-1 図書館の利用頻度 (研究科別・全体)

会人学生、一般学生の順に少なくなる傾向にある。昨年度の学部学生に対する調査で30%前後の学部学生が1週間に1回以上利用していることと比べると、一般学生の利用頻度は低い。学生生活において学部学生と異なる大きな部分は研究活動にあり、多くの学生はインターネットを利用して文献検索をしており、そのために一見図書館の利用が少ない結果となったものと考えられる。さらに学生の自立的な研究姿勢を向上させるために、図書館のそれぞれの分野の専門書の充実や文献検索の利便性の向上のほか、インターネットを介して全文を閲覧、ダウンロードできる論文雑誌を増やし、学生自身が、研究室の机上で読みたい論文をその場で読める環境を整える必要があると思われる。

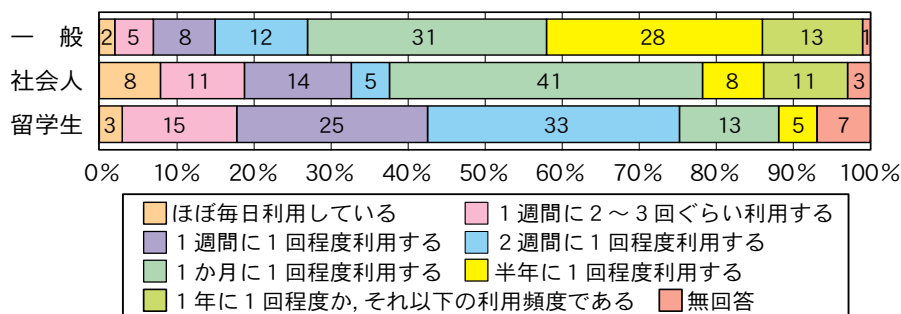


図5-4-2 図書館の利用頻度（一般・社会人・留学生別）

## 5-5 海外渡航の経験と英会話 (図5-5-1～図5-5-8)

入学後の海外渡航経験を問うたところ、図5-5-1の全体で、72%の学生が「ない」と答えており、海外渡航の経験のある学生も1回（19%）程度であった。栄養生命科学の学生はやや海外渡航の経験をもつ学生が多く、2回以上の渡航経験があるものも多い。質問が入学後と限っているため、それ以前を含めると海外渡航経験者はもっと多いかも知れない。図5-5-2の一般学生と社会人学生との差は、特に認められない。

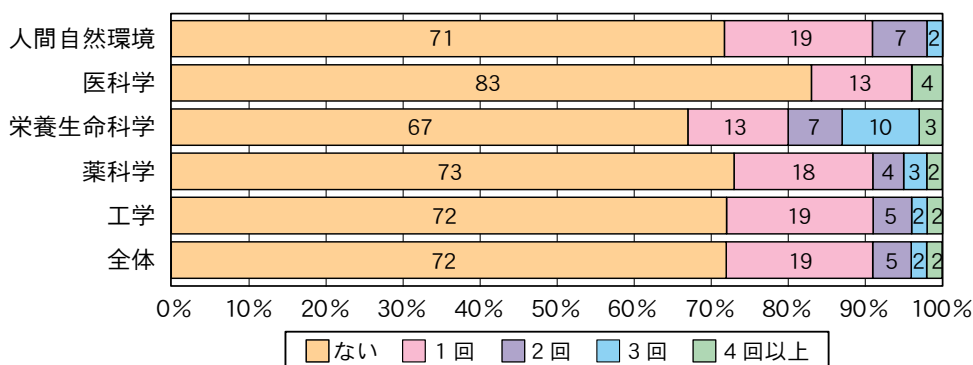


図5-5-1 入学後の海外渡航経験（日本人のみ）（研究科別・全体）

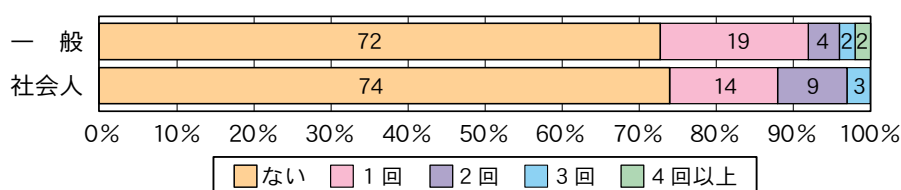


図5-5-2 入学後の海外渡航経験（日本人のみ）（一般・社会人別）

図5-5-3のように、海外渡航経験者の渡航目的の約半分は「観光」である。栄養生命科学と工学に「学会参加」がその次に多く、医科学、薬科学では「学術調査」が続き、人間自然環境では「社会活

動」目的の渡航が多い。「観光」目的の渡航も経験という意味では必要かも知れないが、「留学」、「学会参加」、「学術調査」等の海外での経験は今後の勉学や研究活動にプラスになることが多いと思われる。図5-5-4の一般学生と社会人学生との差違は特に認められない。学生にとって渡航費用が大きな問題であるので、多くの学生が海外での研究活動に関わる経験ができるようその点の援助をさらに充実する必要がある。

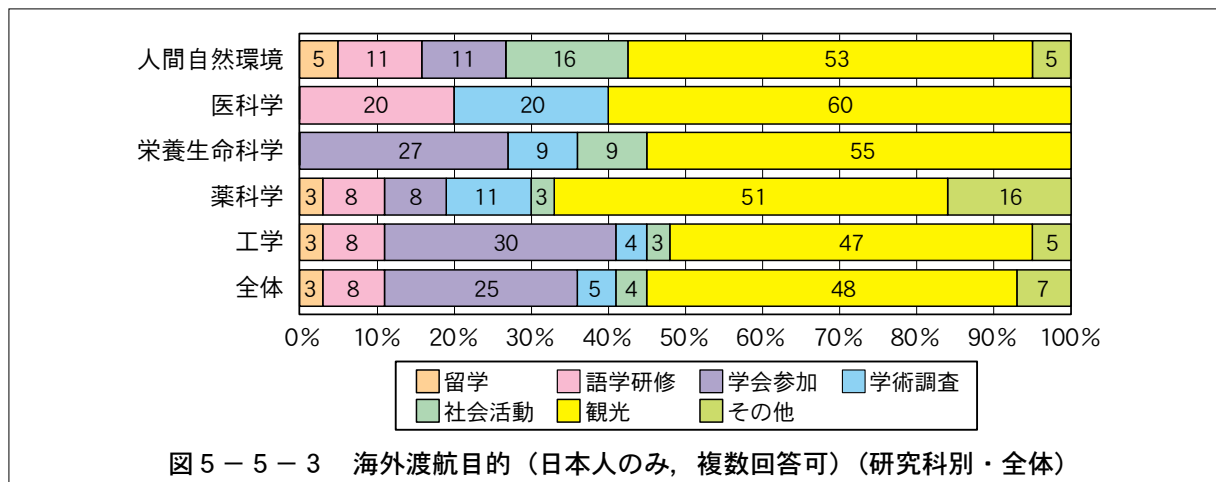


図5-5-3 海外渡航目的（日本人のみ、複数回答可）（研究科別・全体）

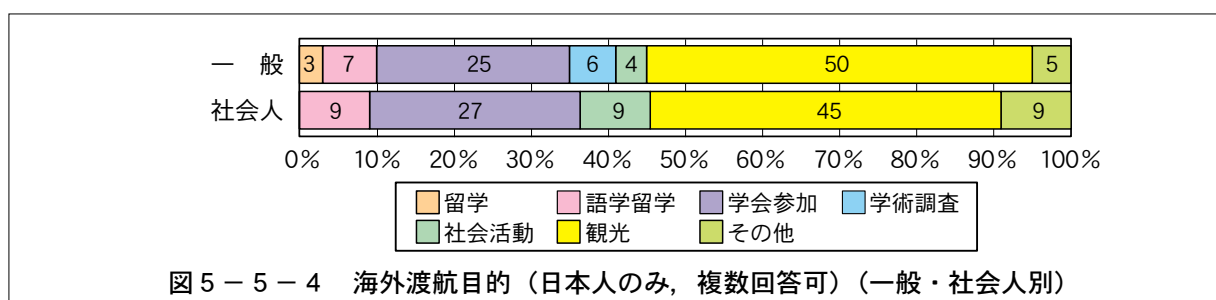


図5-5-4 海外渡航目的（日本人のみ、複数回答可）（一般・社会人別）

英会話についての質問に対して、図5-5-5では、栄養生命科学、薬科学、工学の70%以上の学生が「あまりできない」または「できない」と答えている。一方、人間自然環境の学生の58%は「なんとか日常会話ができる」以上の回答をしており、英会話に対する認識が高いと思われる。医科学では37%が「なんとか日常会話ができる」以上の回答をしており、人間自然環境に続いて多い。図5-5-6にあるように、一般学生より社会人学生の方が英会話をできる学生がやや多い。

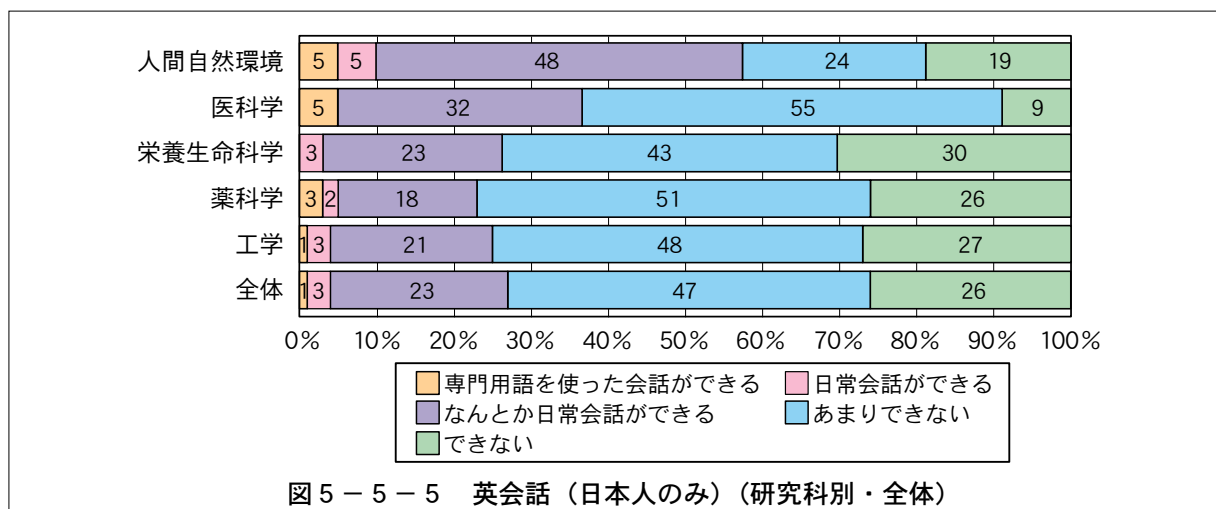


図5-5-5 英会話（日本人のみ）（研究科別・全体）

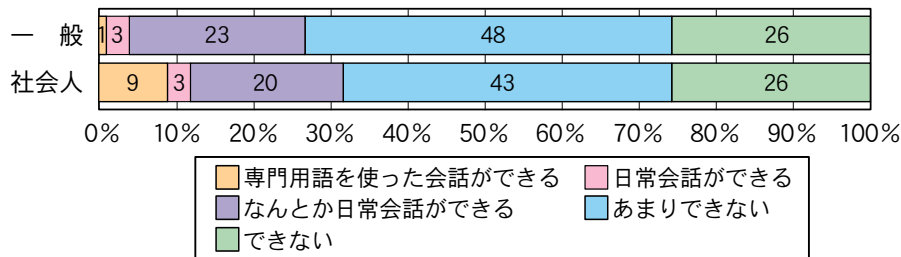


図 5-5-6 英会話（日本人のみ）（一般・社会人別）

語学力を高めるために何をしているかの質問に対して、図 5-5-7 において全体の半数以上 (56%) の学生は何らかの努力をしており、多くの学生が語学力の重要性を認識していることが窺える。複数回答可としているため、学生の実数はこれより少ないと思われるが、「TOEIC, TOEFL 等を受験する」(29%)、「ラジオ、テレビの英会話番組で学習している」(10%)、「つとめて外国人と英語でコミュニケーションする」(5%)、「英会話学校に通っている」(5%) が多い。研究科別にみると、「英会話学校に通っている」学生は人間自然環境 (10%) と栄養生命科学 (14%) に多く、「TOEIC, TOEFL 等を受験する」学生は工学に多い。工学部では、優秀なスコアをとった学部学生を表彰する制度があり、受験料の一部を援助している学科もある。大学院入試にも TOEIC のスコアの提出を求める専攻も多く、学生の意識は高いように思われる。一方、「ラジオ、テレビの英会話番組で学習している」学生も医科学 (20%)、人間自然環境 (14%) をはじめすべての研究科で 10% 程度以上いる。また、医科学に「つとめて外国人と英語でコミュニケーションする」と答える学生 (24%) が多く、外国人留学生や訪問研究者と積極的に対話する環境にあると思われ、「何もしていない」が一番少ない。図 5-5-5 の英会話が「あまりできない」あるいは「できない」と答える学生を減らすには、今後、このような学生の個人的な努力に対しても経済的な援助や環境づくりも考えていく必要がある。

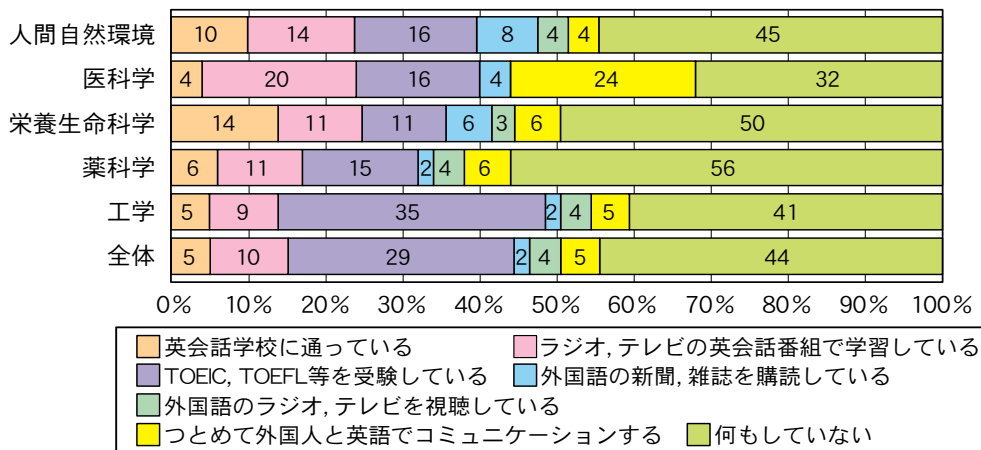


図 5-5-7 語学についての自主学習（日本人のみ、複数回答可）（研究科別・全体）

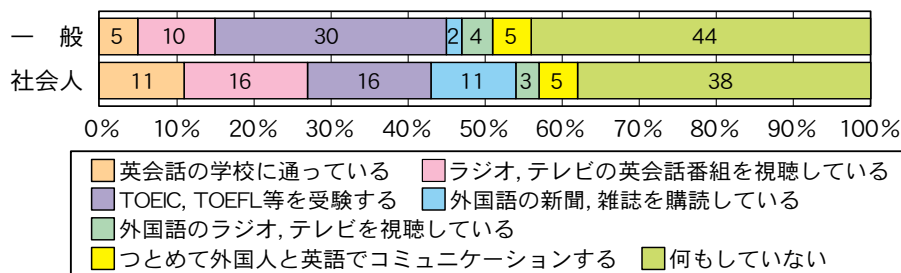
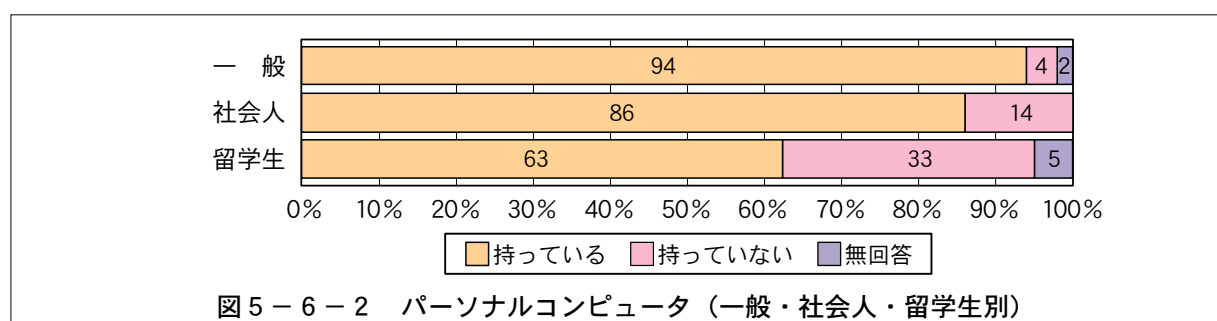
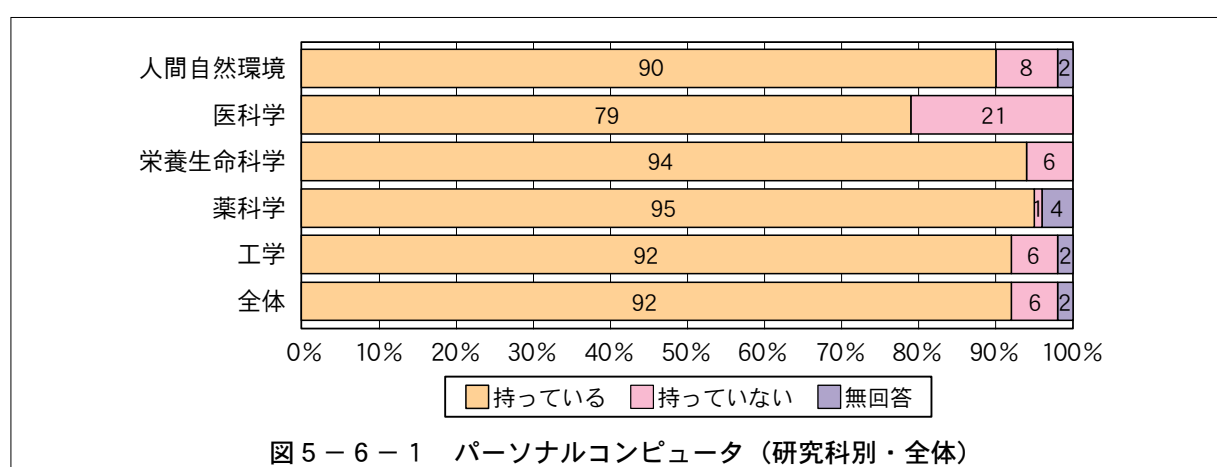


図 5-5-8 語学についての自主学習（日本人のみ、複数回答可）（一般・社会人別）

## 5-6 パーソナルコンピュータ (図5-6-1, 図5-6-2)

図5-6-1で、全体として92%の学生は自分のパーソナルコンピュータを持っている。研究科別で「持っていない」と答えた学生が最も多かった医科学も、一般学生については「持っている」学生が93%と、他研究科同様高い。インターネットへの接続については質問していないが、かなりの学生は自宅でインターネットを通じて必要な情報を得ることができる状況にあると予想される。図5-6-2で、留学生、社会人学生、一般学生の順に「持っていない」学生が少なくなる傾向がある。留学生については自分のパーソナルコンピュータを持っている学生は約2/3である。これについて、研究室のパーソナルコンピュータの使用等、十分な配慮がなされているとは思われるが、今回の調査によると、留学生の勉学・研究活動への意識は一般学生より高く、私費留学生等、経済的に苦しい学生の学習環境の向上に、一般学生とのバランスを考えながら、今後も特別な配慮あるいは援助を続けていく必要があると考えられる。



## 5-7 本学の教育への期待 (図5-7-1, 図5-7-2)

修学状況の最後に、中央教育審議会答申「新時代の大学院教育」(平成17年9月)に挙げられている、新時代の大学院教育の展開方策について質問した。複数回答可で回答項目に列記した6つの方法について意見を求めたが、ほぼ全ての方法に意見が分かれた。学生は、それぞれの勉学目的に合致した、様々な教育を求めているものと思われる。これらの教育の実施には、教員の教育・研究指導能力の更なる向上への努力はもとより、企業、他大学、他研究機関との協力を密にした教育・研究体制が望まれる。

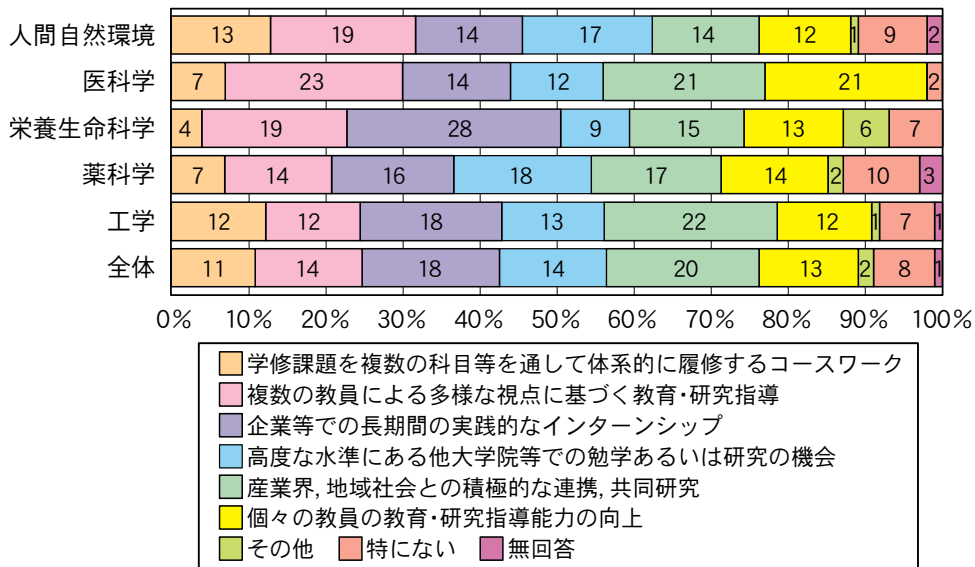


図 5 - 7 - 1 本学の教育への期待（複数回答可）（研究科別・全体）

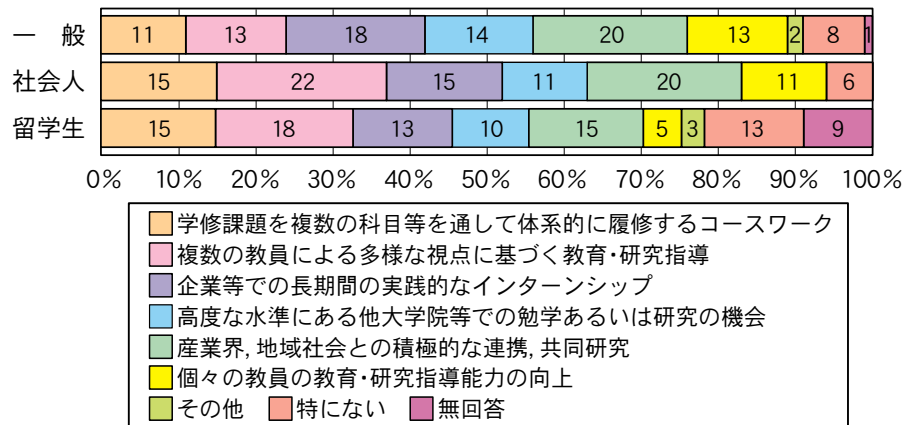


図 5 - 7 - 2 本学の教育への期待（複数回答可）（一般・社会人・留学生別）



## 第6章 進路選択・就職について

### 6-1 博士（後期）課程への進学希望（図6-1-1, 図6-1-2）

図6-1-1から、博士（後期）課程への進学希望は研究科によって、幾分違いが見られる。全体のパターンに近いのが人間自然環境、薬科学および工学である。人間自然環境では、「進学したい」と「奨学金等の経済的支援があれば進学したい」を合わせたものが16%である。これが薬科学では20%であり、工学では10%である。これらと医科学ではパターンが異なる。医科学では、「進学したい」と「奨学金等の経済的支援があれば進学したい」を合わせたものが50%である。医科学では博士（後期）課程への進学希望者が多い。これと比べて、人間自然環境と工学では進学希望者が少ない。そしてこれと比例して、進学しないと答えた比率が人間自然環境、薬科学および工学では60%台から80%台と高いが、医科学と栄養生命科学では40%台と比較的低い。医科学では「奨学金等の経済的支援があれば進学したい」が21%あることから、奨学金等の経済的支援を改善すれば、博士（後期）課程への進学者は増えることが予想される。

図6-1-2から、留学生では、「進学したい」が37%、「奨学金等の経済的支援があれば進学したい」が30%であり、両方合わせると70%弱となり、進学希望がかなり高いことがわかる。

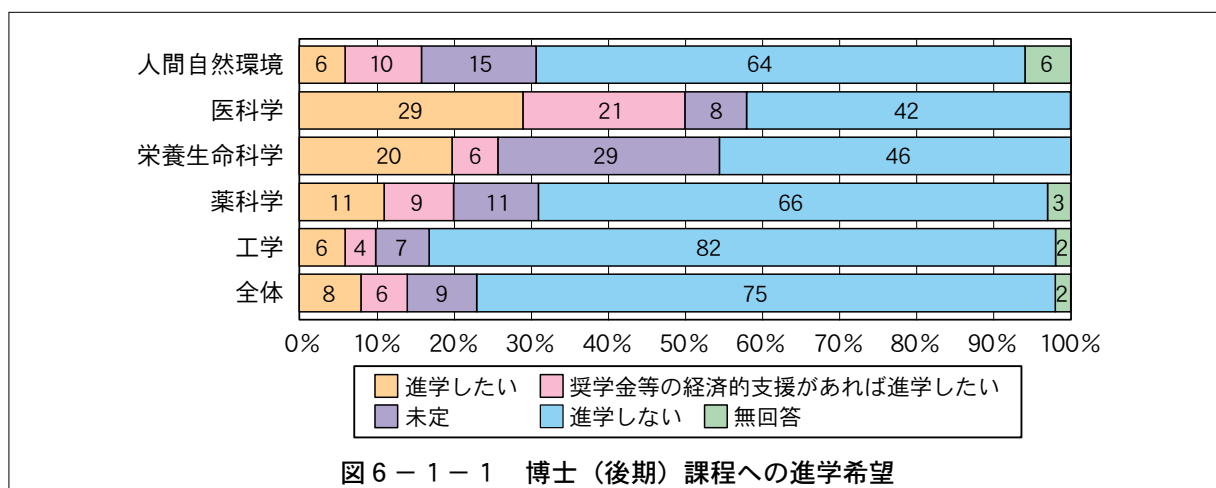


図6-1-1 博士（後期）課程への進学希望

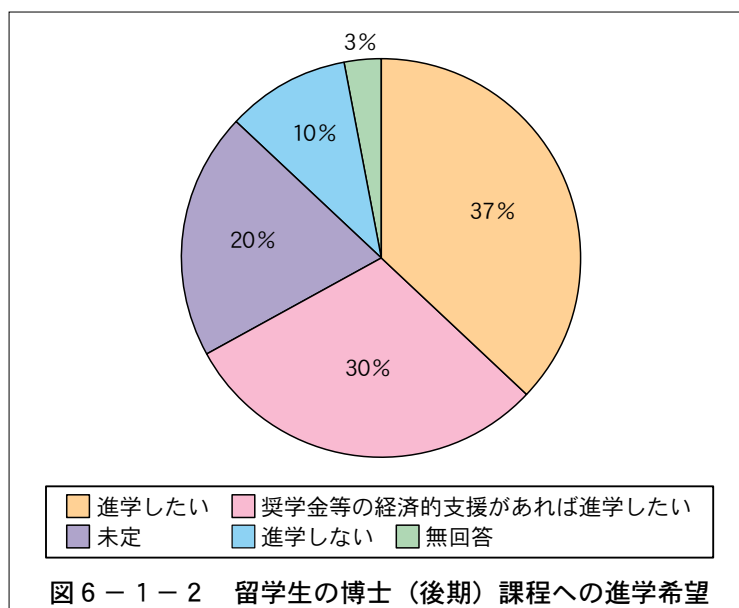


図6-1-2 留学生の博士（後期）課程への進学希望



## 6-2 本学または他大学への進学 (図6-2-1, 図6-6-2)

図6-2-1から、本学または他大学への進学は、全学的にはほぼパターンとしては似た傾向を示している。いずれも「本学」が一番多く、「他大学」と「未定」が少ない。しかし細かく見ていくと、いくらか違いが見られる。人間自然環境では「本学」と回答した者40%と、他研究科の50%から80%弱と比べて低い。「本学」と回答したのが一番多かったのは栄養生命科学である。人間自然環境の場合、まだ博士課程が設置されておらず(改組計画のなかで検討中)、本学といった場合は、他研究科を指す。また他大学と答えた割合が30%と一番高くなっているのもこの理由によるであろう。栄養生命科学の大学院生は、自分の研究科の博士(後期)課程への進学をまず考えているようである。

図6-2-2から、留学生では、「本学」と回答した者が85%、「他大学」と回答した者が7%となっている。本学に対する留学生の進学希望者が80%以上と多いことから、全学的に博士(後期)課程の整備が望まれる。

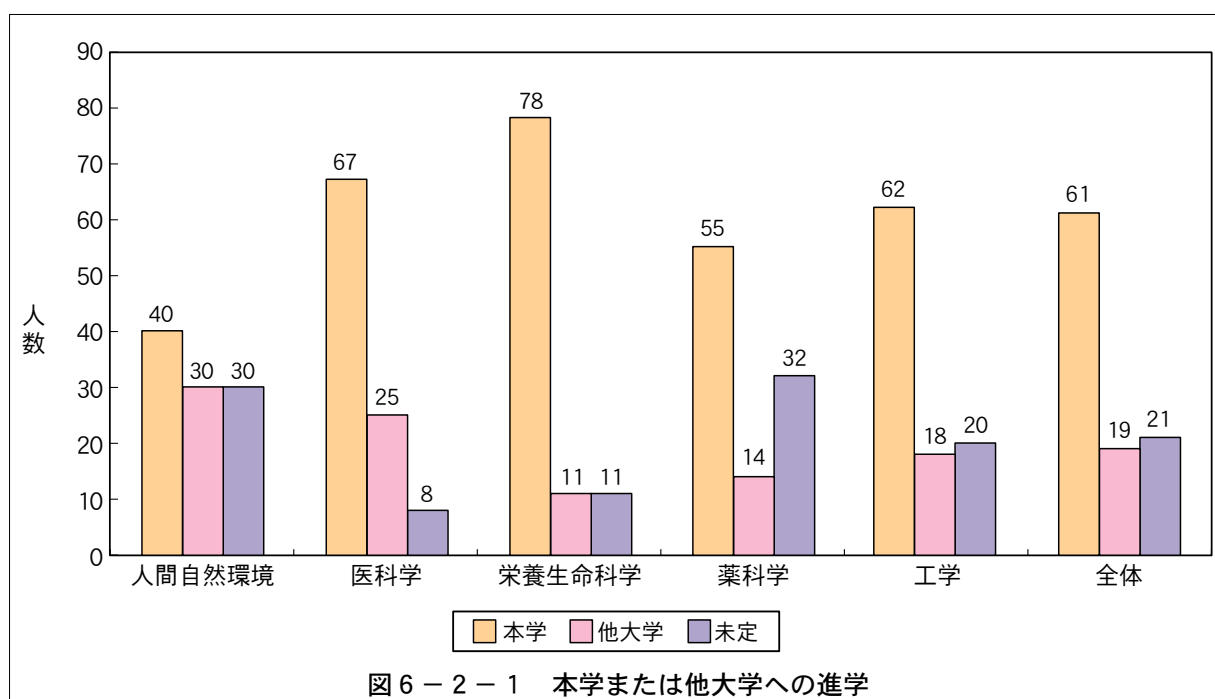


図6-2-1 本学または他大学への進学

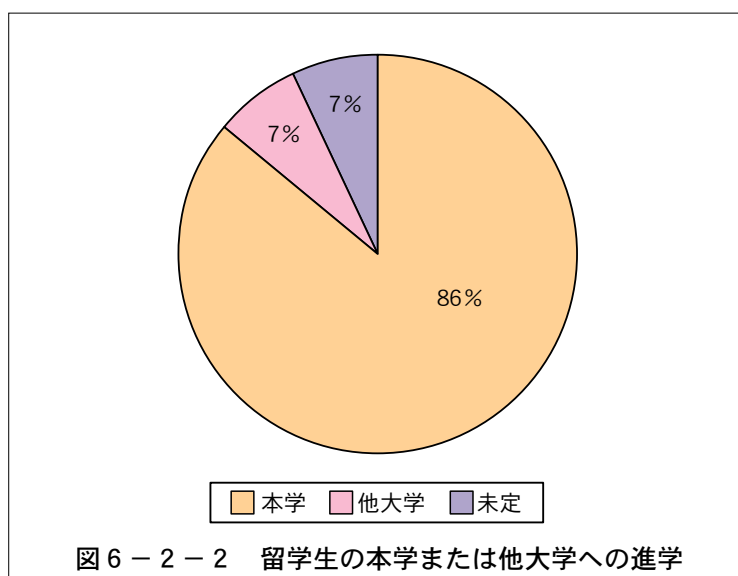


図6-2-2 留学生の本学または他大学への進学

### 6-3 進路選択で重視するもの (図6-3)

図6-3から、進路選択で重視するものは、栄養生命科学を除いて、全学的に見てほぼ同じ傾向を示している。全体平均で見ると「就職先の将来性・安定性」が25%、「能力を發揮できること」が24%であり、これに「収入」の18%、「勤務先の地理的条件」の15%が続いている。栄養生命科学では「能力を發揮できること」を挙げた者が30%と全学的に最も多く、また「勤務先の地理的条件」を挙げた者が25%とこれもまた全学的に最も多い。逆に「社会的評価」を挙げた者は5%と全学的に最も少ない。他に目立つところでは、医科学で「就職先の将来性・安定性」を挙げた者が28%と全学的に最も多く、逆に「収入」を挙げた者が12%と全学的に最も少ない。

留学生に関しては、全体平均とほぼ同じ傾向となっている。

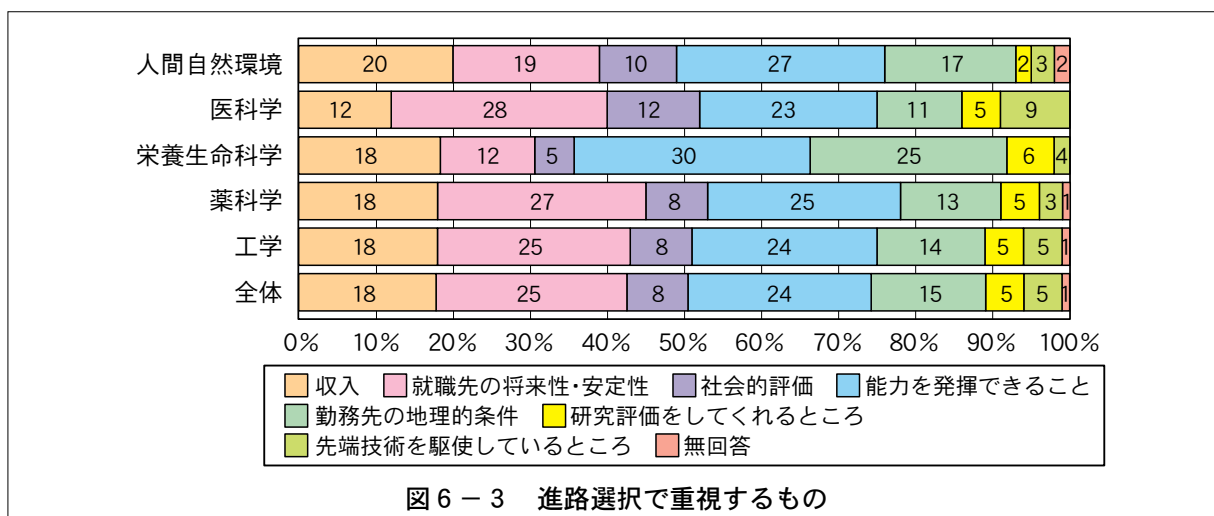


図6-3 進路選択で重視するもの

### 6-4 進路を考える上での情報入手手段 (図6-4-1, 図6-4-2)

図6-4-1から、進路を考える上での情報入手手段は、全学的にほぼ同じパターンになっていることがわかる。どの研究科とも就職情報誌・新聞・マスコミが一番多く、次に先輩・知人の順である。本学の大学院生はこれらの情報にかなり頼っていると思われる。ただ就職担当教員を挙げている割合が全学的に低いのが目立つ。就職担当教員から就職情報が伝えられているはずであるが、大学院関係の情報が少ないのかもしれない。

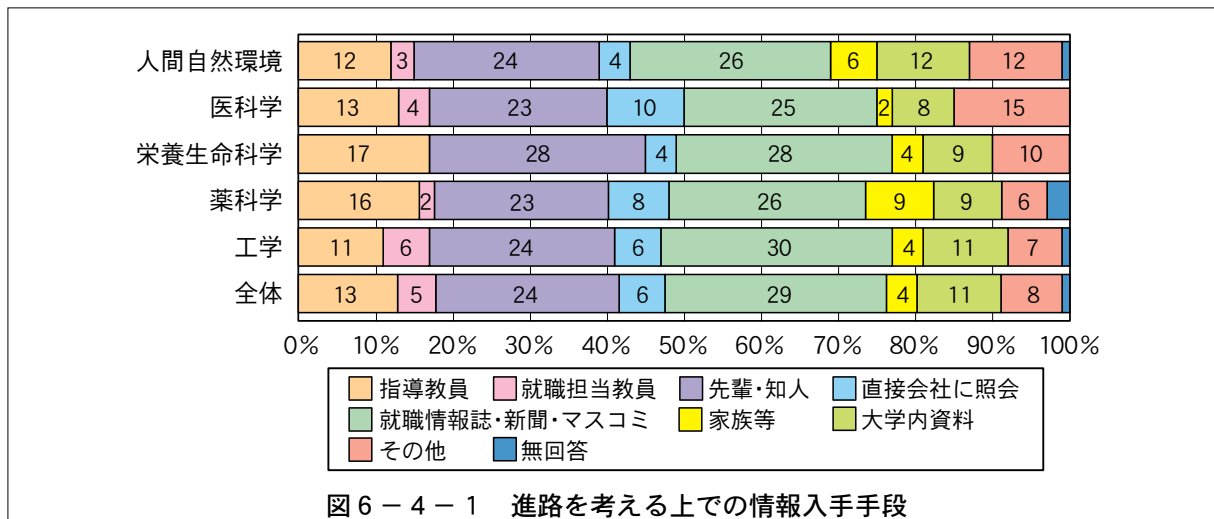
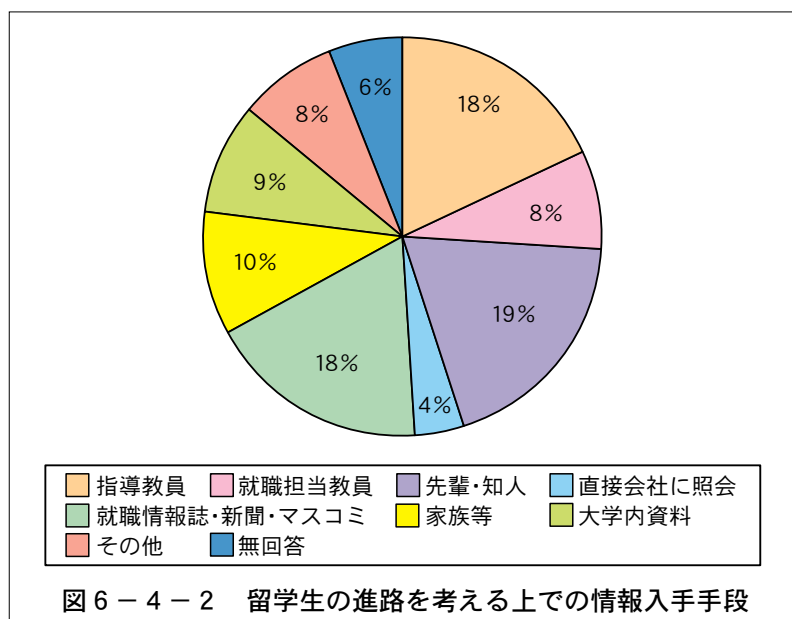


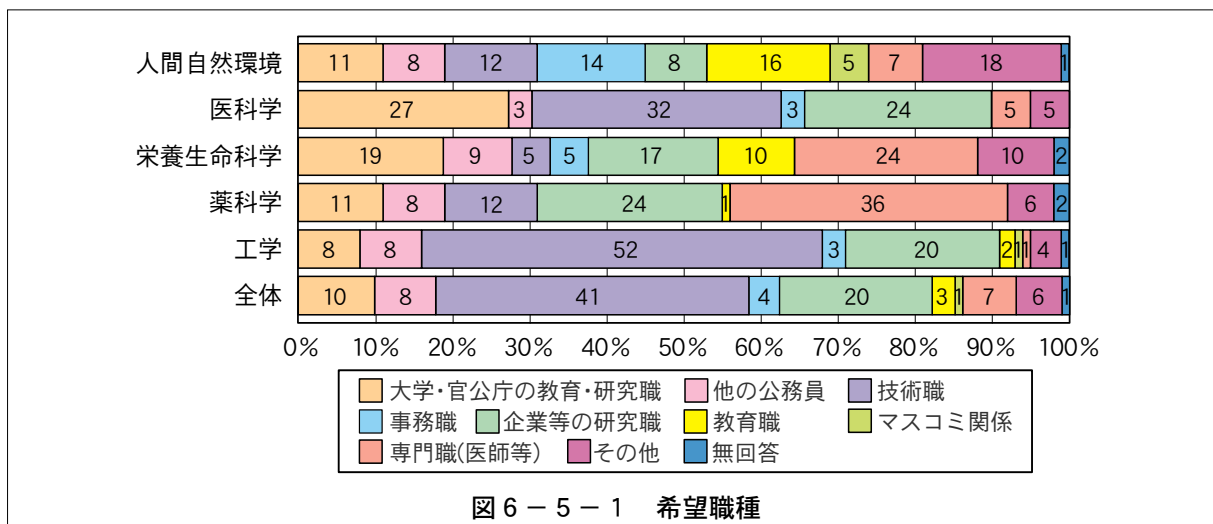
図6-4-1 進路を考える上での情報入手手段

図6-4-2から、留学生に関しては、全体平均とは少し異なった傾向が見られる。一番多いのが「先輩・知人」の19%、次いで「指導教員」と「就職情報誌・新聞・マスコミ」のそれぞれ18%、「家族等」が10%と続いている。先輩・知人に依存している割合が高く、また指導教員にもかなり頼っているところから、指導教員の就職指導の充実が望まれる。



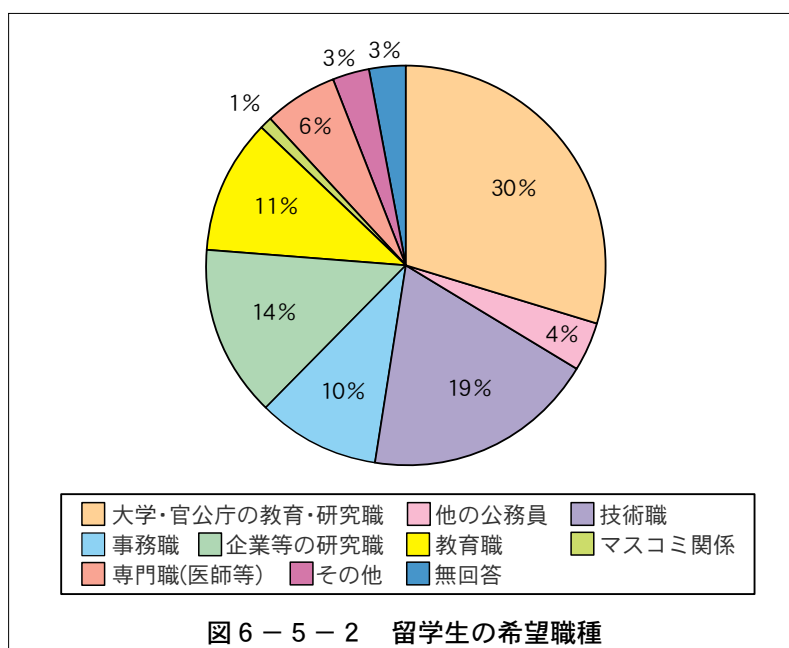
### 6-5 希望職種 (図6-5-1, 図6-5-2)

図6-5-1から、希望職種に関しては、研究科によってかなり違いが見られるが、それぞれの研究科の特徴を反映したものとなっている。人間自然環境では、それぞれの回答項目にそれほど大きな差は見られない。これは総合的な研究内容を反映しているためと思われる。その中で、他研究科と比較して多いのが事務職の14%と教育職の16%である。次に、それぞれの研究科の特徴を見てみると、医科学では、技術職が32%と一番多く、次いで大学・官公庁の教育・研究職の27%、企業等の研究職の24%となっている。栄養生命科学では専門職が24%と一番多く、次いで大学・官公庁の教育・研究職の19%、企業等の研究職の17%となっている。薬科学では、専門職が36%と一番多く、次いで企業等の研究職の24%、技術職の12%、大学官公庁の教育・研究職の11%となっている。これら蔵本地区の研究科の学生はそれぞれヘルスバイオサイエンス研究の特徴に応じた職種を希望していることがわかる。工学は、



技術職が52%と半分以上を占め、次いで企業等の研究職の20%がこれに続いている。これも技術に関わる工学の特徴をよく反映している。

図6-5-2から、留学生に関しては、全体平均とかなり違った傾向にある。「大学・官公庁の教育・研究職」が30%と最も多く、次いで技術職が19%、企業等の研究職が14%となっている。



## 6-6 就職支援室の利用 (図6-6-1, 図6-6-2)

図6-6-1から、就職支援室の利用に関して、全学的に利用が少ないことが見て取れる。特に、蔵本地区の研究科では利用が低い。医科学と栄養生命科学では「現在も利用している」が0%となっている。これは就職支援室の分室があるものの、常駐者がいないなどの体制が大きな理由と考えられる。全学的な就職支援体制の確立が望まれる。

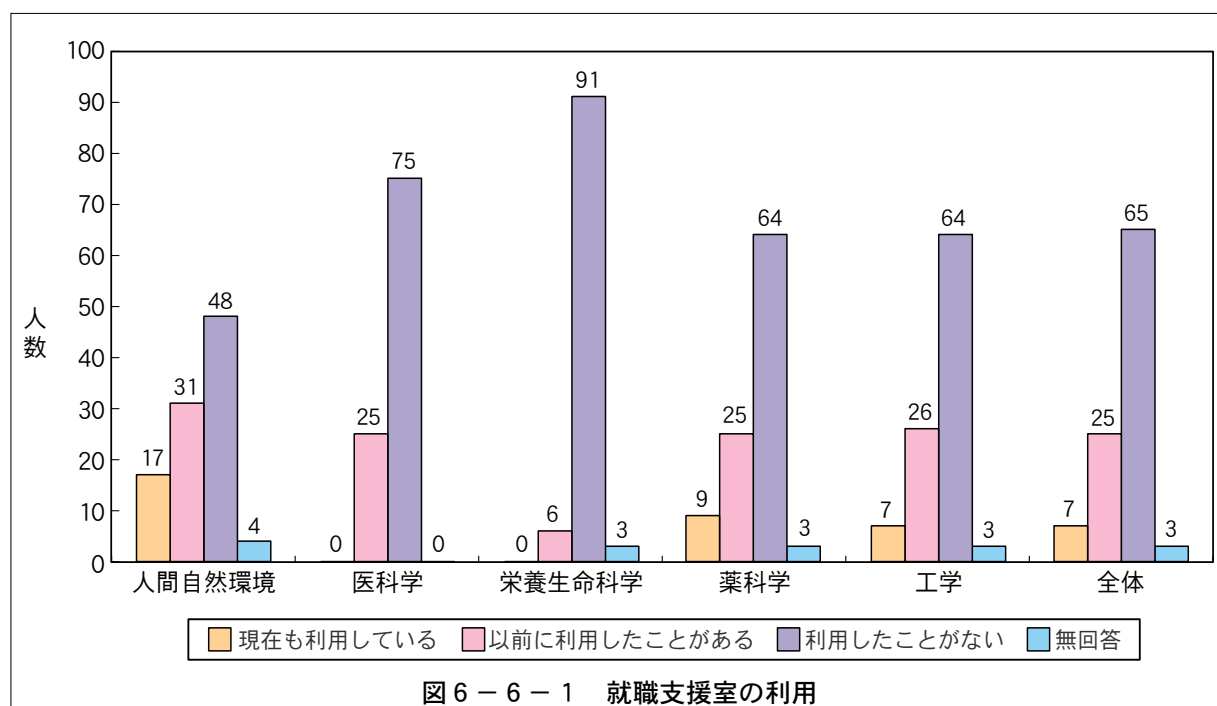
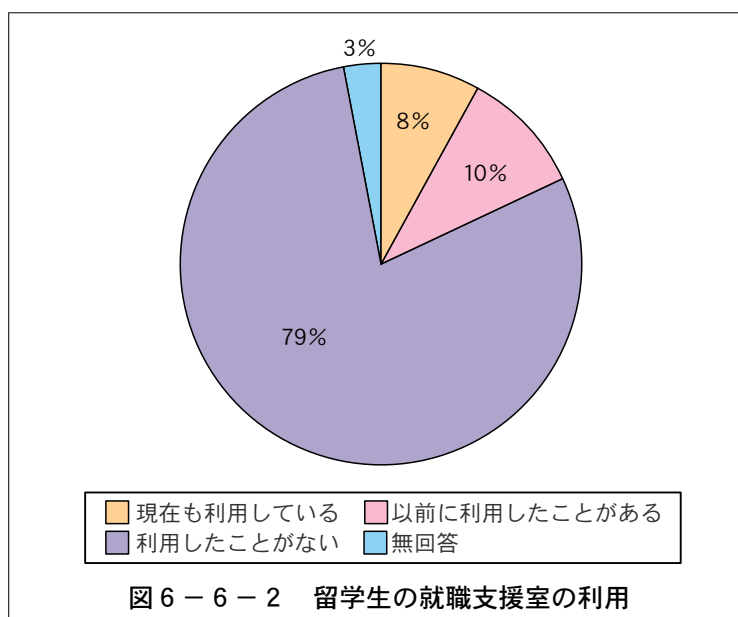


図6-6-2から、留学生に関しては、全体平均に近いが、「利用したことがない」が79%もあり、就職支援室の利用を強く勧めることが望まれる。



## 第7章 研究科・教育部の現状と課題

### 7-1 人間・自然環境研究科（人間自然環境）

人間自然環境の現状と課題をアンケートの主な項目に即して検討する。まず「家族・住居、通学」については、家庭の年間収入は250万円未満が29%と全学平均の17%と比べて多い。住居区分では自宅が46%となっており、半数近くの学生が自宅から通学している。これに対応して、住居費は3万円未満が37%と全学的に一番多い。住居の満足度は「満足している」が24%と全学平均の44%と比べると少ないが、「やや不満である」と「不満である」とを合わせると34%（全学平均では17%）となっている。

「収入・支出」については、収入3万円未満が38%と全学平均の52%と比べてかなり少ない。親等からの援助額は「全くない」が42%と全学平均の22%を大きく上回っているが、これは自宅通学を反映していると思われる。1か月の平均支出額は、5万円未満が42%あり、支出を抑えた生活をしていることが推測される。1か月の平均食費額は2万円未満が35%と、全学平均の27%よりも多いがこれも自宅通学のためと思われる。経済状況では、「ゆとりがある」は2%と全学中最も少なく、「大変苦しい」が全学中15%（全学平均は11%）と最も多い。自宅生が多くても経済状況は必ずしも良くないことがわかる。ティーチングアシスタント（TA）については、54%（全学平均では44%）が従事しており、全学的には三番目に多い。その中身は「実験補助」が30%と全学中最も少なく（全学平均が46%）、「演習補助」が38%と全学中最も多い（全学平均が24%）。これはTAのかかなりの者が総合科学部の演習の授業の補助に従事していることを窺わせる。アルバイトでは、58%がアルバイトに従事しており（全学平均では54%）、アルバイトに従事している学生の割合がかなり高い。日数では1日が30%と、2日が30%、3日が20%と、ほとんどが3日以内である。次に、アルバイト従事時間数では5時間未満が57%と、半数以上は5時間未満であり、5～10時間未満が13%、10～15時間未満が13%、15～20時間未満が13%である。アルバイトの目的は、「生活費や学費のため」が43%と半数近くが生活費や学費に当てているが、「日常の娯楽・嗜好品等の購入のため」が26%ある。全体として見れば、全学の平均的な使い方に近い。アルバイトの種類では、「家庭教師・学習塾講師等」が36%と全学で最も多い。これは総合科学部の研究内容と関連していると思われる。アルバイト収入は3万円未満が50%、3～5万円未満が33%である。

「健康状態」については、男子については取り立てて問題にすることはないが、女子については「気になる症状」があると答えた学生が少なからずいる。症状は頭痛、めまい・立ちくらみ、下痢・便秘などである。女子学生の健康管理に注意が必要である。

「学生生活上の問題点」では、迷惑行為のうち「いたずら電話を受けた」が、15%あり、男女に分けたとき女子では18%ある。全学平均も19%あり、この対策は全学的にも望まれるところである。指導教員との親密度では、「度々ある」が47%と全学中で最も高く、良い傾向であると思われる。大学事務室の対応では、「満足している」と「やや満足している」を合わせたものが36%、「どちらともいえない」が37%、「やや不満足である」が18%、「不満足である」が10%となっている。全体として見ると、不満足度の割合は低いと言える。

「修学状況」について、「本学を選んだ理由と目的」では、「希望する研究分野があるから」が27%と最も多く、次いで「出身大学だから」が21%となっている。全体として研究分野はそれなりに評価されていると言えよう。「大学院で勉学により目指すもの」では、「知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある社会人」が41%と最も多く、次いで「高度な専門的知識・能力をもつ、高度専門職業人」の37%がこれに続いている。これらは全学的にも最も多い。これに対して、「創造性豊かな優れた研究・



開発能力をもつ研究者」は4%と全学的に一番少ない。研究者を目指すよりも、知的な素養のある社会人・職業人を目指していることがわかる。また「大学教員」を目指す学生が8%と全学的に見て比較的多いのは、留学生のためと思われる。この点では、留学生の教育にも力を入れる必要がある。「研究活動と研究指導」では、1週間の研究活動時間で90分から5時間未満が37%と全学で一番多く、これと30分～90分未満の8%を合わせると半分近くになる。それに対して10時間以上が35%と全学で一番少ないことを考えると、研究時間は少ないと言える。「研究の指導教員」は教授が62%と全学中で最も多い。これは他の研究科で助教授、講師、助手も研究指導を分担している状況とは異なっている。これには助手の数が非常に少ないことも関係しているであろう。「1週間に研究指導を受ける時間」は90分～5時間未満が58%と全学中最も多く、他研究科と比べて、比較的多くの時間指導を受けていることがわかる。「研究指導についての満足度」では、「満足している」が56%と全学中で一番高い。教員から多くの時間指導を受けられることで満足度も高くなっていると思われる。しかし、「研究環境についての満足度」では、「満足している」が27%と全学で一番低い。これは「研究環境に不満な理由」として、施設・設備を挙げた者が65%と全学で一番多いことに関連しているであろう。施設・設備を改善・充実させることが望まれる。「所属研究科・専攻についての満足度」では、「満足している」が27%、「やや満足している」が23%と、満足度が高いとは言えない。図書館の利用状況では、「ほぼ毎日利用している」が8%、「1週間に2～3回ぐらい利用する」が17%、「1週間に1回程度利用する」が17%と、他研究科と比べて利用の頻度は比較的高い。「海外渡航の経験」では、「ない」が71%、「1回」が19%と全学平均とほぼ同じである。「英会話」については、「なんとか日常会話ができる」が48%と全学で一番多い。「語学についての自主学习」では、「英会話学校に通っている」が10%、「ラジオ・テレビの英会話番組で学習している」が14%、「TOEIC、TOEFL等を受験している」が16%あり、これらで40%となる。半数近くが英語の勉強をしており、これが或る程度役立っているようである。「本学の教育への期待」では「複数の教員による多様な視点に基づく教育・研究指導」を挙げた者が19%と一番多く、次いで「高度な水準にある他大学院等での勉学あるいは研究の機会」を挙げた者が17%である。総合的な教育・研究や他大学院等との連携などが重要と思われる。

「進路選択・就職」について、「博士（後期）課程への進学」は、全体の傾向に似ており、「進学したい」は6%にとどまり、「進学しない」が64%となっている。「奨学金等の経済的支援があれば進学したい」が10%、「未定」が15%あることから、博士（後期）課程が設置されると、進学希望者は少しは増えるかもしれない。また「本学または他大学への進学」は、本学を希望している者が全学平均の61%と比べれば少ないが、40%いる。留学生が人間自然環境に増えており、留学生には進学希望者が多いことから、全学的に博士（後期）課程の整備が望まれる。「進路選択で重視するもの」では、全学平均とほぼ同じ傾向にある。「能力を発揮できる場所」が27%、次いで「収入」が20%、「就職先の将来性・安定性」が19%等となっている。「進路を考える上での情報入手手段」でも、全学平均と同じような傾向にある。「就職情報誌・新聞・マスコミ」が26%、「先輩・知人」が24%等となっている。「希望職種」では、「教育職」が他研究科・教育部と比較すると16%と多い。これに比べると技術職は12%と全学的に低い。全体的に多様な職種を希望しており、人間自然環境の教育・研究体制が総合的であることを反映している。最後に「就職支援室の利用」では「現在も利用している」が17%と全学的に見ると一番多いが、「利用したことがない」も48%あり、さらに利用の促進が望まれる。

## 7-2 医科学教育部・医学研究科（医科学）

医科学の学生は今回の調査対象となる学生が1, 2年合わせても35人でもともと少なく、さらに回答を得ることができたのはこのうち24人である。この24人の回答者のうち社会人が7人、留学生が2人、

それ以外のいわゆる一般の学生が15人である。また、男子が10人、女子が14人である。実数が少ないので、各項目の比率を薬科学や工学と比較する際に注意が必要である。

このことを踏まえた上で現状を見ると、家庭の収入が少なく、自宅から通学している学生の比率が他の研究科より高い。自宅外の者の住居費は工学研究科と同等である。遠くから自動車を通う者もいるが、その割に事故にあったり事故を起こした者はいない。

半数が親からの援助を受けておらず、1か月7万円以上の収入をもっている者は1/3、支出が7万円以上の者も1/3である。食費は月2万円以下がほぼ半数で、生活が「やや苦しい」、ないし「大変苦しい」という回答が人間自然環境と並んで多い。かなり生活を切り詰めてやっているという印象である。ティーチングアシスタントをしている者も多い。その業務内容は他の研究科と異ならない。研究にあてる日数も時間数も栄養生命科学と並んで多く、その時間的制約からかアルバイトをしている学生はやはり栄養生命科学と同じく少ない。しかし、栄養生命科学と違って、週あたりのアルバイト日数は3日以上が多いが、その割に従事時間数は少ない。アルバイトの目的が生活費、学費、学会参加等のためである点は多くの研究科と異ならない。アルバイトの種類にも他の研究科との間に大きな違いはない。アルバイト収入はあまり多くなく2/3が3万円未満である。あまり割の良いアルバイトをしているとは言えない。アルバイトにおけるトラブルは率としては高いが実数が多いわけではない。

睡眠時間は6時間未満の者が多い。研究時間の長さ、アルバイト等のためと考えられ、大学として健康管理に注意を払う必要がある。気になる症状が時々あるとする学生が女子でやや多く、その中では比較的頭痛が多い。悩みや不安としては女子で勉学、就職、進路などが中心である。ただ、友人や家族等に相談しており、誰にも相談しない学生は少ない。なんとなく落ち込んだり、不安だったりもするが、その一方で充実しているという学生も多い。

迷惑行為などの学生生活上の問題点について、医科学に固有のものはないと言ってよい。指導教員との関係なども他の研究科と異ならない。大学事務室の対応への満足度が低い、栄養生命科学も同様であることを見ると、この点については内容をもう少し詳しく調査する必要がある。

本学を選んだ理由として、「希望する研究分野があるから」、「就職等将来を考慮して」の2項目の回答の比率(46%)は、栄養生命科学(42%)、薬科学(43%)、工学(40%)に比べて少しではあるが高い。目的では「研究者」がやや多く、「大学教員」がいない。これ以外の2分野はほぼ同じである。やや限定された意識と期待をもって進学してきたことがうかがえる。1週間当たりの研究時間は栄養生命科学、薬科学と並んで長く、教員による指導時間も長い。研究指導、研究環境に対する満足度は他の研究科と異ならない。研究科全体に対して不満と回答した学生の率も他の研究科とほぼ同じである。英語および英会話に対する関心は強く、何らかの努力をしている者が多い。パーソナルコンピュータを持たない学生の率が全体に比べてやや高い。本学の教育への期待には特徴はない。

博士課程への進学希望は比較的高く、その進学先として本学を希望している者が多い。学生は医科学を評価し、その内容に期待しているということと思われる。将来の就職先の希望は他の研究科とあまり異ならない。希望職種として研究職、技術職が多いのは大学院で修得した知識、技術を生かしたいという意識の現れで極めて当然と思われる。

設置されて3年とまだ歴史が浅いが、医科学の学生は厳しい経済状況の中で、目的意識と意欲をもち、大学院で修得できる知識や技術に将来を託して研究に励んでいると言えよう。ややもすると博士課程の定員充足のために進学する者にだけ目が行きがちだが、2年の課程のみで就職したいと思っている学生も半数近くいることを十分認識しておく必要がある。就職する学生、進学する学生それぞれの状況に応じた指導体制の確立が望まれる。



### 7-3 栄養生命科学教育部・栄養学研究科（栄養生命科学）

栄養生命科学の今回の対象者は53人で、回答者は35人である。このうち社会人は2人、留学生が5人、いわゆる一般の大学院生が28人である。また、男子が5人、女子が30人と女子が圧倒的に多いがこの研究科の特徴である。

家庭の年間収入は人間自然環境に近いパターンを示す。すなわち、500万円未満がほぼ半数を占める。住居区分では薬科学と同じく自宅が少ない。自宅以外の学生の住居費の区分がやや高いほうにシフトしているのは女子が多いためと考えられる。ほとんどが徒歩か自転車で通学可能な範囲に住んでおり、自動車通っている者は数名である。交通事故に遇った者が1人あるが、起こした者はいない。

1か月の平均収入は過半数が3万円未満である。5万円未満ということであれば工学と同等になるが、決して多いわけではない。これと反比例するように親等からの援助額は多い。これも女子が多いことと関係していると思われる。食費には比較的小金をかけており、これは研究科の性格を反映しているのかも知れない。経済状況については、「やや苦しい」と「大変苦しい」を合わせて46%と、全体の41%と大きな差はない。回答者の全員がティーチングアシスタントをしており、その業務内容は全体と比べて大きな違いはない。1週間の研究従事日数は医科学に次いで多く、研究従事時間数は最も多い。このような環境のせい、アルバイトをしている学生の率は34%と最も低く、アルバイトの従事日数も時間数も少ないほうである。また、生活のためにアルバイトをしているという学生の率も最も低い(16%)。アルバイト収入は多くないが、生活のためでないということであれば問題とはならないと思われる。

睡眠時間は6時間未満の者が多く、研究時間の長さが影響しているとも考えられる。医科学と同じく、学生の健康管理には十分な配慮が求められる。女子が多いことを反映して気になる症状が時々あるとする学生がやや多く、その中では比較的头痛が多い。悩みや不安としては女子で勉学、就職、進路などが中心である。ただ、友人や家族等に相談しており、誰にも相談しない学生は少ない。なんとなく落ち込んだり、不安だったりもするが、その一方で充実しているという学生も多い。

迷惑行為などの学生生活上の問題点について、栄養生命科学に固有のものはないと言ってよい。指導教員との関係なども他の研究科と異ならない。大学事務室の対応への満足度が医科学同様に低く、この点について内容をもう少し詳しく調査する必要がある。

本学を選んだ理由は全体の傾向とほとんど同じであるが、目的では「高度な知的社会人」が最も多く、「高度専門職業人」は意外と少ない。1週間の研究活動時間は全学中で際立って長い。研究指導は助手に受けることが多く、その時間は比較的に長い。研究指導に対する満足度は全体の傾向とほぼ同じである。研究環境については「満足」がやや少なく、「やや不満足」が少し多い。「不満足」の理由は「その他」が最も多く、個別のより詳しい調査が必要であろう。研究科全体については「不満足」、「やや不満足」は全体の結果とほぼ同じであるが、「どちらともいえない」が最も多く、「満足」は最も少ない。この点については、もう少し詳しい解析が必要である。海外渡航の経験者が他の研究科よりやや多いが、他の研究科同様目的として最も多いのは観光である。留学や語学研修を目的としたものはない。英会話能力は全体の傾向とほぼ同じであるが、薬科学に似て半数は何も努力をしていない。パーソナルコンピュータの保有率は全体と同じである。本学の教育に対する期待では「企業等での長期間の実践的なインターンシップ」を望む者が多い。本学を選んだ理由で「高度専門職業人」が少なかったという結果とはやや趣を異にしている。

博士後期課程への進学を希望している者は「奨学金受給」などの条件付き(6%)を含めても26%で、未定が29%と多い。しかし、進学希望者のほとんどは本学を希望している。勤務先として重視する条件に「能力を発揮できること」の次に「地理的条件」をあげる者が他の研究科より多い。出身地の近くで就職したいということであろうか、それとも都会に出たいということであろうか。就職を考える上での

情報入手手段では「就職担当教員」が0%である。これで機能しているのであろうか。希望職種としては「公的ないしは企業等の研究職」が多く、専門職がこれに次ぐ。「研究職」にはつきたいが、その割に博士後期課程進学に消極的なのは、何故であろう。栄養生命科学のスタッフはこの結果をどのように見るであろうか。

栄養生命科学では生活一般に関しては女子が多いことを反映した結果で特に問題があるようには見えない。研究活動については学生、指導者双方が力を入れており特筆に値する。それにも関わらず、研究科全体としての満足度が低いことには検討されるべき課題が含まれていると言えよう。

#### 7-4 薬科学教育部・薬学研究科（薬科学）

薬科学には創薬科学と医療生命薬学の二専攻があり、本アンケートの回答者はそれぞれ53名、52名の合計105名（アンケート対象者118名）で、薬科学全体での内訳は男子63名、女子42名であり、また一般大学院生、社会人大学院生、留学生別ではそれぞれ100名、5名、0名であった。

薬科学を選んだ主な動機として、「出身大学だから」と「就職等将来を考慮して」の回答がそれぞれ30%と29%で、これらをあわせると全体の過半数をしめる。昨年度の学部学生を対象とする対応する項目の調査結果では「希望する学部学科があったから」と回答した薬学部学生の割合（34%、アンケート回答者293名）は他学部に比べて高かったが、上記の結果は就職等の進路の選択が差し迫っていることを反映していると思われる。所属教育部・専攻について「満足している」と「やや満足している」の回答はそれぞれ45%、26%であり、他の教育部・研究科（以下、研究科と略す）に比較してこれらの割合の合計は大きく、この結果は薬科学における教育・研究内容と大学院生の進路希望が比較的マッチしていることを示唆していると思われる。研究指導と研究環境の2項目についての満足度では、「満足している」と「やや満足している」の回答をあわせるとそれぞれ65%と63%となり、これらの項目については約2/3が「満足している」状況と考えられる。研究の指導教員は半数に近い44%が教授となっている。1週間に研究の指導を受ける時間の項目では1時間半以上の割合は全体平均に近い約1/3である。図書館の利用頻度については「2週間に1回以上利用する」が過半数の51%をしめ、比較的高い比率となっている。「本学の教育への期待」の項目において他研究科と比較して18%とやや割合の多かった回答は「高度な水準にある他大学院等での勉学あるいは研究の機会」であり、他の大学院や産官学の研究機関との連携を意識していることが読み取れる。語学についての自主学習の項目では、「何もしていない」の回答が56%をしめ、他研究科と比べやや大きな割合となっている。今後ますます研究の国際化が進むことを考慮したとき、語学の自主学習へのさらなる努力が必要と思われる。

自宅通学者の比率は17%で他研究科（全体では27%）に比べて小さいが、これは地元出身者の数が少ないことによると思われる。一般に生活費が高額になる自宅外通学者が80%と多いことを反映して、1か月の平均収入額は5万円以上が48%、支出額では5万円以上が69%をしめ、全体と比較すると収入・支出額ともに多くなっている。また住居費も4万円以上が63%と他研究科に比較して最も大きい割合になっている。住宅に関して、「満足している」と「やや満足している」の回答をあわせると65%となり、過半数の薬科学の大学院生は住宅に関しては大きな問題を感じていないと思われる。他方、6%が「不満足である」と回答している。薬科学の家庭の年間所得を見ると500万円以上のしめる比率が53%と5研究科中で最も高く、かつ250万円以下が12%と最も低い割合であり、家庭が比較的裕福なことも収入・支出額が比較的大きい理由の一つと考えられる。奨学金受給者の比率も32%と低い値となっている。

アルバイトに従事する大学院生の比率が69%と5研究科の中で最も大きい割合になっている。従事日数2日以下が79%、かつアルバイト収入が5万円以上の比率が59%である結果から、時間当たりのア

アルバイト収入が比較的高額であることが分かる。この結果は薬剤師免許を持った大学院生のアルバイトの条件が恵まれていることを示している。また薬科学では62%の大学院生が1週間あたりの平均研究日数は6日以上と回答しており、時間的制約もアルバイト従事日数が比較的少ない理由であろう。アルバイトの紹介者を見ると、その69%が友人・知人を通してであることから、薬局等のアルバイト先の紹介は口コミで行われているようである。一方、ティーチングアシスタントの従事割合は14%であり、他研究科に比べ小さい割合になっている。ティーチングアシスタントについては各研究科での割り当て等の問題があるが、本学全体でできる限り均等になるような方策が今後必要となろう。家庭の経済状態は比較的裕福であるものの、薬科学の大学院生の39%が経済状況について「大変苦しい」あるいは「やや苦しい」と回答している。これは薬学部学生の調査結果(36%)とほぼ同じ割合であり、やはり全体の1/3以上の薬科学の大学院生は「苦しい」経済的状況にあると判断できる。

健康状態については5名が4時間未満の睡眠時間であることを除き、全体から見ると特に目立った問題はないと判断される。ただし、保健管理センターに関する項目において「保健管理センターは知っているが行ったことはない」とその利用については「特に考えていない」がそれぞれ30名と24名と高い割合をしめている。保健管理センターの蔵本分室の積極的利用について今後周知させることも必要と考えられる。「通学中に交通事故の被害に遭ったことがあるか」については、男子8名、女子7名が「あり」と回答している。これは自転車通学が67%と高い比率であることがその原因の一つかもしれない。学生生活上の問題点については迷惑行為での「いたずら電話をうけた」の回答が13%(男子5名、女子9名)と最も大きな割合をしめていることから、大学院生についても学部新生と同様にそれらの対処法と学生生活上での種々の注意を周知すべきと思われる。「大学内でセクハラを受けた」と「大学内でアカハラを受けた」の回答数は、それぞれ2名(女子2名)、5名(男子3名、女子2名)で、これらを無くす努力が教員に強く求められる。

博士後期課程への進学希望については11%と蔵本キャンパスの他の二研究科(医科学 29%、栄養生命科学 20%)に比べて小さな割合となっている。来年度からの薬学部6年制がスタートすることもあり、今後も薬科学での検討事項になろう。進路選択で重視する項目については27%が「就職先の将来性・安定性」で、25%が「能力を発揮できること」であり、この2つの回答の比率をあわせると約半数となる。希望職種では最も多い比率である36%が専門職(薬剤師)で、次に24%が企業の研究職となっている。学部学生への調査結果では薬剤師が45%、企業の研究職が21%と回答しており、これらと比較すると研究職志向の割合の増加が読み取れる。大学院生の進路選択・就職については就職支援室との連携を保ちながら、よりきめの細かい就職指導や進路指導を行なう必要があるだろう。

## 7-5 工学研究科(工学)

今回の調査における回答数771のうちその約72%にあたる555は工学の学生の回答であり、この調査結果から工学の博士前期課程学生の学生生活のあらましが読みとれる。学生は、約70%が家族から離れて生活をしており、これは昨年の学部学生とほぼ同じ割合である。通学時間は15分未満と答える学生が70%以上で、60%以上の学生が自転車で通学している。通学中に交通事故を起こしたあるいは被害にあったことがある学生が共に10%程度おり、学生への注意を今後も続けていく必要がある。一方、工学部構内に駐車スペースが少なく、現在、社会人学生以外構内への駐車を許可していないが、駐車場がほしいとの意見もある。

学生の経済状況については、親からの援助は、全くない学生から10万円を超える学生まで広く分布している。しかし、生活が非常に苦しく定期的アルバイトを必要とする学生が12%おり、アルバイトがこれら学生の勉学に支障を与えている可能性がある。アルバイトをしている学生は工学全体の5割を超え、

そのうち、ほとんど毎日のようにアルバイトをする学生が20%程度（1週間に4日以上）、1週の従事時間が15時間を超える学生も同程度いる。アルバイトの種類は「家庭教師や学習塾講師等」が一番多いが、「飲食店手伝い」と「受付・接客」を合わせるとそれを超え、アルバイトで経験したトラブルに「客とのトラブル」を挙げる学生が多い。多くの学生は、アルバイトを「友人・先輩」から紹介されているのが現状で、勉学への負担が少ない週2日程度の軽度のアルバイトと、学生にとってプラスになる面が多いティーチングアシスタント等で学生が必要な収入を得ることが望ましい。一方、アルバイトの目的に「生活費や学費のため」と答える学生のほか、「日常の娯楽・嗜好品等購入のため」や「レジャー・旅行費のため」も多く、アルバイトの収入が学生生活を豊かにするためにも使われており、アルバイトも学生生活の一部と考える学生も多いと思われる。

学生生活における悩みや不安について、「勉学」と「就職や進路」と答える学生が多く、その相談相手は友人、次いで家族が多い。教員との研究以外での対話は比較的少なく、悩みの相談も少ないようである。また、教員と研究以外のことで話をしたことが「全くない」と答えた学生は工学全体の16%であった。また、30%以上の学生がいたずら電話などの迷惑行為を受けた経験があり、少ないがアカハラやセクハラを受けたと答えた学生もおり、教員と学生が積極的に対話し、教員と学生の良好な関係を保つ環境づくりも課題である。また、クーリングオフ制度について留学生在がほとんど知らないという調査結果が出ており、留學生への周知が必要であることが第4章で述べられている。盗難や痴漢などの被害にあったと答えた学生も全体の20%おり、犯罪に遭わないあるいは犯罪を起こさないためのガイダンスを続けなければならない。大学事務室の対応について、全体の30%に近い学生が「不満足である」と答えており、自由意見で指摘する学生もいた。

入学理由（複数回答可）に「出身大学だから」を挙げる学生が多い一方、多くの学生が本学大学院での研究活動に期待し、就職等の将来を考えて入学している。「高度な専門知識・能力」、「創造性豊かな優れた研究・開発能力」、「高度で知的な素養」を身に付けることを望んでおり、「体系的に履修するコースワーク」、「多様な視点に基づく教育・研究指導」、「実践的なインターンシップ」、「高度な水準にある他大学院等での勉学・研究の機会」、「産業界・地域社会との共同研究」など、多様な教育を期待している。所属している研究科・専攻について不満に感じている学生は、「やや不満足」を入れて13%、教員の研究指導および研究環境についても、全体として不満を訴える学生は10%台であり、全体として、学生が勉学や研究に積極的に取り組める状況にあることが窺える。ただ、一部、自由意見で、研究指導に不満を訴える学生もおり、これら個々の学生へのケアとともに、教員と学生との良好な関係を保つことが重要であると思われる。社会人と留學生の満足度は一般学生よりも高く、特に、留學生については、研究指導、研究環境、所属研究科・専攻のすべてについて、満足度は一般学生を上回っていた。

工学全体では、学生の1週間の研究活動時間は10時間以上が多く、研究指導についてはすべての教員が分担して行っている状況にある。しかし、1週間に研究指導を受ける時間は学生によって、「30分未満」から「90分～5時間未満」まで広く分布しており、学生の希望や研究の方法など複雑な問題があるが、学生の不公平感や不満に繋がる可能性もある。また、医科学、栄養生命科学、薬科学に比べて、全体として研究活動時間が少ない方に偏っている。博士後期課程への進学希望の割合も、医科学、栄養生命科学、薬科学に比べて少ない傾向にあり、毎年、授業料免除を申請する学生が多く、生活費や学費のためアルバイトを必要とする学生も多いことから、経済的な支援の充実と勉学・研究に専念できる環境づくりに今後も努力していく必要がある。

語学力向上のため、現在、60%程度の学生はTOEIC等の受験のほか、「英会話学校に通っている」「ラジオ、テレビ等の英会話番組で学習している」など何らかの自主学習を行っており、国際学会参加や海外での研究活動への経済的支援や、外国人と日常的に英語でコミュニケーションする環境づくりなど、英会話が「あまりできない」と「できない」と答えた学生（全体の75%）を減らす方策と支援が、学生

にとって大きなプラスになると思われる。

就職活動は学生の大きな関心事であり、「収入」、「就職先の将来性、安定性」、「能力を発揮できること」、「勤務先の地理的条件」が進路選択で重要と考えている。その情報は主として「先輩・知人」、「就職情報誌・新聞・マスコミ」から得ており、「就職担当教員」は全体の6%で、自由応募で就職活動する学生が増加しているためと思われる。最近、就職支援室において、就職ガイダンス、模擬面接等のサービスを行っており、これらの積極的な利用も必要である。



## 第8章 総括と提言

今回の調査は、徳島大学において初めて、大学院修士課程・博士前期課程の全大学院生（1,031名）を対象に実施され、771名（75%）から回答を得たものである。調査項目は、生活一般、経済的側面、健康管理、生活上の問題点、修学、進路の6項目である。

先の中央教育審議会の答申（平成17年9月）には、国民、国、産業界から求められている大学院教育の課題として、1. 大学院教育の実質化、2. 国際的な通用性、信頼性の向上（質の確保）、を通じて教育研究機能の向上が挙げられている。このベクトルの中で徳島大学の大学院生が今いかなる学生生活をしているのかを把握し、本学大学院の課題と問題点を探り、改善への取り組みへの手がかりにすることは極めて重要なことである。今回の調査結果を分析したことをもとに、学生生活の支援の立場から、以下に総括と提言をまとめた。

1. 経済的側面：自活学生が半数近くおり、TA やアルバイトによる収入が不可欠である。

大変苦しい者が10%程度いる。さらに日本人、留学生双方の半数程度が苦しいと答えている。経済的支援のあり方として、奨学金や授業料免除制度の拡充をはかることやTA・RA制度も運用実績と採用希望数をマッチさせて運用する工夫が必要である。

2. 健康面：睡眠時間については30%余りの学生が6時間未満である。睡眠時間の確保は集中力、活動能力を確保する上で重要であり、事故防止にもつながる点で大切である。

また気になる症状が時々から常にある女子が56%、男子で37%いる。健康管理の指導の必要性があるとともに、大学院生の健康管理においても保健管理センターの役割が期待されている。

3. 生活上の問題点：何らかの迷惑行為を受けている者が40%弱いる。迷惑行為に対する相談窓口としての学生相談室の必要性が指摘される。また、20%の者が大学構内で盗難被害にあっていることから、本学として大学構内の治安確保につとめる必要がある。

4. 修学：人間自然環境では研究者をめざす者が少ないのに対して、それ以外の研究科では研究活動に主体があり、高度専門職業人、研究者をめざすものが多い。このことは、学生の多様なニーズに答える教育と研究指導の必要性があることを示している。また、研究や学習の指導に対する満足度は「やや満足」と「満足」で62%であるものの、不満を抱く者も13%いる。これらの不満を持つ者に対しては個別に対応していく必要があるといえる。研究環境については61%が一応満足しており、不満を持っている者は19%である。

内容としては施設・設備の点が多めで、次いで、研究費用の充実などが挙げられている。さらなる研究施設・設備の向上と研究費の獲得への努力が必要であることを示している。図書館の利用度では、一般大学院生は15%で学部学生の半分である。大学院生はインターネットを活用して文献検索することが多いことから、専門書の充実や文献検索の利便性向上やダウンロードできる雑誌の充実が研究環境の整備には、さらに必要であるといえる。一方、留学生には希望する研究分野があるという意見が多く、概ね留学生の勉学意識の高さが伺える。

留学、学会参加や学術調査の目的での海外渡航をした者が33%いる。海外出張や学会参加の際に、旅費支援などの方法で積極的に海外経験を支援をすることが国際性を有する人材の育成の促進につながると考えられる。しかしながら、英会話能力については「70%以上の学生があまりできない」か「できない」と答えており、大学院共通教育カリキュラムで実践的な英会話教育コースの設定などが国際的に通用する大学院生の質の確保の点から必要であるといえる。

本学への期待としては、体系的に履修する仕組み、複数教員による教育・研究指導、インターンシッ

プ、他大学での研修の機会、産業界や地域との連携、個々の教員の研究教育指導能力の向上など、多様な要望・ニーズがあることから、これらの要望に添った様々な教育・研究指導を受けることができるように大学院教育プログラムを設けることも、その評価方法の確立とともに、改善を図る上で重要であるといえる。

5. 進路・就職：医科学では進学したい者が50%に対して、それ以外では26%以下であり、特に工学系では10%にとどまっている。この中で、奨学金などの条件を整えば、進学を考慮する者が全体で6%いるのは見逃せないところである。奨学金や成績優秀者への授業料免除制度の拡充が必要であるといえる。

進路選択における情報入手手段として就職担当教職員の占める割合が少ない点や就職支援室の利用が少ない点は改善が必要であるといえる。

今回の調査結果の総括から、現在の大学院生が抱える問題やニーズを知ることができる。徳島大学がこれらの問題にいかに対応していくかということで、本学の大学院教育にかける熱意や教育力が試されているといえる。国立大学が独立行政法人化されることで、護送船団方式によって保護される環境から、国際的な競争的環境下へ置かれ、さらに世の中の価値観や制度が急激に変化する時代のなかで、「人材育成」と「科学研究の推進」という「大学の機能」を着実に発揮し、社会的貢献を担いつつ、国民的評価を得るためには、まず、学生のニーズに応える教育・研究指導を構築・改善を計るとともに、施設・設備の一層の改善・向上、大学院の教育・研究への十分な費用の配分や獲得の必要性があるといえる。また、少子化時代を迎え、大学院へ入学する優秀な人材の確保のための配慮として、各種奨学金制度の整備や特待生制度の創設などを工夫していくことは忘れてはならない課題である。

今後、世界的規模での「大学院教育力」の競争のなかで、国際的に活躍できる人材を輩出し、研究活動を発展させていくためには、本学の組織力とわれわれ個々の教員の創意工夫にかかっていることは間違いない。今回の調査結果が、本学大学院のプログラム設計に役立つことを願うとともに、個々の教員の創意工夫の提案のきっかけになることを期待している。

# あ と が き

この度、徳島大学において大学院生を対象とした第1回の学生生活実態調査を平成17年11月1日から11月11日まで実施した。調査対象は、本学大学院修士課程・博士前期課程に在学する学生全員1,031人で、771人(74.8%)から回答を得た。調査項目は従来の学部学生のものとは別に生活全般や教育研究の実状を幅広く把握し、本学の施設・教育研究環境の改善並びに修学支援に資する資料が得られるように、徳島大学学生支援センター学生生活支援室運営会議において審議を重ね、大学生活における経済的側面、家族の問題、健康・生活上の問題、学習・研究・指導の状況、将来の進路や人生設計、等の諸点に配慮して大学院生用の質問項目を新たに選定した。さらに今回の調査項目を作成する際に留意した点は、昨年9月5日付けで公表された中央教育審議会の答申書(「新時代の大学院教育―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて―」)に掲げられている施策を点検し、大学院を取り巻く社会状況を踏まえたこと、大学院生が経済的支援を受けているTA・RAの制度などの運用状況の調査も取り込んだことが挙げられる。

平成16年度に実施した大学生の生活実態調査の結果と合わせて、徳島大学における大学院生の生活の実情を少しでも多くの大学構成員の方々に知って頂き、調査結果が教育現場や大学運営にフィードバックされ、活用されていくことを期待している。

最後に、今回の調査にご協力を頂いた大学院生全員と調査・分析のお骨折りを頂いた委員の方々並びに報告書作成の作業を支援して頂いた学生課職員諸氏にこの場をお借りして深く感謝と御礼を申し上げたい。

平成18年3月

学生生活支援室長

野 間 隆 文



キャンパス  
ライフ

# Campus Life

第1回大学院生生活  
実態調査報告書

平成18年3月

徳島大学